THE CENTRAL REVIEW

中央公論

第廿四年 第十二號

第二百四十九號



百萬の婦人

クラブ洗粉の
効果を愛し

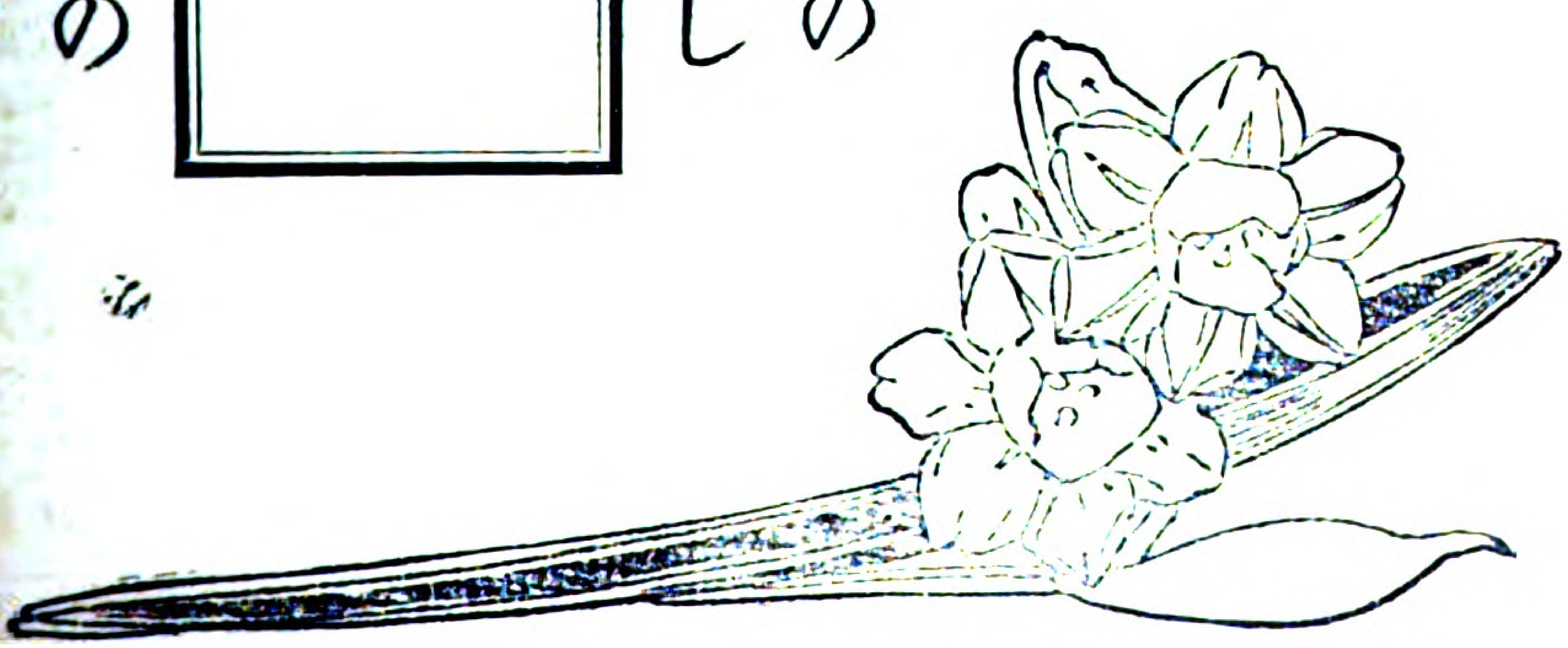
倶樂部の製品は
總て顧客に忠實にして

倶樂部の廣告は
常に正直なる誓言なり

是れクラブ洗粉の
聲價を得たる第一の理由

拾萬の紳士

クラブ洗粉の
眞價を賞す



理想的新意匠日誌

實業之日本社編輯局編纂

明治四十三年 重要日記

金文字總クロス
價五拾錢
郵税八錢

實業之日本社發行の重要日記は限なく注意行渡り飽くまで實用的にして便利重寶、眞に日記中最良の者なりとの好評を博せり四十三年度は更に

多年日記を附けたる人の經驗に基き

新意匠を凝らし内容を整ひ他に類なき日常必需の附錄を附し繪畫を挿入し

此上一點の申分なき迄に完備整頓せり

用紙は舶來最上、體裁は優美高尚、製本は堅牢無比、當に是天下一品

他に見ざる大特色

▼**舊曆**を附す來年は暦本に舊暦を省き本日記以外舊曆を見る不能

▼**衞生**欄を家庭暦に新設す將來の特色の外に諸病の手當を知り得

▼**季節**表を色刷にして卷頭に掲ぐ卷末の新舊曆對照表と共に無類

▼**詩文**金言歴史繪畫等を適宜に配置す趣味豐富他の模倣を許さず

▼**豫定**欄適要欄は本日記特得のもの有益無比なるは新に言を不須

▼**附錄**には各宮家御住所△皇室皇族郵便電信規則△諸税規則其他

東京 實業之日本社

電話新橋八七四番
郵便振替口座三二六番

己酉文壇掉尾の偉觀

文藝倶樂部

毎月一回 増刊年四回

十二月一日發行 第拾六號 正價廿五錢 郵税二錢 ◎半前金四冊九十五錢 八冊壹圓八十錢 外郵税

本號の呼び物

◎脚本 吸血鬼……長田秋濤

◎小説 うたがひ……小林蹴月

◎小説 あの娘……小山集川

◎小説 寛容……松原正光

◎小説 友……馬場清唱

▽演藝界……▽忙中閑……

▽活社界……▽流行界……

▽長廣告……▽百花園……

▽講談……口繪は依例

▽落語……新麗鮮美

▽紹介……

東京本町 博文館發行 （振替口座二四〇番）

此廣告により御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

法學博士　江木衷先生著

冷灰三筆　山窓夜話

全一册
正價金六拾錢
郵税金八錢

曩に冷灰漫筆の出るや。近來得難きの快著と呼ばれ獨創的の奇言珍語と評せられ或は冷灰一流の怪文字と稱せらる。今や更に此著あり。奇書中の奇書也怪文字中の怪文字也。其論旨の高下趣味の深淺は一に讀者の識見如何にあらん。

冷灰漫筆

目次概要

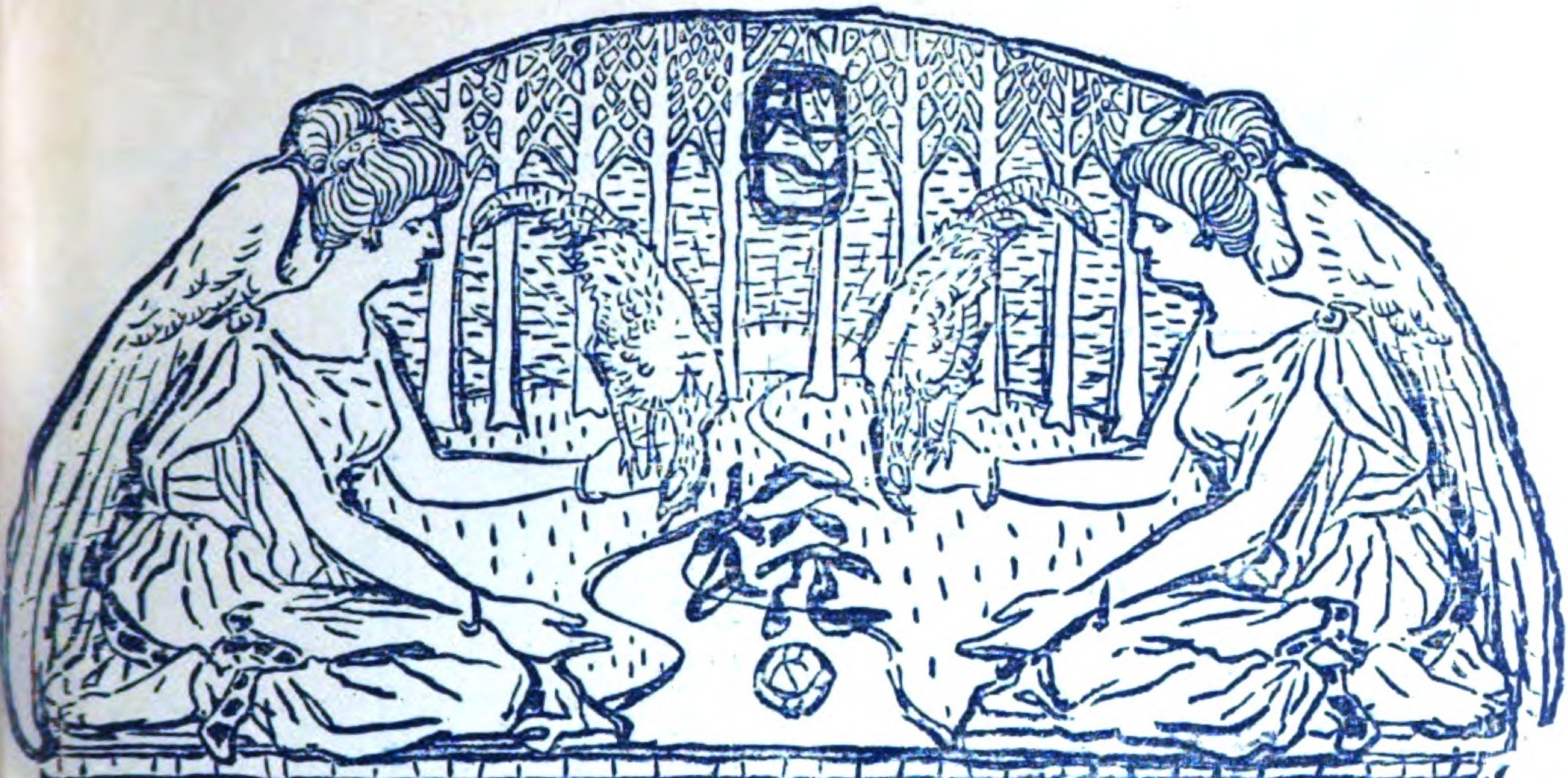
萬國無比の日本時文、趣味の說、所謂俳句の秘訣、漢詩と雲助歌、支那文學と日本趣味の梅花と櫻花日比谷公園の月桂樹。慕而似趣味と似而非趣味、自然主義の小說と法律、人道と基督教、廉價なる哉日本人民の生命、罷官夢姑清、巡査の裁判、法廷の趣味、法遠主義不得要領の說、陪審制

殘本僅に二千部限

全一册
正價金五拾錢
郵税六錢

發行所　東京神田一橋通り町　有斐閣書房
電話本局三二三番
振替東京三七〇番

信用なき店舗及卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す



中央公論第二十四年第拾貳號目次

▲公論

▲海外

▲説苑

澁澤榮一論



新刊廣告

早稲田大學講師 五十嵐力著

新文章講話

背皮金文字入 高雅製本 全一册 紙數七百四十餘頁

正價金壹圓七拾錢 小包料四百匁

本書は、文章講話を原材として新に稿を起したもの、著者十年の苦心によつて古今東西の文章論を統括融合したものである。

期する所は、

一、材料引例の全く新なるもの、

一、組織説明の新なるもの、

一、新思潮に觸れたる青年の心情に響くもの、

一、國民の文章趣味を高むるもの、

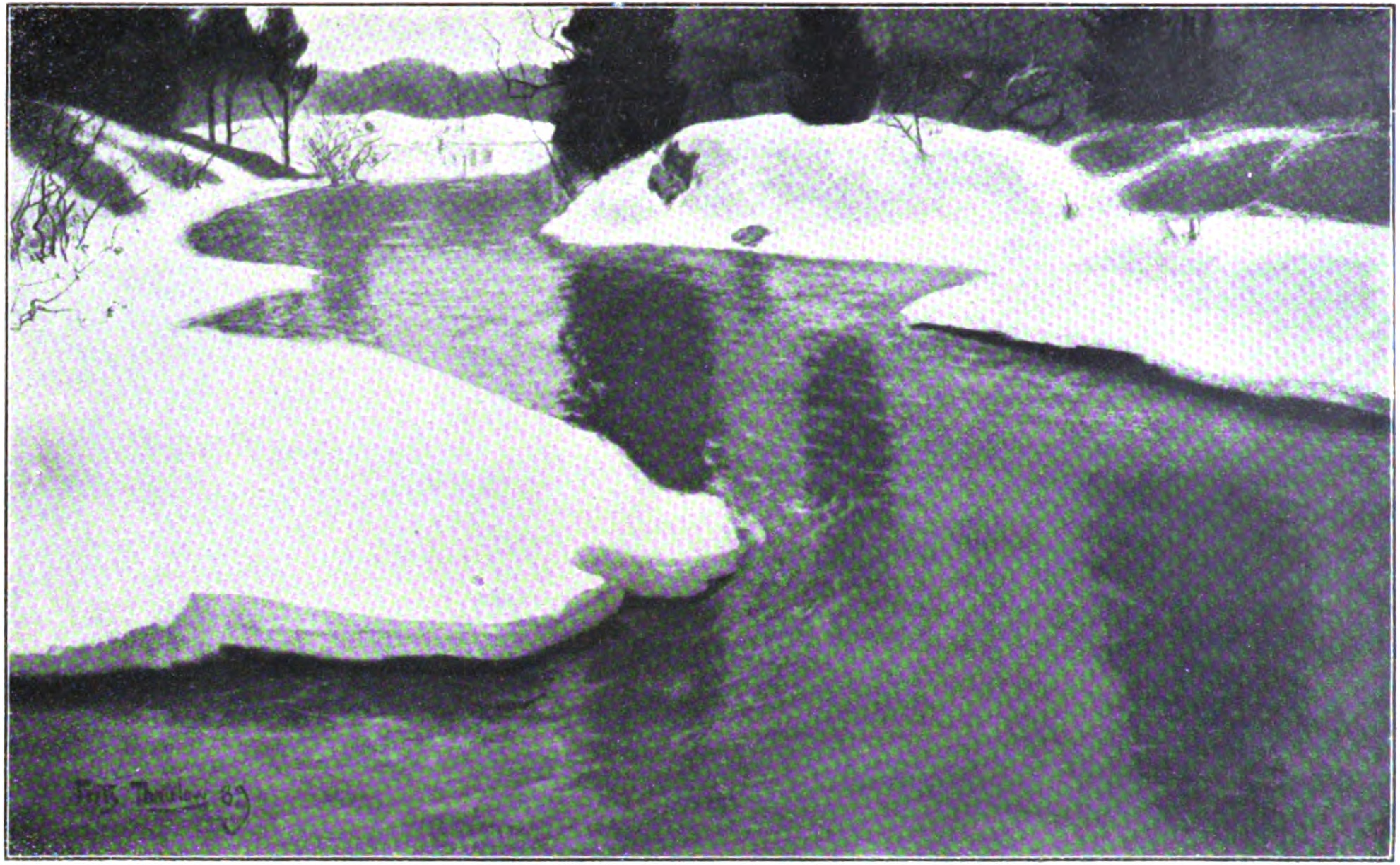
一、アリストートルの『レトリック』以來、劉勰の『文心雕龍』以來、空海の『文鏡秘府論』以來、和漢洋の主要なる文章論を收めて、活きたる新組織、新説明を與へ、文章修辭の專修者にあらざる限り、此一書を讀めば十分といふ程に備はつたもの、

本書は、斯樣なものを作りたいといふ、眞面目なる努力に成つた、自信ある作である。

發行所 牛込早稲田 早稲田大學出版部 振替口座 東京一二一三番

發賣所 東京日本橋本町 博文館 振替口座 東京二四〇番

„ *Eisbroch* “



FRITZ THAULOW

見よ!!

中央公論新年號

創刊第二十五年
二百五十號紀念

論文に於て已に寄稿の快諾を得たるは

丘淺治郎　山田三郎
金子筑水　和田垣謙三
三宅雪嶺　池邊吉太郎

の諸氏にして尚引續き第一流の名士に依頼中なり又本誌の呼物たる人物評論は

山本伯と寺内子

の標題を以て政治家及び批評家の忌憚なき批評を蒐集すべく說苑欄の呼物としては

變な女 ……… 冠



第二十四年
第拾貳號
第二百四十九號

伊藤公歿後の形勢

(一)

伊藤公の慘死に對する世間の同情は、幾んど其の最高潮に達したるが如し、國葬當日に於ける市民の表情に視るも、大井村なる谷垂墓地に於て今尙ほ詣者の絡如として斷へざるに徵するも、甚だしきは松藤神社に合祀せんと企つるものあるに考ふるも、以て其の一端を推知すべし。

此の高潮は豁然として公の從來の毀譽を一洗し去りたるが如きも、公既に棺を蓋ふ、公の批評は是より大に定まるべし、新聞紙は競ふて公の勳業を頌し、或は及ばざるを懼るゝが如くなりしも、畢竟は俗新聞一流の型式のみ、歷史は墓を發きて死屍に鞭つことをも敢てすべく、梟木より首を下して破するに錦

趣を以てするとをも敢てす、故に眞正なる批評家は、一時の俗説に泥まずして能く人物の志行と事態の表裏とを達觀するに努む、新聞紙の議論の如きに至ては、全く眼外に措くべきのみ

吾人の公に對する亦斯の如し、而して公の死に由て、一の教訓と一の認識とを得たるとは、玆に之を告白するの要を感ず、是れ操觚者として小ならざる任務なれば也。

（二）

伊藤公は富人にてはあらざりき、在官幾十年、富を累ぬると幾百萬、彼の井上侯松方侯の如き能はざりき、素より到る處金錢に不自由せず、口に山海の珍を絶たず、坐に美人を擁するに何等差支なく、其の生活の放縱にして而して貧寒ならざりしや言を俟たざるも、政事家としては當世に珍らしきまで淸廉なりき、其の東荷村に祖先を彰はすべき建築を爲すにも、尙ほ書畫珍玩を賣て以て辛ふじて其の資を辦じたりしに視れば、死して餘財の多からざるは勿論ならん。

然かも其の葬儀の國葬とせられ、殊に列國元首の弔慰を享け、皇族の參拜を忝ふして中外に光耀したりしは何ぞや、黄金の萬能を信じ、黄金の多寡を以て人物の高下、事功の大小を卜すべしと做し、黄金を積むを以て唯一の成功とする者は、玆に至つて思ふべし、名譽の大なる、竟に黄金の得て購ふ可らざるものあるとを、伊藤公の勳業は黄金に依て得べからず、黄金は以て盛大なる葬儀を營み得べきも、皇族の參拜を忝ふし、列國元首の弔慰を享け、海陸軍の儀仗兵を得べからず、幾億金を積むも竟に一の國葬を得べからず、名譽の人生に尙ぶべくして、而して國家に勳業を建つる所以の尊きと、遙かに黄金山

積の上にあると、茲に至て明白ならん、擧世滔々黄金を徇び、黄金の外、名譽の更に徇ぶべきを知らざるもの、茲に至て少しく俗念を脱する所以を悟るべき乎。

伊藤公の棺側には、世界の偉人として名を知られし東郷、乃木の兩大將ありき、其の棺後には山縣、大山、伊東の三元帥ありき、國務大臣以下、文武大官も亦悉く徒歩して隨ひたりき、英國の元帥キチナア卿も參列したりき、列國元首の贈れる花環、天皇皇后兩陛下以下各皇族の賜はれる榊も葬列にありき、世界隨一の富豪の葬儀と雖も、豈之を能くす可けんや、況んや岩崎三井輩の葬儀をや、況んや富之に及ばざる者の葬儀をや。

伊藤公の死するや、世界の新聞紙は皆謹肅なる弔意を表したりき、頑迷にして事體に通ぜざる清國の或る新聞紙、及び世界の形勢に通ぜざる未開國の片田舍の小新聞を除くの外は、皆心よりして公の死を悼み、公の肖像傳記を掲げざるなく、日本の新聞紙に至ては、幾んど連日其の全幅を擧げて公の爲めに費したりき、富豪にして人格の完全なるもの頗ぶる世に悼まるゝと雖も、未だ曾て公の如きには至らず、否其の十分一に及ぶものすら之あらず、名譽の竟に黄金に優さる所以知るべきのみ。

此の教訓は、吾人見て以て頗ぶる高貴なるものとす、其の世道人心に資する所思ふに少小ならざるべし、茲に於てか吾人殊に之を擧げざるを得ざる也。

(三)

伊藤公が其の心曾て君國の外にあらざりし一事は、其の至誠を以て君國に捧げたりし一事は、忠良の

龜鑑として應さに千秋に垂るべし、菅原道眞と雖も以て公に加ふるに足らざる也。

然れども之あるが爲めに、公の私行の放縦にして不謹愼なりしとは恕す可らず、世を累ね年を閲するに隨つて、其の私行の瑕瑾は漸くにして晦隱斷滅すると、猶ほ多くの史上の人物の如くならんも、然かも吾人現代のものに取ては、公の私行は餘りに嶄新にして且つ餘りに明白也、現に公の慘死を悼みて其の平生を傳ふる新聞紙上、待合女將の談話なるものを挾み、或は公の狎昵せる幾多の醜業婦の寫眞と談話とを加へしが如き、甚だしきは國葬當日の狀況を報ぜんとして、此等醜業者の消息を明らかにしたるが如きは、極言すれば公に加ふる一種の侮辱に外ならざる也、唯だ公平生の素行此の侮辱を甘受せざるを得ざるを奈何ともする能はざるのみ。

思ふに公の放縦にして醜業者の間に出入し、彼等をして其の堂々たる公爵大勳位の本邸に往來せしむるに止まらず、自からは夷然として彼等と飲み且つ戯むれ、其の淫聲醜聲を傳ふるも曾て意とせず、恰かも一種の蕩兒冶郎の態を脫せざりしは、多く世の嗤笑を招くと共に、また畏憚されざりし一原因にして、以て少からず世の忌嫉憎惡を薄らぐる効果ありしと蔽ふ可らず、然れども公の心事の忠良なりしに似ず、其の公人として心を秉る淸平廉潔なりしに拘らず、私行に於て放縦不謹愼なりしがために、完人として殆んど神々しきまでに一代をして敬虔せしむるに至らざるは、吾人の私に痛恨する所とす。

若し夫れ公を以て模範的人物と做し、之を中小學の修身講話に須ゆるが如きは、思はざるも亦甚だし、菅原道眞が筑紫に配流中、尙ほ胤子を絕たざりしに徵すれば、其の私行の議すべきもの絕無にはあらざ

りしなるべし、楠正成と雖も亦或は然るべし、然れども今は許されて以て批すべき史料あらず、乃ち完人として、忠良の龜鑑とせられ、竟に神として千秋に祀られ、常に模範人物とせらるゝ所以なるも、伊藤公の私行上に於ける瑕瑾に至ては、何人も之を知らざる莫し、單に公の心事の純忠なりしと、其の君國に盡したる勳業の偉大なりしと、隨つて其の結果として至大なる名譽を得たりしと、及び其の名譽の竟に黄金に優さるの遠きとは、以て一世に傳へ、千秋に垂るゝに足ると雖も、之を模範人物として中小學生に示すに方つては、嚴格に其の私行を除外せざる可らず、然らずして若し大功は細瑾を疾まずといふが如きに至らば、其の世道人心を毒するも狹少ならざらんとす、是れ明白に認識せざる可らざるものゝ一として、吾人の敢て之を指摘する所とす。

（四）

伊藤公は我が政治家中勳業と閱歷とに於て最も大なる政事家なりき、隨つて公の死の我が政治界に及ぼすべき影響如何は、政治に趣味を有するものゝ齊しく問題とする所なるべし。

伊藤公の薨去を以て直ちに我が外交に影響ありとし、甚だしきは公を以て我が政治の中心點なりと做し、公の死は此のバランスを失ふものなりと視るに至るあるも、謬見の甚だしき恐らくは斯の如きは莫かるべし、蓋し公は漸くにして我が政治の中心より離れ去りつゝありき、素より元老の首班として、其の閱歷勳功の高くして大なる、何人も比肩する能はざりしと雖も、元老其のもの既に漸く政治の中心に遠く、國家の大事あらざる限り多く大政に參與せず、現に我が外交上の最大問題たる日英同盟の如きも、

公は勿論門外漢にあらざるも、終始其の謀計に關係したりしにはあらず、之より生じ來りし露佛米淸の協約に於けるまた然り、公は始め日露戰役後、大政の方針を定むる會議に與かり、爾後內外の大問題ある每に、其の由來及び結果の報告を內閣より得たると言なきも、然かも其の衝に當て鹽梅料理するには與からず、助言若くは容喙することをも敢てせざりき、隨つて公の死のために、我が外交の方針に異動あらんと猜するが如きは、謂れなきの甚だしきものとす。

然れども公の死を以て全く一波紋をも生ぜざるものと做すは樂觀に過ぐ、少くも政友會は最も痛切なる刺衝を感ずべく、隨つて此の衆議院に於て兎も角絕對的多數を有する最大政黨を透して、政治界に若干の波動を及ぼすべきや自明の理也、唯だ其の波動の大小良否如何、是れ容易に語る可らずと雖も、然かも政治界に在ては最も興味饒き問題ならずんばあらず。

（五）

伊藤公は總てに於て恬淡にして而して執着せざりき、公が其の智辯才力を竭さしめたりし伊東、末松、金子の三子と雖も、公は別段に之を庇護して自家の所謂子分と爲すが如きことなかりき、公の登庸したる材人は雲の如く多し、公にして若し少しにても之に私恩を施さば、材人等公を戴くこと師父の如く、爭ふて公の用を爲せしなるべし、然れども公は總ての材人を登庸するを以て國家のためなりと做し、其の親近多年、誼父子の如き伊東、末松、金子の三子をすら特別に庇護せざりき、況んや其の他をや、之を以て伊東子すら晩年公に遠ざかれりとまで噂させられて、公の子分たるもの竟に一人だも有らざりき、蓋

し公の恬淡なる、部下の面倒を看るの耐忍なかりしやも亦知る可らず、凡そ人にして聖ならざる以上、多少の缺點あり、其の處世の上に於ても多少の波瀾あらざるは莫し、乃ち常に春風のみ面を吹くとなく、時としては少からざる面倒と、忌むべき凶事險情なき能はず、此の場合に於ても、我に頼るものを援助し庇護して以て完きを得せしめば、其の得たるものは深く我を德とし、我が恩義のためには、一死尙ほ辭せざるの志を生ずるに至るべし、是れ必らずしも私恩を沽りて私黨を樹つるに非ざるも、情に敦くして而して律義なるもの多くは然る也、山縣公一派は、苟くも子來するものとしいへば、其の國法を犯さず、著るしく德義に叛せざる以上、努めて之を保庇して捨てず、其の生活を助け、地位を與へ、撫養し保育し援引す、其の厚きがため、時としては曲庇に近きとなきにしもあらず、而して牛溲馬勃敗皷の革と雖もまた悉く捨てざるものに似たり、是れ山縣派が多く士の死心を得たる所以にして、其の儼乎爵乎たる一大系統を成し、其の圈中に多くの智勇辯力を網羅するに至りし所以ならずや。

伊藤公の人物を庇護せざる、必ずしも國家のためにすといふが如き高尙なる理路にのみ由るにあらず、少くも其の六七分は、公の恬淡の性、他の面倒を看るの煩に耐へざるの致す所ならずんばあらず、即ち明白に之をいへば、山縣公は人材を憐れむの情六七分、私勢を成すの心三四分にして、而して伊藤公は君國のために私恩を沽らざるの心二三分、他の面倒を見るの情なきと七八分、以て今日に至れる也。

伊藤公は婦女に對しても、書畫器物珍玩に對しても、亦淡泊にして寸毫も戀着し愛着し拘着せず、一びは手に入るゝも亦直ちに委棄して顧みざりしが如し、蓋し恬淡にして而して執着力なきと性也、以て

治郎蕩夫、浮薄の極と爲すものあるも、然かも公の長所も亦茲に在りしとを忘る可らず、公が如何なる場合にも公平淸廉なるを得たるは、全く此の恬淡人に過ぎたるの賜なりと謂ざる可らず、公が一代の間、藩閥に在て藩閥に累せられず、政黨に在て政黨に累せられず、到る處超然として處士高士の風あり、以て能く勳功一代に冠たるも然かも一世憎惡嫉忌の焦點と爲らず、竟に能く大を成したるも、亦此の恬淡人に過ぎたるの賜なりと謂ざる可らず。

然れども政黨首領としては、黨人を庇保する特性なかる可らず。己れの手は寸分だも汚れず、廉潔自から守りたるも、黨人のため部下のためには公然議案通過料を掲げて黃金を貪ぼると餓虎の如くなりし星亨は、政黨首領として最も適任者の一ならずんばあらず、假令星の如く甚だしからざるも、時としては黨人を曲庇し、心君國のためを期するも、尙ほ政黨本位とするとを忘れざるものに非ざれば政黨首領たるに適せず、此の點よりいへば山縣公の如きは實に最良なる政黨首領也、現に今日の我が政治界に於て、最も雄勁なる政黨を求むれば、所謂山縣系其のものなりとせざる可らず、世或は之を藩閥といひ、或は官僚と稱するも、適實にいへば寧ろ純然たる政黨也、但だ未だ公々然として國民の間に普遍的に其の勢力を殖ゑざるのみ、而して我が伊藤公は、政黨首領として最も不適當也、國家の元老としては實に古今に匹儔少きも、政黨首領としては一も適當の資性あらず、公が自から奮つて政友會を組織しながら、忽ちにして之を委棄すると、猶ほ其の婦女に於けるが如く、其の書畫器物珍玩に於けるが如くなりしも亦素より其の天性に出づるのみ。

旣に然らば政友會が伊藤公を失へるは、不適任なる首領を喪へる也、理に於て何等の損失と爲す可らず、何ぞ況んや旣に其の首領たらざりし伊藤公の死したるをや、然れども今日の政友會は其の實伊藤公に怙恃するところ尙ほ大ならざるを得ざりしもの也、故に其の死に由て刺衝大なるを感ぜざるを得ざるのみ。

（六）

政友會の總裁西園寺侯は、其の門葉の高くして至尊に親しき、實に天成の良首相たるも、其の聰明にして恬淡なる、寧ろ伊藤公に優さるも劣ると無し、隨つて執着力に乏しく、政權に執着せざるとは却つて伊藤公よりも甚だし、其の人格餘りに高儁にして鬪志少きが爲めに、政黨首領として不適任なると伊藤公よりも甚だし、然るに政友會の多數者が之を推戴し、常に勉强して其の指命に服する所以は他なし、侯に由りて以て政權を得るを便とすれば也。

更に適切にいへば、侯の背後には伊藤公の在るあり、侯の至尊に於ける、公よりも遙かに親しと雖も、一國の大政に就ての御信任に至ては、侯遙かに公に及ばず、否、何人も竟に公に及ぶものあらざりき、故に公にして旣に政友會總裁の地位を去るも、其の創立者として關係を有無斷續の間に相繫ぐ以上、殊に其の後繼者たる、分身たる、御前立たる西園寺侯を總裁として、自から後見役たる以上、少くも親切なる緣者たる關係を有する以上、公は常に政友會の爲めに善意の行動を執らんと必せり、若し極端の場合を想像すれば、政友會の敵と視做さるゝ桂侯等が何等か辛辣なる手段を政友會に加へんと欲する時、

之を睥睨して以て其の軌を超えしめざるものは伊藤公なるべし、桂一黨如何に政友會の宮中に於ける御信任を傷けんと焦心するも、伊藤公ある間は斷じて然かし得ざるべし、政變ある場合、伊藤公は政友會の總裁たる西園寺侯を新內閣組織者として推薦し、且つ桂一黨を抑へて以て陰に陽に政友會內閣を掩護し、以て政黨內閣の成功を期圖すべし、是れ憲政有終の美を濟すを以て志とせる伊藤公當然の心事なりとは、政友會の私に期俟せる處、少くも此の趣旨を布衍して以て其の黨勢を擴張するに努めたりき、而して政治界の情僞に比較的暗昧なる黨人等は、西園寺侯の背後に伊藤公ありと做し、侯假令政黨首領に不適當なるも、公の助力を合せば政權を得ると最も容易なりと信じて、以て心を政友會に寄せ、自から進んで政友會に加はりたりき、政友會が兎にも角にも衆議院の絕對多數を制せしは抑も此の故ならずや、政友會が伊藤公を估恃せる豈尠少ならんや。

少しく地方の政黨地盤を視るものは、進步黨の地盤の牢として容易に拔く可らざる所あるを發見すべし、政友會の地盤また然りと雖も、然かも其の區域は斷じて進步黨の上に出づると能はず、即ち地方の形勢より推斷すれば、政友會として純乎たる地盤を有する議員は、多くも百名を超ゆると能はざるべし、然るに實際其の倍數を有するは何ぞや、政友會の地盤以外より出でしものが、多く之に馳せ參じたれば也、而して其の馳せ參じたるは、實に政友會と伊藤公との關係より揣摩して、容易に政權を得べしと信じたるに由る。

然るに今や此の最も估恃せる伊藤公を喪ふ、政友會如何ぞ最も痛切なる刺衝を感ぜざらんや、吾人は

素より伊藤公の死後、直ちに政友會の土崩瓦解を斷言する程大膽なると能はず、然れども竟に何等かの變化を見ざれば止まざるを想像せざる能はず、然れども政事家往々にして禍を轉じて福と爲すの妙作用を有す、政友會に智謀の士あつて、巧みに衆心の離叛を喰ひ止め、且つ形勢を轉移せしめて以て前路の便を開拓せば、或は却つて好結果を奏するも亦測る可らず、唯だ其の然るや否やは、畢竟時日の問題として暫らく之を注視するの外ある可らず。

（七）

有體にいはゞ、伊藤公が喪へる西園寺侯は或は永く政友會の總裁たるを得ざるも知る可らず、原氏は公の最も信頼する所、而して明治の竹中半兵衛と稱せらるゝ岡崎邦輔氏は、陸奥伯死し星亨逝ける後、今や原氏の懷刀として智謀頗ぶる見るに足るも、侯は此等に聽くよりも寧ろ伊藤公の指導と助言とに多く信頼したりしや論莫し、侯にして若し全く原氏に信頼し、前途を之に托して寸分だも危ぶむ所なくば、俄かに現地位を變ずると莫かるべし、然れども侯の高雋にして而して恬淡なる、且つ元老其の他との諸關係を顧慮するに於て、果して十二分に原氏に委任するや否やは未だ俄かに判知す可らざる也。

假令原氏等に一任して、勉強して現地位に在るも、侯の健康の永く耐ゆるや否やも亦疑問たらざる能はず。

若し總裁たる侯の地位に變動あらば、政友會は何人に由て其の結束を保つべきや、是れ實に政友會に取て重大なる宿題也、彼の伊東巳代治子を迎ゆると頗ぶる妙ならん、子曾て自由黨の黨師を以て迎へら

れしとありき、子の材幹伎倆は裕に政友會を指揮するに足る、唯だ憂ふる所は、宮中に於ける御信用未だ甚だ厚からざると、貴族院多數の感情を融和するに不便なると也、或は山本權兵衞伯を指定するものあり、伯にして起たば、桂侯の一派に取て、隱然たる一敵國たり、政友會また未來ありといふべく、所謂薩派と稱せらるゝ一部分には、斯る計畫を試むるもの亦絕無ならざらん、然れども伯尙ほ韜晦して機會を待つ乎、抑も又貨殖に專らにして意を政治に斷てる乎、未だ容易に起たざるべきを思はざるを得ざるのみ、政友會の二三子が暗に意を寺內正毅子に寄するは隱れもなき事實なるも、子は現に陸軍大將たり、之を捨てゝ政黨首領たるが如き野心は、到底子に望む可らず、而して山本伯又然るべき乎。

大勢を達觀するものは、寧ろ新人の興起を翹望す、唯だ陳腐なる黨人等俄かに然る能はず、汲々として元老若くは元老に近きものを崇拜して、以て一日も速かに政權に近接せんと欲するのみ、茲に於て乎竟に桂侯を迎ふるの議に歸着するも亦知る可らず、政友會には現に此の計畫を成すに便なるもの少からず、但だ桂侯にして軍職を抛つの果斷さへあらば、事は甚だ易し、然かも是れ侯に取つて容易に決し得ざる問題也、然り、桂侯の政友會總裁たる、易きに似て而して甚だ難き也。

論じて茲に至れば、公の死も亦輕からず、而して公の勢力亦徵知すべき哉、是れ亦大に認識すべきものたり。

對韓策を奈何せん

(上)

韓國の刺客が毒手を伊藤公に下したるは、最も驚ろくに耐たり、公は韓國の恩人にして、韓國の愛國者は、寧ろ却つて公に頌德表を上つるべき筈なれば也。

我が國には、素より韓國を純然たる屬國とすると、猶ほ臺灣、樺太、琉球の如くすべしと做すものなきにあらず、彼等は以爲らく、韓國の兩班以上は、到底濟度す可らざる頑民也、多年人民を誅求して私福を計り、習ひ性となつて他に衣食の道を求むるを得ず、然かも政權を得るがためには、陰謀詭策到らざるなく、構陷、排擠、毒殺、暗殺の如き殘忍酷薄を敢てして憚からず、而して其の政權を得んとする、自家の經綸を行ふて以て蒼生を濟んがために非ずして、單に人民を誅求して以て私福を恣にせんと欲するのみ。韓國が世界最惡なる政治の標本として、千年前の燦たる文化を掃蕩し、國土荒廢、人民貧寒を極むるに至れる、總て兩班以上の罪也、故に韓國の蒼生を救はんと欲せば、人道のため此等兩班以上の舊惡を糺し、以て斷乎として韓國を我が領域と爲し、思ふがまゝに我が政治を實施するに如かずと。

是れも亦實に一家言也、必らずしも他の國土を蠶食する侵掠者の說と爲す可らず。

然れども保護國說を主張するものは以爲く、今一朝にして韓國を我が領域とせば、李氏の社稷を亡さゞる可らず、少くも我が公侯爵とし、而して其の執政者をして、總て一布衣たらしめざる可らず、韓國

人民の一部には、素より李朝を怨むの情骨髓に徹する者なきに非ず、國民の多數また李氏の興廢に冷淡なりと雖も、一朝にして之を廢せば、激烈なる反亂一部に起つて、隨つて討すれば隨て起り、其の結果或は永く平和を妨ぐるも亦測る可らず、若し然らば韓國蒼生のため寧ろ悲むべし、李氏の朝廷及び其の執政者を掩護し指導し、以て從前の如く惡政虐政を行ふこと能はざらしめ、我れ自から善政を施きて以て其の蒼生を救ふの容易なるに如かずと。

伊藤公等は實に後說を支持して以て我が國論を定め、反對說を抑へて以て韓國を保護國としたるもの也、故に韓國の君臣にして、眞に亡國の民たるを欲せずんば、義宜しく公を德として其の恩を謝せざる可らず、然るに辛苦して竟に毒手を公に下す、頑迷にして事體に達せざるの致す所といふと雖も、其の險凶にして而して人道を無視するに至ては、恐らくは世界義人の齊しく切齒する所なるべし。

然れども此あるがために、我が國の對韓政策を一變すべしとするは如何ぞや、吾人は未だ輕々しく之に與すること能はざるのみ。

(下)

吾人は暗殺を以て卑怯の極とし、如何なる場合にも之を是認すること能はず、武裝なきものを殪すは、嬰兒の手を捻るより尙ほ殘酷也、其の防備なきに乘じて不意に之を殺すが如き男子としては到底容す可らざる卑怯の極也、假令其の對手が如何に兇惡のものなりとも、之を殺すに一點の私念なしとも、斷じて暗殺を是認すべき理あることなし。

然れども我が國には尙ほ動もすれば暗殺を是認せんとするものなきにあらず、西野文太郎の墓に今尙ほ香華の絶えずといふに視よ、來島恒喜のために堂々として追善法會を營みたるものありしに思へ、一身を犧牲としたる志を美なりとし、其の兇手を逞くせる竟に寸毫の私讐あるにあらずとするも、其の手段の極惡なる、幾んど譬ふべきものなし、若し之を恕するのみならず、更らに之に同情すべしと做さば、彼の國家のために議員を買收したりしものも、亦之を恕して而して其の德を頌せざる可らず、天下寧ろ斯の如き理ある可けんや。

且つ吾人は問はんと欲す、西野、來島の徒に同情を寄與するもの、何ぞ伊藤公を暗殺したる彼の安重根輩に同情せざるやと、其の日本人たるには同情するも、韓國人なるがために憎惡すといふは、士君子の口にだもすべき所にあらず、況んや之を憎惡するの極、坐ろに對韓策の變更を主張する如きをや。

若し彼の刺客にして、使命を韓國の宮廷及び政府部內より得たるの證據あらば、而して彼の君臣此の暗殺を以て寧ろ悅ぶべしとするの形迹顯然たらば、我が國は進んで對韓方針を一變すべし、何となれば我が保護國たることは、彼等君臣の希望にあらずして、保護國以外のものこそ寧ろ彼等の歡迎する所なればば也、我が國旣に韓國のために日淸日露の兩大戰役を經過し來れり、之を獨立國と爲すが如きは斷じて能はず、是れ世界平和のためなれば也、我が國自衛のため已むことを得ざれば也、否、韓國の蒼生のため然ることを得ざれば也、乃ち玆に保護國として其の君臣を扶掖し指導して、多くの勞力と費用とを吝まざるに拘らず、彼等君臣にして尙ほ之に感受するに至らず。別に保護國以外のものを求めば、我れは斷じ

て此の主義を一擲すべし、否、一擲するの外あらざる也。

吾人は唯だ我が尊重すべき一元老、殊に韓國の恩人たる一政事家が、韓人の毒手に殪れたるに憤慨するがために、其の怒りを移して直ちに非保護國說を主張するを非とするのみ、抑も伊藤公の韓國に於ける公平仁義は、公最後の光明として吾人の賛嘆を禁ぜざりし處、此の光明豈俄かに公の死のために滅す可けんや。

學制問題に對する管見

農學博士　横井時敬

學制改革の問題は年來の宿題であるといふ、或る一派の論者には、必ず然るであらう、凡そ何事によらず、多少の缺點あるは免れざる所であつて、隨つて不滿足が此處彼處に起るは、寧ろ當然と見なければならぬ、而して此の不滿足の觀念ありてこそ、始めて凡百の事物は漸く改良の途に進むのである、果して然り、我方今の學制は多くの缺點を包含する丈け、その不滿足を世上に買へるも亦た宜なりと謂はねばならず、之れが改革を必要とするもの多く、之れが定案をさへ具へて、進んで之れが實行を促すものあるに至れるは、之れ當然のことであつて、敢て怪まないのである、

併ながらさて如何に之を改革すべきかといふ一段になれば、其定案は所謂十人十色で、要求は一途に出てず、議論多岐に分れて、中々に決定を見ることが出來ぬ、それも亦た然るべきとて、知識の程度に差ある丈け、立場の相同からざる丈け、理想の相異なれる丈け、參差として歸着する所なきは、抑も無理ならざることといふべきて、寧ろ此の如きを當然のこととなさねばならぬ、更に一歩を進めて云へば、我現時の學制は一朝一夕に出來上りたるものでなく、多くの變更を重ねて、漸くに發育し來たりたるものなれば、之れが根本的改革の如きは、容易ならざる企圖である、のみならずやゝ根底に觸るゝときは、些々たる改正でさへも、複雜極まつたる今日の學制に於ては、必ず左支右吾、研究を重ぬれば重ぬる程、これが利害の判定を苦むこと往々之れあるを發見するに相違ない、現に獨乙の學制には多くの長所があると同時に、之れに伴ふ所の大なる缺點も亦た少からぬ、例へば大學に入學し來たる所

の幾萬の學生中、眞に勉學を事とし、能く成業するもの、幾何の歩合にもあたらぬといふが如きは、之を以て一大缺點と見做さゞるを得ざるに相違ない、此缺點は夙に識者の看破せる所であつて、之れが矯正問題が多年の宿題であるに拘はらず、今日まで依然として舊態を存して、曾て變更を見ることがない、是れその缺點を矯正せんと欲すれば、同時にその長所をも滅却し、所謂角を矯めて牛を殺すの弊に陷るの患あるを免るべからざるからである。

思ふに我現時の學制に於ても、多くの缺點があるを疑はない、と同時に全くその長所がないではないに相違ない、しかも此長所、此缺點、何れも亦た時勢の要求が生み出したるもの、また時代の事情の反射し來たるものたらざるはないやうである、請ふ一二の例を以て之を示すであらうか、今日の學制中最も多くの人の批摘を免れざるものは、大學卒業に至るまでの年限の長きに失すると之れ其一であるに相違ない、其實學制改革が宿題として存する所以の一大根源は此處にありといふてもよいであらう、然り、余も亦た之を以て其一大缺點でありといふことを信じて疑はない、余が從來の經驗を以て見れば、大學卒業に至るの年限餘りに長きが故に、卒業生の過半は既にして老成人の如くにして、有爲活潑の風に乏しく、爾後幾くもなくして漸くに委靡不振の態に陷るもの、十中の八九に居るやうである、思ふに半生を學校生活に送りて、有爲活潑の氣象を此處に沒却し去るの甚だ然るべからざるはいふまでもない、今此一大弊患を救ふには一刻も早く學制を改革して、年限短縮の目的を達するを可とするに相違ない、而かも幾多の事情が纏綿して、此英斷を妨ぐるを奈何すべきである、世間往々之を以て大學連中の無意味なる反對に原づくものゝやうに心得て居る、然り多くの大學連中には保守的の人もあらう、徒らに程度の高きを喜ぶものもあらう、併ながら無意味なる反對は、之を打破するに於て左程の困難もなからうが、獨り世間の事情が之れが短縮を許さゞるを奈何すべきである、卒業生が互に一本立になりて、重要なる位地に

立つ餘儀なくせらるゝ間は年限短縮は容すべきものてはないてはあるまいか、既に卒業後直に一本立の人間となる以上は、それ丈けの資格が出來て居なければならぬ、重要なる位地に立つ以上は、それ丈けの素養がなければならぬ、それ丈けの資格を造り、それ丈けの素養を得るには、それ丈け修學の年限が長かざるを得ない、有爲活潑は喜ぶべし、しかも其間には亂暴の分子もあれば、放縱の分子も籠つて居る、かゝる人を一本立の人間となし、個の重要なる位地に据ゆる、その不可なるとはいふまでもない、然らば學校教育がその客氣を矯めて老成の域に進ましめ、また危からざる程度にまで學科をも授け置くの必要なるは、喋々の辯を俟たざる所であらう。

或はいふ、それが間違なり、如何に大學を卒業したればとて、直に一本立の人間を以て之を遇し、之を重要の位地に据へて役に立つべきものでない、宜しく數年の實地練習をなさしめ、其伎倆をも試み、乃ち茲に始めて之を用ふべきである、卒業後直に役に立たゝぬといふの理由を以て、漫に長年限を學修の爲めに費さしむるは抑も不都合であると、余は之を以て正論として歡迎するに吝かならぬ、余と雖ども此の如きの意見を抱懷するに於て人後に落ちざるものたるを自信する、其然るに拘はらず、尙ほこれに同意して、年限短縮論を唱ふるの勇氣を有せざる所以のものは、是れ世間の要求の然らしむる所である、明治は既に四十年を超えた、しかも人物拂底の聲は四方に滿ちて居る、成程或某學科に於ては、卒業生が既に餘つて居るであらうが、他の學科に於ては、中々に不足して居つて、卒業後、一兩年の實地練習の暇を許さない、從つて多くは直に重要の位地に立たざるを得ない、實に己を得ざるのとである、しかも世に一兩年の練習をなすべきいはゞ助手ともいふべきの位地を備ふるとも甚だ少ない、若し幸にして助手の位地が、獨乙に於て見る如く、多く世上に備はつて居つたならば、年限短縮は之を行ふに於て、何等躊躇すべきともなく、必ず識者の同意を得て、遠からず之れが實行を期するとが出來るに相

違ない、未だ其域に至らざる間は、こゝ數十年は中々短縮のこと、いふべくして行ふべからざることゝ信ぜらるゝのである、但余は茲に一の妙策を有する、此妙策にして實行せらるゝの曉には、年限短縮の目的を達するに於て、甚だ難からざることなるを信ずる、其策他でない、多くの大學を設立して、由て多くの學士を出すこと、即ち是れである、苟も學士の供給以て需要に超過し、兩三年以上の練習を經たる後にあらざれば、世間何人も之を採用するものなきに至らば、茲に於て始めて年限短縮のことは、雑作もなく之を行ふことが出來るに相違ない。

併ながら或は云はん、是れ甚だ迂濶の所論たるを免れない、年限短縮論の行はるゝも、詮する所は之れによつて、費用を節減し得て、因て多くの大學其他高等程度の學校を建設するを欲する、言を換へて云へば、志學者に向つて多く滿足を與へんと欲するに外ならぬこと、是れ一應尤なる所論なれども、然れども年限短縮によつて此目的を達せんと欲するが如きは、是れ無理なる希望を無理に達せんとするものであつて、世間の要求と相俟たざるが故に、到底行ふべきことでない、年限短縮の代りに大學院擴張説などもあれども、余は亦た其策の得たるものにあらざるを信ぜんと欲するものである。

且つ之れに關する一理由を述べる、年限短縮に對する一難關は外國語修得の困難なるにある、外國語の修養が不充分なる以上は、大學以下の教育年限を短縮せんとすると、甚だ困難ならざるを得ない、大學に入つて後に之を修めしめなば、此缺點を補ふことも出來ないでもなからう、併しながら今日でさへ甚だ不充分なる外國語を、年限を短縮して更に不充分ならしめば、大學と雖ども、殆んど如何ともすべからざることであらうと思はるゝ、余は此點に就きては、從來の外國語の所謂正則教授の根底を疑はざるを得ない、外國人と交語するに差支なき丈け、正則に教授し置くの利益あるべきは勿論であつて、場合によつては、必要を以て之を目して不可ないでもあらうが、其實大多數の學生は讀

書の力さへ充分に養ひ得たならば、之にて滿足して、不可なからうと思ふ、果して此方針を以て外國語の教授をなすことゝ改めたらば、一年位の短縮は左程の困難にあらざらんと信ずるのである、今の如き有樣を其儘にて、年限短縮を暴斷するが如きは、甚だ不利益であるを疑はない、

或は普通教育に於ても、また專門教育に於ても、學科を減却して、修養に便にし、玆に年限を短縮せんと擬する人もある、是れ昔年主としたることある所謂速成の主義に出づるもので、頗る利巧なる意見のやうである、獨り如何せん、今日の學界は分科時代を過ぎて、統合時代に入らんとするものと云ふも不可なき程て、廣く學んで玆に始めて狹く究むることを得ることゝなつたのである、これは今日の高等學校の制度は豫科に於て既に專攻せしむる稍や速成主義の遺殘物を認むるものて、學界の時勢に合せざる制度として、早晩改正を要するものとさへ信ぜらるゝに、何んぞ況んや速成主義を再興するの不可なるも亦た明であらう、若し速成をよしとせば、現に大學には撰科の制がある、之を利用せば則ち可なる譯であるが、其實我々の經驗によれば、純然たる撰科の修業は、甚だ面白からざるものであつて、之れが利用は特別なる場合にのみ容すべきものと信ずる。

學制の年限短縮論に對する余が意見は概略此の如くてあるが、更に進んで中學制度に就きて、是れ亦た改正を要するものと信んぜられて居る、今日の中學は一に高等程度の學校に入るの豫備とし過せられて居る、而して其實入學者中其目的を達して、高等の敎育に進むものは、割合に甚だ少い、是れ一は高等敎育の設備不充分なるが爲めに、容易に之れに進むことを得ざるに原因するてあらうが、亦た中學熱が地方に盛であつて、資力不充分なるもの迄も、漫に之れに進むこと多きに職由すといふて不可ないてあらう、其原因の如何に拘はらず、苟も中學を卒へたる儘に、直に社會に立たしむるには、今日の儘の制度に於ては、甚だ不可なるを免れない、所謂普通教育にのみ之れ頼むて、教育を

受けたる紳士として世に立つを得るの時代は既に過ぎ去つたのである、無職業を以て世に立つを得ば兎も角、苟も然らざる以上は、專門的職業教育は現今の時世に於ては畢に缺くべからざるものである、然らば中學以上に進むと能はざる青年には、寧ろ中等程度の實業學校に入るを勸むるがよい、之れが爲めには中學卒業生に向つて一年志願兵たるの權利を與ふるの特點を廢停して、中學熱の冷却を防ぐがよからうと、余は信ずるのである、中學熱は實に幾多の弊害を地方に流しつゝあるのである、或は實科中學を再興するか、或は實科と中學の補習科として新設するか、此二策は固より中學制度に對する缺點矯正の策たるを失はざれども、されぱとて是れが果して青年界の希望に適するや否や、是れが純然たる實業學校に優るものであるや否や、是等は尙ほ深く研究を要するの問題である、且つ苟も青年界の希望に適せざる以上は、如何に適當なる制度と雖ども、實際に於ては遂に失敗に歸するを免れない、向きに實科中學の失敗に終りたるは、玆に職由したのである、中學制度の改正を企つるもの、宜しく鑑むべき所ではあるまいか、

之を要するに、我現今の學制は多くの缺點を有して居るに相違ない、之れが矯正の必要なるも亦た詳であり、されぱとて根本的改革の如きは、論として甚だ壯快であるに相違ないが、併ながら甚だ危險にして、改良が反て改惡に終るなきを保するとが出來ぬ、今日迄漸積の勢を得て發育し來たりたるもの、之を一朝にして根本より改革せんと欲するが如きは、余は寧ろ之を以て不可能のとゝなし、亦た其無謀の甚しきものたるを疑はない、

春畝公と露國

朝比奈知泉

故春畝公と露國とは曾て奇緣あり、公は歷山第三世の戴冠式に方り、憲法取調の爲め、歐洲に在りしことゝ

て、特派大使の命を被り、之に參列したるを初めとし、露國の重臣に別悃を結びたる士多しとにはあらねど、在朝に知面の人多かりしも、後明治三十四年に再遊したる折には、公は日露協商の腹案を抱き、時の露國には首相なる地位なく、ウイッテ氏藏相として閣臣の首席に立ち、ラムスドルフ伯外相として、專ら外政の衝に當りしとゝて、公は此の兩相と會見し、就中ラ伯と一再面次して談漸く緒を進め、露國は韓の南半に全く手を絶ちて干渉せざるとをほのめかし、公も議を進めんとしたりし折も折とて、在英の帝國公使館より特使來り（松井書記官なりしと記憶す）、英國にて日英同盟の議熟し、調印近きに在るを以て、露國に逡巡の色あるに於ては、程能く切上げて然るべしと林董公使の親書と內意とを齎らしゝかば、公は早速に露廷を辭し、歸朝の途に上りし、路次獨國伯林に一兩日の滯在をなしゝ時、ラ伯は後ればせにも、斯く／＼の條件にて日露協商を訂結したしと申し來りしも、後の祭なりし、當時ラ伯はウイッテ氏より其の餘りに外交掛引を用ゐるに過ぎて、時機を逸したりとの叱斥を受けたりとの世評ありしは此の事に就てなりき、公にして膽大氣豪、日英同盟を方寸に疊み置きて、露と折衝を續けたらんには、たとひ戰後の局面の如く、和好と協商とを日露の間に結ぶ能はざるまでも、彼の卅七八年役の慘毒は或は免れ得たらんも知れず、惜しきとしてけりとは、公を知る某老官人の物語りなり。

伊藤公と陪審制

法學博士　江木衷

是は一段の難問、僕輩の容易に速斷し得べきものでない。乍去目下重大の時事問題、萬更意見がないでもない。伊藤公の訃音は實に罔極之痛、內外朝野哀悼の淚も盡きた次第である。而かも哀悼の眞情が單に偉人を失ふた國家の損失と云ふのみに止まらず、全國民が別に愛慕の意を表し恰も父母を喪ふた如き感に打た

れたるは何の故てあらうか。公は個人としては尋常一様東洋流の豪傑てあつたが此外に他人の及ぶべからざる公の大なる所は文明流の政治家てあつた一事てある。公は嘗て日本人民を壓制した事がない。公は嘗て日本國民を敵視した事がない。公は人道の擁護者なりき、公は人權の守護神なりき。公は在朝の政治家たりし丈に民間の政治家の如く自ら好んで民權論や自由説を鼓吹した事はないが、人民が人道とし人權として渴望絶叫する聲を聞て人民を見殺にする樣な人物てなかつた、況して之を壓迫强制せんとするが如きおやだ。公は人民の主張が理由ありと思へば快よく之を容れて之を適當の方針に誘導するのが政治の大本と觀破されたのてある。公は汎く文明諸邦の制度歷史を其胸中に收めて大綱を綜覧した。是れが法律の字句に拘泥して奇論詭説を弄する如き迂儒と霄壤の差があつた所以てある。公は誰も知る帝國憲法の起案者てある。公は官邊の一方に一大反對あるにも拘はらず。決して他の文明諸邦に愧ぢざる參政の大權を人民に附與したてはないか。公の手にあらざれば所謂原案執行權の如きも政府に留保した未開の憲法が出來たかも知られぬのである。而かも公は世界文明國の制度に鑑みて日本人民に與ふべき權利は遺憾なく充分に附與したのである。一利あれば一害あるは公も素より豫見されたであらうが。弊害は弊害として別に之を匡正するのが爲政家の任とすべきものとして一身を以て憲政實行に任せられたのは眞に日本國民を愛する公の志で千萬世の後まで一日一刻も日本人民の忘れてならぬ大恩人てある。

公の兇變の當時桂侯は「予は公を先輩と仰ぎ公の志を紹成するの責に任ぜん」と大言せられたると聞く或は事實であらう、併し精確に謂へば古來「先輩」とは同輩相推すの稱て、此口吻を以てせば侯は公を以て己れの同輩と看做されたるが如くなるも侯の所謂先輩なる語は先以て長老を意義するものとして善意に之を解釋すべく又侯は眞に伊藤公に代はりて開國進取の國是を守り憲政有終の美を爲さんとの誠意誠心を洩されたる

ものと見るべきじや。然れども徒らに誠意誠心のみで實行が之に伴はざるに於ては侯も亦伊藤公の地下の一笑を招くに了らん。陪審制度は人權問題なり人道問題なり。桂侯の誠意誠心を試驗すべく近く議會の問題となるであらう。而かも近日の御用新聞は早く已に陪審制反對の意見を洩らし來る、其議論の淺薄なるは勿論其文章の拙劣なると殊に告朔の餼羊などゝ見當違ひの出故を用ひたる等より見れば之を彼記者の筆に成るものとするは殘酷なり。思ふに官邊屬僚の手より出てたる片輪學者の迂說なるべし。之を以て直ちに桂侯を責むるも亦殘酷なるべし。唯夫れ桂侯に腰間三尺のサーベルの在るあり焉じや。桂侯は如何に伊藤公の心を以て心とせらるるとも侯の周邊を圍繞し侯の意を迎へて自ら立身の地を爲さんとする侯の幕僚は實は此サーベルに平身低頭する者のみじや。千百の建言恐くは其外に出でざるべし。素と是れ東西古今の通弊。日本人民が今尙ほ伊藤公を惜むの眞情は未だ侯の一言を以て全然之を除却すること能はざるものあるは之が爲めであ

る。歐洲の學者でも陪審制不必要を說く者もあるが是れは憲法の不必要を說くものあると一般奇論を以て一時の人目を引く者で古今の通理に向つて何等其基礎を動かすに足るものでない。

治外法權の廢止は明治初年以來國民の輿論で殊に司法制度は他の行政に先んじて長足の進步を爲し明治十二年に至りては陪審制の必要も認められ、佛人ボアソナード氏の起草せる刑法及治罪法草案も其基礎を玆に置きたるが、却つて他の行政制度の進步は之に伴はず、陪審員選擧の基本たるべき町村制すら未だ成らざる爲め陪審制度は當時其實行を見るに至らざりしが、開國進取の國是は國是にして治外法權撤去の手段にあらず、然るに町村制は已に實行せられ憲法も亦實施せらるゝに至りて後治外法權は外交上の談判に依り其廢止を見るに至りてより彼の陪審制度の如きは上下共に忘却する所となり。或は今日之を唱ふるものあらば之を以て陳腐の人權說とするものあるに至り。爾來司法制度は益々專制獨斷の方針に向て制定せられ、封建時

代に劣る野蠻未開の情態を呈するに至り、其弊害は漸く人民の實驗する所となり、再び陪審制度の必要を感じ開國進取の國是を全ふせんとするの輿論を見るに至つたは當然の事じや。文明國の制度に倣ひたる帝國憲法に帝國臣民は法律に定めたる裁判官の裁判を受くるの權利ありと規定してある。其所謂法律とは寧ろ事實の認定を人民の自ら選びたる陪審に一任すべきものとする文明國の制度を指示するものなることと疑を容れず、獨斷主義の獨斷判事に人民の生命身體を一任するが何んで之が臣民の權利であるが。此陪審制ありて始めて憲政有終の美を爲す者と云ふべきてある。僕の近著山窓夜話は御存知の如く其後半は陪審制の必要を論じたるものなるが恰も伊藤公が出發の前日に始めて刷刷を了へ倉皇公の左右に進むることを得たが、公は車中に在りて頗る興味を以て通讀せられ、卷中の俳句論の如きすら殊更趣味の深きを覺ふと傍人に語られたる由は僕も確聞する所なるが陪審論に至りて如何の感想を以て迎へられたるかは明言するの限てない。公が已に此世を去られた今日之を言ふに憚るべきは當然であるが、今日公を亡ふたる日本國民の不幸は今更乍ら言辭に盡し得ない次第てある。唯だ公が其基礎を作られたる開國進取の國是と憲政有終の美を期せられたる精神より推論し公が人權を重じ人道を尊び日本國民を愛せられたる文明的大政治家たる見地よりすれば公は陪審制度の勃興と聞き苦々敷顏をさるゝが如き偏狹なる度胸ある人物てない。寧ろ公は微笑を帶びつゝ日本人民もいよ〳〵陪審制まで氣の付くまてに進歩したか、捨て置く譯にも行くまい。此程の事は乃公の手を煩はす迄にも及ぶまいと云ふ位の事なりしならん。公は在朝の政治家なり。公自ら進んで陪審の必要を鼓吹せらるゝなきは勿論なるも人民が之を熱望する聲の切なるを聞き玉ひ人道の至理として之を設けざるべからざる者と斷ぜらるゝに於ては單に弊害ありとの一言を以て之を斥けらるゝ如き不信切至極の政治家てない。弊害の大なるものあるは陪審制度よりも憲法の方が甚しからん。而かも公の理想は古今の萬國の大勢に鑑み一方に

於ては斷然憲法を實施し一方に於ては身心を忘れて其弊害の匡正に勉められたてはないか。如何なる制度も紙上の空文のみにて完全に實行さるべきものにあらず、萬難を排して其實行の圓滿を期し其弊害を除却せんと勉むるこそ國民の幸福を以て其任とする爲政家の本分にあらずや。司法行政の當局にして弊害あるの一事を以て陪審制度の設立を拒まんとするが如きあらば全然其の本分を忘れたるものと云ふべしじや。

伊藤公は政治を解するの人也、人道を解するの人也、此人間の世に處して此人間の爲めに此人間の事を行へる人也。公は全知全能、神を以て自ら任ずるの迂儒にあらず。一方に於て今日の裁判官を以て沒常識と云ふものあり、他の一方に於て否らずと云ふものあり。公は此場合に於て我こそは全知全能なり果して何れが眞か何れが非か自ら其事實を判定するの能力ありとし自ら其事を決せんとするが如き小々の才人てない。公は必ずや、古今の史蹟に照らし此兩極端を調和し人間として人間の爲し得べき最良手段を案出せらるゝならん。絕對的の眞實は人間の能く發見し得べきものにあらず。裁判官も人間なり、無罪を有罪と誤斷するの必無を期すべからず。裁判は絕對的の眞實を發見するにあらず、人類の知識に於て爲し得べき限りを盡し、而して後尙ほ誤あるも亦遺憾なからしむるこそ裁判制度の目的じや。古今國家が所謂制度なるものを設くるは之れが爲めじや。所謂制度は人民の諦めを付くるの方法じや。法律の適用は裁判官の特權に存するも人民の自ら選びたる陪審員にして有罪の事實を認定する以上は神樣から見て縱ひ其認定に誤りありとも人民の諦めは付く事じや。陪審制度に反對する者は皆な己れを以て全知全能能く事實の眞相を看破し得べきものとするの狂人じや。天下千百の裁判官も亦悉く己の如き全知全能の神樣と思推する迂儒の輩じや。或は陪審の認定に誤斷多しと云ふ。何の理由に依つて果して其誤斷なるを確認し得るや。水掛論のみ。予は今日の獨斷主義の司法制度は日々益々人民の自重心獨立心を卑下し來りて或は全然奴隷狀態に陷りつゝあるを知る、

成文法の章句末節に拘泥して文明制度の大本を知らざるものは素より共に論ずるに足らず。世人にして自ら奴隷狀態に甘ずれば夫れ迄のみ。唯だ近來司法部内の弊害は漸く世人の耳目に實驗し來るものあり、更に一步を進めて識者の眼を文明諸邦の制度に着くるものあり、陪審制度設立の聲は漸く其調を高めんとす。此時に當りて我國民は在朝唯一の人權の擁護者、人道の守護神を失ふ。國民慟哭の此聲今や幽明空しく相隔つ。唯今の唯今、此御話をする瞬間にも御互に感涙を催す次第だが、今日の識者と謂はるゝ者まで裁判官が沒常識であるのないのと事實の水掛論をする樣では文明制度の眞理はまだ〳〵了解はされぬのじや。裁判官も人間で神樣でないと云ふ人生の通理が、山々村々の農民までも津々浦々の漁夫までも、知られ知られた曉に、伊藤公を愛惜するの至情は切更に切、四千萬民皆な斷腸の思に堪へぬに至るであらう。モー言ふまい。

記者一日江木博士を訪うて右の談話を聽くを得たり博士の公を回想するの至情側々として人を動かせり結尾一語眞是同病之痛

（記者しるす）

今後の政友會

戸水寛人

私の政友會に入つたのはつひ先程のことで所謂新參者であるから政友會の内部の事情や何かについては餘り詳しいことを知らぬ。從て伊藤公が亡くなられたてともどれ丈けの影響を政友會に與ふるものか、今後の政友會は如何なる運命の下にあるかについても別に纏つた考はない。公の亡くなつた爲めに直接に打擊を受けるものは公の信任及び其後楯によつて同會に勢力を維持して居つた人共であらうが然し公が信任して居た程の人にちつとも物の役に立たぬといふ人もあるまいから先づ此等の人にも大した影響はあるまい。其外の大勢に於ては私は殆んど其影響を受けまいと思ふ。又見渡す所政友會を除いて他に政黨らしい政黨がない。進步黨は、改革派非改革派仲直りしたとはいふものゝ何時まで調和して又如何なる程度まで一致した行動を執り得るか頗る疑はしい。大同倶樂部はいふまでもな

いことゝ、又新會も戊申俱樂部も共に事を爲すに足らぬ。矢張り何か事を爲さんと欲するものは政友會に入るより外はない。夫れ故に伊藤公が亡くなつた所で政友會が大打擊を受けるやうな事は毛頭なからうし、今迄通り矢張り益々盛大になつて行くだらうと思ふ。

然し若し所謂山縣派が政友會の膨大を忌んで之に戰を挑むことになれば伊藤公のあるとなしとは大變な相違を來すであらうと思ふ。何故なれば伊藤公は政友會と山縣派との大いなる調和的要素であつて、何か事の起らうとする時は兩方を取鎭めて大なる破綻なからしめた人であらうと考へらるゝ、此點に於ける伊藤公の力といふものはすばらしいもので永年の間兩者が不即不離の關係を持續し得たのも恐らくは公のあつた爲めであつたらうとも想像せらるゝ。然るに今は其調和的要素が無いとすれば一朝兩者の軋轢が生じた時は山縣派は一擧して政友會を切り崩し、打ち崩し、荒らし廻つて大いに其勢力を減削しやうと思ひ立つてあらう。さういふ機會が果して來るかどうか、又來るとすれば何時來るかは豫言し得る限りでないが、何時か來さうな事であつて全く來ないと斷言し得ることではない。夫れ故に伊藤公の亡くなつた事は直接には政友會に影響せぬであらうが、一旦事ある時には間接に大影響を與ふるであらうと思ふ。然し又一方から考へて見れば、伊藤公が居る中は政友會も思ひ切つて山縣派に拮抗することが困難であつたが、公が亡くなつたので今度は思ふ存分に力を出して戰ふことが出來るやうになり、政友會の爲めには其立場を定むるに却て都合がよくなつたかとも考へらるゝ。今日迄は所謂官僚派に秀才多く集つて、所謂政黨者間には人物が少かつた。然し時勢は何時までも同じ所に落附きはせぬ、早晚變遷して矢張り政黨政治の世の中となるであらう、否な既に其徵候が天の一方に動きつゝある。であるから所謂山縣派と稱するものでも決して政黨を無視しもせず又無視し得もせぬやうになりつゝある。桂侯などいふ人は立派に政黨の首領ともなり得、又ならんとする希望もある人かも知れぬ。何れにしても政黨政治にならん

とするの機運は漸次に熟して居る。若しさうだとすれば今日の政友會なるものは益々有望なるものであつて所謂山縣派と雖も漫りに之を敵とするやうな事はあるまいと思ふ。近時伊藤公の亡くなられたについて、俄かに政友會が衰ふるであらうなどいふものもある樣子故私の思ふ所をお話して見たのである。私は大學教授をやつて居た中は實際界に働くことが出來ぬ故、他の反對あつたに拘らず言論を以て自己の主張の幾分を行はんとしたのであるが、今は最早や實際界の人となつて言論の必要を餘り認ぬ故成るべく政治上に關することは饒舌らないのであるが、問題を掲げて折角のお尋だから思ふ所をお話したのである。(完)



現在に於ける海外一切の狀勢殊に我國と緊密の關係ある歐米列國等の消息をば最近の新聞雜誌等により若くは彼地の國情に精通する人士の寄稿によりて紹介し以て江湖の參考に供せんと欲す

舊日本及新日本

タイムス外報主任 チロル氏所論

チロル氏は日本漫遊を終りて英國に歸るや、直に新日本の研究に身を委ねたりと聞きしが此程漸く舊日本及新日本と題する一篇を草して之を公にせり即ち玆に之を譯載して讀者の參考とせん。

頃日エリアム、セシル卿は清國教育視察の途上、彼の國の同胞に向て、日本の唯物的思想に感染せざらんことを警告したりといふ。卿は未だ日本には、日本が西歐と接觸せる結果、西歐人に依りて輸入せられたる唯

物主義に對して、其同胞を警戒しつゝある日本固有の思想家あるを知らざるものと見えたり。日本固有の思想には、多くの人工的束縛あり、不完全なる服從ありしと雖も、そは大體に於て最も高尙なる忠義、義務の觀念、質朴、敬虔、克己、及び獻身的大精神の上に築かれたるものにして、之を要するに彼等の思想は、個性の確保よりも寧ろ個性の抑制にありたるが如し。而して。此

舊日本の淳朴獻身的健全なる思想

は突如として日本民衆を西歐文明の眞只中に引出し、とち〳〵歩みの危げにも暫時西歐人等と接觸し居る間に、何時しか新日本と生れ變りて、嘗て舊日本の夢想だも及ばざりし物質的繁榮に到達することを得せしめたり。然るに維新後の大なる經濟上の革命は

全日本の總ての社會的生活

に大變化を齎らす事を誤らざりき。日本は其商工業に於て、若しくは經濟界に於て、西人と物質的發達を競ふべき運命となりしと同時に、物質的繁榮に伴ふて歐洲人士の間に助長せられたる幾多の恐るべき惡弊より免かるゝことを得ざりき。吾人が常に大に苦痛を感じつゝある富の壓制、不平等なる分配、階級間の嫉視反感等其他多くの惡德情弊は、其大部分舊日本の敢て知る處にあらざりき。然れども今や彼等は全く是等の惡弊より自由なるを得ず。論より證據既に社會主義、殊に非戰論非軍備主義の如きすら、早くも日本の思想界に忍び入り居るにあらずや。嘗て舊日本に知られざりし新現象として、少しく商工業の盛なる地には、既に勞働者職工等の大團體あるを見る。彼等が今後如何なる結果を社會組織の上に齎らすべきか計り知るべからず。而して猶更に大なる恐るべき革變は、西歐人と接觸する人士の全生活の上に來りつゝあり。舊日本的質素簡易なる生活、克己、自制、忠義、若しくは獻身的義務の觀念等日本固有の思想に依りて、茲に新日本を產み出したる彼等は

新日本の物質的繁榮

を得て種々の惡德を修得せり。西歐人が常に其骨を削

りつゝある物質的文明の必然の副産物たる種々の悪德を習へ覺えて、彼等も亦我から其苦痛を嘗めんとするに至りしこそ是非なけれ。而して其最も著しきものは極端なる物質欲の助長發達なり。彼等は切實に富の難有味を感じ、奢侈の甘味を希求するに至り、**此富の渴望**を癒さんが爲めには如何なる恥辱をも忍ぶべく、多くの資本家が不法の手段を用ゐて勞働者を壓抑する位は愚かなり、彼等は國家をすら其利己の犧牲とするを憚らず。之が爲には地位あり、身分ある紳士の中より往々にして刑法上の罪人を出すに至る。獨り文武官吏の間には、猶未だ舊日本的質素なる美德を存し居れど、之とて彼等の薄給なる、世間一般の生活に伴ふ事を得ざる事情は、反て以上の如き墮落に最も危險なる地位に置かれありと云ふを得べし。一方に於ては猶未だ不損なるを免かれざるべき政治、社會自治上の新制度は未だ決して、不健全なる要素とならじとは斷じて云ひ難し。總て以上論じたる事實よりして、吾人の最も遺憾とする處は、日米の地理上の關係より、彼等の政治、商業的生活が甚しく、**亞米利加風に感化**せられたる事なり。亞米利加式は必ず日本の如き無經驗なる、受働的人民には宜しからず、其之に倣ふの危險なるは米國人自らも克く之を認識し居るなり。而して猶更に吾人の遺憾とする處は、**日本の新聞紙**が甚だ多く米國式を模倣し居ることとなり。日本の記者中には能力あり見識高きもの少なからず、新聞紙の如き、智能、識見、獨立の最も高尚なる標準となる者ありて、日露戰爭の際の如きは、卒然として一切の利己的精神を離れ、有ゆる自己の利益を去り、相共に唯一つの國家の利益に馳せて、以て至誠愛國の好模範を中外に示したるなど、吾人の最も賛歎すべき一美談とする處なるも、然れども吾人は甚だ屢々彼等に、**個人的責任を輕ずるの風**あるを見免がすを得ず。彼等は徒に感情に走り、事物を

輕視するの惡傾向を有し、新聞紙經營に最も重要なる、純平たる商業的觀念を缺く、之れ實に容易に彼等を墮落せしめ、更に大なる失敗を彼等に招致すべきものたる事を知らざるべからず。

然りと雖も新聞紙の責任の重大なる、恐らく日本に於けるが如きものは、何處にも發見し難からん。日本人の大多數は、實際に於て猶未だ其新なる生活狀態に不案內なるを以て、彼等は常に新聞紙を見るに其**新生活の指導者**を以てす、彼等は西歐人が新聞に對する以上の信念を以て之に接しつゝあるなり。近來外人を相手とする**日本商人の不正直**を訴ふるもの益々日本在留外人中に多きを加ふるが如き傾向あるは、誠に度外視する事を得ざる悲しむべき現象ならん。吾人が數代數百年或は遠く數千年の昔より傳へられたる長き經驗に依りて吾人の間に發達し來りたる「正直は最良の商略」なりてふ觀念を、僅々一代の新商業生活を經來りたるに過ぎざる日本商人に向つて豫期するは或は無理なる事ならんも、然かも其不健全なる悲むべき分子たるには相違なく、眞に日本國の前途を憂ふるの士は、決して此忌はしき事實を無視せざるべし。幸にして是等の事實は國民の先覺者指導者等に無視せられざりき。以上述べ來りたるが如き新日本の繁榮に伴ふ種々の惡傾向は、必ず覺醒すべき時機なかるべからず、而して其時機は遂に來りたり。日本皇帝陛下は之を見て默然たる事を得ず、即ち他國に類比を見ざる、日本の治蹟に最も著明なる皇帝陛下の**勤儉の御詔勅**は昨秋を以て萬民の頭上に下りたり、御詔勅には　陛下の御名御璽と桂侯爵の副署とあり、主として經濟上の御訓戒を述べ賜へしものにして其全文左の如し（全文省略戊申詔書參照）予は日本皇帝陛下が斯く慈母の如き大御心を以て其愛兒等を訓戒し、新なる生活の危險に向て彼等を覺醒せられし事前に二回ありしのみなりと信ず。陛下が如何に大御心を現在の社會經濟生活狀態に痛めさせ賜へし事抑し慮らるゝにあらずや。陛

下は今回の御詔勅に於て先づ商工業及び經濟上の發達上日本の取るべき政略を充分に述べられし後、明白に多くの誘惑と危險とのある處を指摘せられたり。畏くも該詔書は實業界の隅々より一般蒼生に殘りなく行き渡りしが、その**御訓戒の効果**は立處に現はれて、民の心を心とし賜ふ御門（みかど）の、今に動きなき御稜威の程に感ぜぬものはなかりき。而して此時更に御詔勅に千鈞の重さを加へしめたるものは、一時日本の政治、經濟社會を騷がしたる、彼の忌はしき**砂糖疑獄事件**なり。學才あり、名譽ある代議士及び前代議士二十三名は、意外にも腐敗議員の名に依りて法廷に引き出され、其多くが有罪の判決を與へられたりし事實は、誠に御詔勅の意のある處を、切實に彼等に了解せしめたる生ける實例とはなりたり。幾多の實業家は危險なる病的投機熱の頂上に達し居る事を自覺したり。政府も亦保守的方法を取ること丶なり、軍事費の年額支出を減じ、之を國債償却準備資金に充てたり。市及び地方團體の借金政略も立消えとなりたり。一時非常の危殆に瀕したりし經濟界は兎に角眞面目なる覺醒に依りて其健全なる狀態に回復せられんとするに至れり。又翻て地方政界の有樣を見るに、議會及び市會の如き、從來餘り多く、**所謂「政治屋」**なる者の手にありたる舊弊は、次第に減じ去りて、近來著しく其面目を改めたり。昨年の衆議院總選擧の如き最も健全なる反動の地方の政界に起りつ丶ある事を認識する事を得たるは、誠に最も慶賀すべき現象にして、過般の腐敗事件の如きは、偶々以て政界清淨の一助たるに過ぎざらん。之を要するに日本國民は昨秋の御詔勅に依りて覺醒せざるべからず。此の最も著名なる、克く事物を理解せられたる御教訓を奉體して、社會、經濟商業場裏に進まば希くは誤りなからん。予は日本人が新日本の事業の發達、物質的繁榮の著しき進

步は、全く舊日本の健全なる思想、利己的ならざる獻身的精神に依りて得たる事を忘るゝ事なく、飽までも長き歷史を有する舊日本的精神中最も時勢の推移に適合せる最善なる者を保存し、克く之を助長發達せしめ得る事を得ば、日本國民の前途は必ず洋々たるものあるべきを信ず、如何なる國民も其國固有の美德を有す、數百年來の長き歷史と經驗とより成れる一國民の美德は、一朝一夕の勞を以て他國民の模倣し得べからざるものたり。日本民族が一代の間に斯の如き隆盛を來すは敢て偶然にあらざるなり。

海外消息

十月二十九日巴里より

無念庵

露伊兩帝會見の政治的價値……露國議會の開會……西班牙内閣の更迭と其動機……無政府黨首領の死刑と其反動……佛國とモロッコと西班牙……希臘の軍政改革……獨逸の新財源とボイコット……加奈陀海軍案

●謹啓　伊藤公暗殺の悲報は流石に巴里市民を驚かしたり、維新の際公が渡英せる當時のチョン髷姿に長協差を差し居る寫眞版などを賣出す者もあり、「マ、タン」、「フイガロ」以下殆ど全市の新聞が數版の紙面を公に割きたるなど我等も遂に肩身を廣くせられたるが如く感じ申し候。此程の露伊兩帝會見は露英佛三國同盟以來の大事件として巴里人の興味を引き申候。

●露伊兩帝會見の政治的價値　フェレル氏處刑の結果、歐洲諸國の無政黨員等非常に激昂せる際とて露帝の伊國訪問は、遂に沙汰止みとなるが如く吹聽する者ありしが、露帝は遂に路を迂廻してオデッサに出て十月二十三日を以て伊太利ラコニギの地に到着、此處にて伊國皇帝ヴイクター、エマニエル陛下と會見せられたり、露帝は伊國皇后陛下及ゼノア太后殿下及び其他姫宮殿下宮廷女官等に閣繞せられて停車場を立出てラコニギの離宮に入らせ賜へ、伊國皇室の最も暖かき丁重なる歡迎の宴に列せられしが、當夜兩帝の談話は極て打解けたる者なりしと云。

▲露帝の伊國々境に入らせ賜ふや、先づ國内の注意人物四百人を捕へて之を拘禁し御召列車のラコニギ驛に達するまでの線路は二萬三千の伊國兵に依りて警護せられ、停車場より宮殿に到るまでの間は四千人の兵士十重二十重に其沿道を取卷きて露帝を保護したる由。露帝陛下は到る處

滿足なる歡迎を受けさせられ、頗る欣然たる御模樣なりしが、ラコニギ到着の夜、社會主義者の首領シクノル、モルガリ氏は、露帝に向つては何等の危害をも與へぬやう盡力すべし、されど予は當夜私の集合に於て露帝訪伊反對の趣旨を演說すべし、と宣言し、二十四日チユリンに向て出發したり、モルガリ氏は伊國の最も有力なる元老院議員にして、其部下に命じ、露帝訪伊を沮止するやう盛に示威運動を試みさせたる首魁に候。

▲彼等は何故に斯く反對するかといふに、そは言ふまでもなく世界無比の專制君主と自國の王との會見を嫌忌するが故にして、彼等は露帝の汚れたる足跡が伊國に印するは是非もなけれど、之と同時に極めて悲慘なる伊國の前途を危殆ならしむるが如き置土產を殘し行かぬやう希望するものなりと放言し、或る集會に於ては露帝を「君主專制の殉教者」として其健康を祈りたりとの事に候。

▲墺國の新聞紙中には露帝が路を墺國に取らずして、伊國に往かれたるを不愉快に思ふものもあれど、大體に於ては贊成の意を表したり。

▲されど巴里に於て兩帝の會見は大に歡迎せられたり。官憲側にては、外相ピシヨン氏之を以て、歐洲の平和は新に一の有力なる保證を加へられたりとなせり。巴里の「リベーテイー」紙は最も確實なる筋より出てたるものとして、兩帝會見の政治的意義を素破拔いて曰く「兩帝の會見には二個の目的あり、第一はモンテネグロ獨立保證及び經濟上の發達を有効ならしむる事、第二はクリイート島に關する英佛政略の維持、即ち「クリイート島はクリイート島民をして治めしめよ」てふ政略の維持なり、而して更に重要なる默約は將來露伊二國がバルカン半島に於て一致の步調を取るべしとの事なり。此最後の默約は英佛とも協議の上にて二國の利益をも抱含するものなり云々」と

▲果して然らば之れ眞に大問題なり、假令獨墺伊の三國同盟が常に獨墺二國同盟なるが如き觀を呈し、動もすれば伊國は邪魔物視し居らるゝにもせよ、露伊二國がバルカン半島に於て一致するときは、獨墺の被るべき打擊は決して尋常一樣のものにあらざるべし。猶ラコニギ到着前イズオルスキー露國外相はピシヨン佛國外相に向て、露國皇帝が歸路再び佛國領土を通過せられたしとの希望を容れたること、及び其際佛國外相と會見の上政事に就き協議すべき事ある趣を通知せりとの事なれば、兩帝の會見は假令以上の如き重大なる意義は無かりしとするも何等かの政治的意義あるに相違なしと專ら噂せられ居り候。伯林最近通信に依るに、兩帝の會見は一般に惡意に解せられざれど、中には伊太利を以て三國同盟中最も信賴し難き一分子なりと論ずる者もあり、前に揭げたる墺國輿論の態度を思ひ合せるときは、兎に角獨墺兩國が餘り快く之を見ざるが如き傾向あるは觀取するに難からず候。

●露國議會の開會　露國々民議會は去る十月二十三日を以て開會式を擧行せられたり。本年の選擧にありては上院に右黨最多數を占め居る

を以て、彼の十月黨一派の急進改革派との衝突は見物ならん。今期の國民議會に於ては左したる大問題もなかるべしとの事に候。

●西班牙内閣の更迭と其動機　本月二十一日西國モウラ内閣は突如として總辭職をなし　自由黨首領にして前内閣の首相モオレット氏代つて新内閣を組織したり。其直接の原因としては西國代議院の紛擾にあり、自由黨側の議員等は政府の失政を數へ立て、殆ど議事をなさしめず、遂に内閣を其首領に明渡したりといふにあるも、少しく之を詳細に述ぶれば、フエレル氏處刑の如き慥に其有力なる動機となりしものゝ如くに候。

●無政府黨首領の死刑と其反動　バーセロナ反亂に關係ある廉を以て拘禁せられたるフエレル氏は久しく西班牙の軍事裁判所に於て審問中なりし處、此程同裁判所は無政府黨員にして反亂兆發者の首魁なりとの判決を下し、西班牙政府は之を理由あるものとなし死刑執行を是認したり。然るに此事は不幸にも諸外國に誤り傳へられてフエレル氏に同情集まりしが、實際同人審問の事情を知る者は之を以て正當なる判決と認むべしといふ。されど此事は恐るべき印象を社會黨員に與へ、巴里を始めとし伊太利及び其他の地方に著しき影響を及ぼし申し候。

▲先づ無政府黨の本場たる伊太利の勞働同盟本部はフエレル氏の死刑に抗議する意味に於て、全國を通じて二十四時間のストライキを斷行すべしと布告したるが、其結果として、ミラン、フローレンス、ネープルス、リチン等に極めて激烈なる示威運動あり、其他の各地方に於ても騷擾起り、多數の負傷者を出したりといふ。

▲其他巴里に於ても、一大示威運動起りしが、大事に至らずして立消えとなりたるは幸なりき、然るにロンドンに於ては社會黨員等トラフアルガー公園に集りて過激なる演説をなし、西班牙皇帝を以て殺人者なりとし、其れより一萬有餘の同勢を率ひて西班牙大使館及びローマ舊教寺院に迫りたる由殊に下院に於ける英國の勞働議員は之を目下開會中の議會に持出し、眞面目に西班牙政府に向て抗議を申込まんことを決議せんと試みたりしが、英國外相は之に對して、英國政府は飽迄も他國の内政に干渉せざる方針を執て居るものなりとの極めて明快なる答辯を與へたるため、之れ又勞働黨の沈默と相成申し候。

▲されど以上の如き反響は西班牙に於ける無政府黨員及び社會黨員等に甚大なる聲援を與へしと見え、西國外相は百方之が辯明に努めたるにも拘はらず、國内愈々不穩の兆あり、是等は敢て西國現内閣を倒す程の力あらずと雖も、少なくとも其更迭を早めたる一原因とはなりしなり、而して更に大なる直接の原因とも云ふべきものは、例のモロッコと佛國と西班牙との關係ならんか。

●佛國と西班牙とモロッコとの關係　モロッコの土蠻と事を構へて、徒に國内に反亂を引起さしめたるは、西國近來の大失政と云はざるを得ざるべく、殊に近來敗報しきりに到りて、西軍は益々增援の必要に迫られ戰鬪はだらしなく繼續せられて何時果つべしとも思れず、獨り迷惑なるは佛人なり、モロッコ在留の佛人はしきりに本國政府に斷

手たる所決を促し來れど、佛國政府も今更手の出し樣なく、徒らに傍觀し居る有樣なるより、佛國の輿論は、遂に西班牙政府の失政を鳴らし、モロッコ征討軍今後發展の模樣に依つては、西班牙國の大不利益となるべしとまで痛論するに到りたり。

▲加ふるに財政の窮乏は所詮議會多數の同情を得ざれば一時的なりとも之を糊塗するの餘地なく、遂に内閣を明渡すに至りたるならん。されど何人が内閣を組織するとも、西班牙失敗恢復の經綸あるにもあらねば、新内閣の壽命も又知れたものなり とは一般に一致する處なるが如し。

●希臘の軍政改革　因襲の久しき徒に空位空官を擁する武官頻に増加して、其頭數の割合に實力を有せざる希臘の陸海軍は、擧ての宿題として茲に大改革を斷行すべく數個の軍政改革案代議院の議題に上りたる事は既に前に申上げし處なるが、希臘の軍人派は其動もすれば皇帝を凌ぐ程のものにて、各議案は彼等の威嚴の下に殆ど無討論にて代議院を通過せんとするに至れり。

▲改正案中最も著しきものは、皇太子殿下の司令長官たる官職を剝ぎ、其他總て皇族方に與へられ居る軍職を悉く剝奪せんとするものにして、代議院の議官とても之を可として投票せるにあらず、一方に於ける陸軍派の後難を恐れて、然かせしなり。アセン市中に於ける陸軍黨の示威運動は非常に盛なるものにして、多數の市民之に雷同し、軍政改革を斷行せざれば希臘王及び主なる官憲を暗殺すべしと叫びつゝ、市中を練り歩るき、今にも一大騷擾を引起さん有樣なりし由、アセン通信に見えたり。

▲希臘王ジョーヂ陛下は、此有樣を見て、陸軍派の此運動は必ず他の革命運動を伴ひ來るべきを豫想し、皇太子殿下及び他の二皇子をして軍職を退かしめ、親らはタトイの離宮に退隱し賜ひ、首相マロミカリス氏を御前に召して、卿等が皇太子以下に忠誠を盡さんが爲に、革命黨の手に苦しめらるゝ事を氣の毒に思ふが故に、朕は逸早く斯くなせしぞと仰せられ候。

▲首相は直に之を代議院に於て報告せしに、王黨議員三十人袂を連れて議場を立去りしかば、陸軍派の議官等意の儘に軍政改革案を修正通過せしめたり、猶改革派は之と同時に現ジョーヂ王陛下を廢してアブルヂ公を王位に即かしめん魂膽なる由なれば、希臘の政局は今後益々紛糾するに至るべきか。而して陛下は之に對にして、朕は一方に於ては憲法を護擁し、他方に於ては自ら率先して眞實の改革運動に盡瘁せん覺悟なるにも拘らず、同國の事情は朕をして讓位の止むを得ざるに到らしむるべき時機は近き將來に來るべきを暗示し、愁然として之れ希臘に對する英國の同情が次第に減じ行くが爲めなりと云はれたる由最近のアセン來電に見え申し候。

●獨逸の新財源と勞働のボイコット　「デイリー、メール」は報じて曰く獨逸の新稅即ちブランデー、マッチ、ガス、電燈、コスメチック及びチック等に對する新課稅は愈々十一月一日より施行せられて國

民は今更の如く英獨海軍競爭熱の高價なるを自覺する事となりたり、獨逸政府は以上の財源より五百萬磅の歳入を得ん豫算なりといふ。されど之れを英人の負擔より考ふるときは獨逸人は悲觀すべきにあらず煙草税の如き英國の勞働者は一人につき一磅三シルリングの税を拂ふに、獨逸の勞働者は僅に六片餘を拂ふ割合となるに過ぎず、されど獨逸社會民主黨はブラン課税に對して政府の不法を責め、一般勞働者に命じて總ての酒に向てボイコットを爲さしめたり。

▲勞働者は不法なるブラン課税の癈せらるゝまでは、ミルク、レモンサイダーの如き飲料を用ゐて、一切酒精を斷つ事となり酒屋は一大恐慌を來したり。其他の香油、齒磨粉税なども隨分恐税の一たるを失はざるべく、又電燈税、瓦斯燈税の如きは各商店各家ともに消極的に節約法を取るべければ、政府の思ふ中分の財源ともなるまじとの事なり云々」と

●加奈陀海軍案　過般倫敦に於て英帝國國防會議の開かれし事は前に報じたりしが、其結果として加奈陀政府は愈々近日防備案なる者を提出するに至るべく、案の內容は遠洋艦及び驅逐艦十二隻より成る防備艦隊を編成するにあり、其費用として四百萬磅を計上し、年々六十萬磅宛を支出し、之に充つるものなりといふ。加奈陀に一大艦隊を遊弋せしめざるべからずとの議論は遠き以前よりの宿題にして、一昨年の如き、詳細なる案を立てゝ之を建議せし者すらありし程なれば、該防備案は異議なく許可せらるゝ事となるべしといふ。

▲されど米國に取りては、之れ實に一大威壓なり、米國の航路補助論者は之を以て一大武器となし、政府に迫るべし。

社告

來春發行の新年號よりは「海外」欄を削り「評論」欄に於て海外の出來事をも論議することゝなれり

澁澤榮一論



現代人物評論（二十三）



△澁澤榮一男

三宅雄二郎

政治家でも軍人でも宗教家でも學者でも、模範を過去に求める事が出來るけれど實業家には之が六つかしい、實業の必要は何時も認められて居ながら尊ばれて居らぬ、その中早く重んぜられたのが農で、國の寶とせられたが、それだけ幾らか人物が現れて居る、二宮尊德などその一人である、工商も豐太閤に採り立てられ、德川時代になつても色々重寶がられ、藩の存亡が金で決した事もあるが、槍先で天下を取るといふ調子の時、德政の名の下に命令一つで貸借の權利義務を消滅させた程で、商人は到底表面上頭の上がりやうが無かつた、といつて侍になるといふ事も困難であつた、此に於て只金を作る、如何なる手段でも金を作りさへせば宜しいとしたが、幾ら金を作つても町人は矢張り町人として取扱はれる、切めての事に吉原の大門を打たして豪華を誇る位の事であつた、兎に角德義の事は

侍の事で町人の與かるところでないと見做された、人物があつても現れにくかつた、育ちも育ちで初から品惡く出來て居る、形からして町人と見ゆる許りでなく、根性からして町人根性の拔けぬのである。といつた狀態で明治維新に續いて居る、すると歐米から四民平等の思潮が入り込んで來た、剩へ國を富ますには商業の缺く可らざる事が認められた、それで士族の祿を剝がれたものは皆商業に向はうとし、長の井上、薩の五代、土の後藤等は商界で大に儲けんとした、即ち各地に士族の商法なるものが行はれ、次いで商業の重んずべきことが愈よ認められた、が四十年前を憶へば商人は殘らず町人であつた、德義を以て律すべからざる連中とのみ思はれて居つた、であつて僅か四十年來發達して來た實業界に、尊敬すべき人物を求め樣といふのは寧ろ無理である、どの方面とて完全な人物の有り樣もないが、別けて實業界に於いては、何程か頭を擡げて居るものに、何程か惡事をせぬものは無いと稱して差支ない、法律に觸れぬのは只辨つただけである。その卑劣な點に於ては實に觸れたものより甚だしいものがある、それから見ると日糖事件の磯村の如きは惡の小なるものだ、中野梧一が死ななかつたならば危怪な事が破裂したであらう、今日の實業界には良心の鈍らぬ人の相當の敬意を拂ふに値するものとて一人もないその間に在つて澁澤男は比較的宜しい方である。單に缺點の少い處からいへばこれ以上の人物もあるが、缺點の少いだけに仕事も亦少い、男の關係した仕事は多い、その仕事の多い處を見て缺點を恕し得ぬでもない、それと共に更に男の提携し來つた仲間に頗る惡い事をした人物の多いのを思へば、男の如きは本來善き方と見るべきである、男の斡旋の下に出來上つた事業は少くない、若し大病に罹り多くの重役を罷めた時、その儘病死したならば、實業界に於ける伊藤公の如く見られ、或は其れ以上に見られたであらう、けれども命強く、その後戰役につれて事業新興熱の高まると共に亦多くの會社に關係した、曩に退隱する時に關係會社からそれぞれ功勞に對して謝金を進呈した、然るに再び多く

の事業に關係するといふので、謝金を進呈したもの等は稍意外の感に打たれた、ゞづるいと言つた、病氣の治不治は豫め計り難いから已むを得ぬとして、扨て新に關係した會社は如何かといふに、男の名を列するのはその智慧を借りるよりもその信用を借りやうとするのてある、男の名は實に裏書てある、男の名があれば株の募集に應ずるものが多い、田地を賣つて應ずるものも少くない、が設けられ樣とする會社には地盤の固くないものがある、成立せぬのがある、成立しても危いのがある、男は多年の經驗から損を免れる道を知つて居るが、地方の人はその儘損失したのも少しとせぬ、中には全く破產したのもある、男を恨むこと實に甚しい、事情に通ぜぬのを不明といへば不明であるが、男の名を信用しての事とすれば氣の毒なところが無いでもない、日糖の酒匂の死んだのも、男を信じての事と酒匂自ら言つて居つた、近く三四年の事は男に取つて決して名譽の事てない、寧ろ無くもがなに感ぜられる、とはいへ此の如きは今の實業界にあつては特に珍しとせぬ、先づ男の割合に惡錢を貪らず、割合に出金するのを稱すべきてある、他人をしてその位置に在らしめたならば迚もさういふ譯に行かぬてあらう、男は今年七十、病は治つて更らに壯健を加へて居る、未だ爲すあるに堪ふる、今の處餘年を如何に送るべきかが問題て、その送り樣如何によつて、生涯を立派にすることが出來る、がそれを果して敢てするか如何か、男は維新前に外國に行き、その後も屢次行き、今年も亦米國へ行つた、とはいへ伊藤公井上侯等は屢次外國に行きながら、文明の精神に着眼することが鋭くなかつた、多數は左樣である、男も或は之を免れまい、現在の處歐米を通じて實業家が重んぜられて居る樣だが、その實重んぜらるゝより憚られて居るのである、試に實業家として傳記の存在し居るものに如何なるのがあるかを見れば宜しい、他の方面て傳記の傳はり居るもの、剰へその傳記の廣く讀まれて居るものは界げて數へられぬ、が歐米を通じて實業家の模範とすべきものは何んてあるか、政治家なり、軍人なり、宗教家なり、學者なりに

揮頗し得る程になつて居るか、名は必ずしも宛にすべきてないけれど、何程か社會に於ける位置を示すものてある、歐米に於ても實業家は過去よりも將來に模範を求むべきである、現在の實業家を以て十分だとし、それに類似するを以つて足るとせば何の稱すべきを見ぬ、日本の實業界の元勳たるべき澁澤男に於ては、此點に注意し、今後自ら處するの道を考へ、大に後進を益する樣にありたいものである。（談話筆記校閲濟）

△澁澤榮一氏の今昔

本多晉

榮一氏は生れは武州の豪農、何でも熊谷附近とおもふ、血洗島といふ村の人てすが、御維新の前即ち元治元年甲子年に初めて一つ橋に仕へました、その前年の壬亥の年に慶喜公は御守衛總督の任を仰せ付かつて京都に御出てになり、私も御供をして參つて居りましたが、その頃御用人に平岡延四郎といふ人が居り、その人の周旋て澁澤氏は京都に於て一つ橋家の臣下になつたのてす、が當時の事てあるから草莽一介の人物が直に破格の登庸を受くる譯にはいかぬから、先づ極めて輕い位置に置かれたもの、けれども氏の才幹は忽に承認せられ、拔擢されて御用談所調役下役といふ役になつた、此役は外交役ともいふべきもので、諸藩のものと交際し、それによつて諸藩の事情を聞き、又公家衆の邸に出入して頗る重要の事にあづかるものである、その上役は河村敬十郎といふ人て、氏はその下に立つて働いたのてした、氏の從弟、即ち今の澁澤喜作氏も亦氏とゝもに仕へて同じ勤てしたが、當時喜作氏は成一郎、榮一氏は篤太夫といつて居ました。以上は皆元治元年の事だが、當時の榮一氏は仲々の才子て人交りも巧者、長上に對しても部下に對しても如才なく立廻つたものてした。同じ年か扨てはその翌年の丑年かに、慶喜公が御領内に農兵を募られた事がある、御領地は東ては武州、西ては播州、攝州、河州、それから備中等にも有りましたので、榮一氏はその時農兵募集

の役を帶びて、畿内中國の諸國に行きました、武州は自分の生國でもある事ゆゑ多分行つたであらうと思ひますが能くは記憶しませぬ、備中へ行つた時は今の坂谷芳郎さんの父親坂谷朗廬さんとも交つた相で、今日では坂谷家とは親族關係さへ結ばれ、坂谷(芳郎)さんも氏の世話で大分立派なものになられたが、端緒はそのけ折に開た事だと思ひます。

それから榮一氏は御勘定組頭になりました、御勘定所といふは、民政財政を兼て預るところなので、其組頭といへば仲々權力のあつたもの、氏は其在任中に紙幣を作り、一橋領内にだけ使用させるなど、色々働いたものでした。私も後には慶喜公の御供をして幕府の人となりました。けれども元は一つ橋の家臣でした、それで當時の話を一寸今憶ひ出したから申しませう其當時御小姓役に山本四郎といつて一寸讀書の力もある友人が有りました、當時は新參ものといへば兎角蔑視の眼で迎へられる傾がある、それが又重用されるなどいへば多少は彼是人のいふものですが、何しろ語が簡にして意を盡さぬから分らぬけれど、或る時何かの話の序に、澁澤と私とを評して、「左樣だらうさ、澁澤と君とは人物が違ふから」といつた事が有りました。無論私は愚直一邊元より才氣の無いものですから、彼の意多分澁澤氏に比して、敢て私の爲すなきを諷した事と思ひます。斯う見る方が本當なのでせう。

扨て其後丑年から寅年に掛けて、兩度の長州征伐が有り、又家茂公の御薨去があつて、據なく慶喜公が起つて宗家を御繼ぎなさる事になつたが、其時には君側方と陸軍の役々並にこれに屬する者の外は一切御召連れにならなかたのである、が榮一氏は獨り新參者であつたに拘らず喜作氏と共に幕府へ御召連になり陸軍調役と云役になりました。その頃の私は同じく調役並といふものでした。それが寅年の秋の事です。

その翌年の卯年に慶喜公の御弟で京都に居らせられた徳川民部大輔といふ方、清水家を御相續遊ばされた方です、此方が佛國公使として巴里に御赴任なさる事になり、榮一氏は外國方調役といふ役名を以て隨行し

て一行の會計を預つた、外國方調役といへば早や御目見え以上、御目見え以上といへば殿樣株であるから隨分立派な役でありました、前の陸軍調役まではまだ御目見え以下なのです。兎に角氏は好運な人で、斯くして丁度戊辰の騷ぎも與り知らずに仕舞つたのです。

隨行の仲間には今尚ほ健在の田邊蓮舟翁も居られたし、醫者の高松凌雲さんも一緒でその他水戸の藩士なども多かつたのだが、その時にも面白い話がある、水戸藩の學風は誰も承知の通りなのだから、連中の船に乘る時には態々何百足といふ草鞋を作らして持て行たところが船中で外國人にでも笑れたのであらう。船がマルセーユ邊に近づくと、件の草鞋を悉皆海中へ投げ棄てゝ仕舞つたといふことでした。上陸すると早速斷髮したのが榮一氏、氏はその姿を寫眞に撮つて從弟の須永傳藏氏に贈つた、ところが此須永は頗るの頑固黨私等と共に彰義隊を起した人だから、その寫眞を私に見せて嘆息して「澁澤も此樣な姿になつて仕舞つた」と言つた事がありました。

歸朝後は靜岡に戻つて常平倉といふものを創め、駿遠州の物産を藩の手で集め、有力な商人をして經營せしめ自分はその親方となつたなどした事もあるが、間もなく明治二年に徵に應じて明治政府に仕へ、大藏省に奉職し租税正より大藏省三等出仕か少輔かにまで進んだが、井上侯と肝膽相照す所あり、その後侯と進退を共にして野に下り、爾來第一銀行をも經營する、全く商業界の人となつて今日にまで及んで居るのです、私の懇意な人に柏木忠俊といつて、元とは韮山の御代官江川(太郎左衛門)の手附元締をして居た御維新後には縣令などをもした老人がありました、もう早く死にましたが、此人が榮一氏の昔を知つて居て斯う言つた事がある、「澁澤さんほど豹變したものは有りませんなあ、御維新前には攘夷論を唱へ、韮山へ來た時などには朱鞘の大小など帶して大りきみにりきんだものだが、今見れば經濟界の人となつて第一銀行の頭取などをやつて居ると、氏の昔を知つて居るものには如何にも驚かるゝ事であらうが、併し私は日外親しく氏の口

からその轉變の動機を聞いた事があります、それは今より八九年前氏の飛鳥山の別莊で六十一の賀筵を開かれた時に、私も招かれて久し振りに氏に會つた事がある、その折に氏は演説していふ「私の今日の生涯に入つた原動力は外ではない、德川公に隨行して佛國に居た時に公用があつて彼國の主權者拿破翁三世に會つたが、その折某銀行の頭取が來たといふので、談半ばに中坐をされた、私は非常に腹が立つた、抑も銀行の頭取とは何だ、銀行といへば多くの人の資本を運用する所、頭取はその取扱の任に當るものだから言はゞ一個兩替屋の番頭に過ぎぬ、予の話は國家の公用である、それを中坐さるゝとは如何にも我國を侮辱した話と扼腕したが、その後居る事久しく事實を知る事も深くなるに從つて、初めて彼我國情の相違が知れ、銀行なるものゝ勢力をも認め、何でもこれからは實業でなくてはならぬといふ樣に思ひ込んで戻つて來た、それが私の機を見て實業界に投じた所以である」と、聞いて見れば成程最もな次第と思ひました。但し氏の演説の佛國においての事はナポレオン三世に拜謁中であつたか又は大宰相に面謁中であつたか聞たことを今はしかと覺えませぬ。

が元はといへば如何にも柏木老人の言はれた通りの人、先妻の兄の尾高惇忠氏に就いて、漢籍を學び、その思想に化せられて盛に攘夷論を唱へ、水戸の浪士などゝ往來し、その連中を食客に置きなどもして語り合つて居たもの、坂下門で安藤閣老の斬られた時なども、明かにその仲間といふでは無い迄も、大分くさいとの噂があつたとか聞きました。

兎角の評はさて置いて、氏に感ずべきものは先づ慶喜公を忘れぬ一點である、慶喜公の御眼鏡に副ひ、慶喜公の御恩顧を受けたのであるから固より當然ではあるが、公の財政向きをも大分助けて居るし、又公の御傳記編纂をもやつて居る、初は福地源一郎氏に金をやつて書かして居たが、源一郎氏歿後には、桑名の人江間政發氏に業を繼がせて居る、既に十幾年の歳月を重ねて多くの金を掛けて今尙ほ繼續してやらせて居ます。

(談話筆記校閲濟)

△澁澤男

伯爵 大隈重信

明治二年から約四十年間澁澤男とは交際して居るが、志す所異なれば語る所も自ら異なる、會ふ機會があつても敢て足下の商業若くは經濟に對する考は如何などと一々問ひ試みた事もないから、其方面より委しく批評すべき材料を持たぬ、又會うといつても、會う時には一月に一二回位も會うが、會はぬ時には半年も顔を見ぬ事がある、が何しろ長い間の交際であり、それに古い年輩のものは漸を追うて亡くなる、從つて男に會へばいつも親しい懷かしい感じがする。

男に感ずべきことは其勉强、其才氣、其勢力、其堅忍である、それに信を守るの厚い人であるから十分に依賴することが出來る、我輩なども或は社會上の事て、或は友誼上の事て此方から頭を下げて色々物を賴んだ事があるが、之れを眩と承知する迄には仲々骨が折れる、さりながら一度び承知したとなつたら最早や間違はぬ、中途半端て後をホッタラカすなどいふ事はせぬ、此點が敬重すべきである、例せば養育院の如き、最初は仲々困難な事情があつたが、男は力を添へて其後三十年來渝らずに居る、高等商業學校の如き、虎の門の女學校の如きも、それに肝煎つた人々は何時となく消え去つて了つて居るが、男は多年一日の如く今も尙ほ關係を持つて世話して居られる、男はそれ故獨り實業界のみならず、敎育事業、慈善事業の如きにも甚だ功勞ある人だ。

男の今昔を考へたら頗る變化はあらうが、卓見の士は能く世と推し移る、獨り遲鈍のもののみ徒らに舊株を守りて動かぬ事をする、伊藤といひ井上といひ皆能く世と推し移つたものだ、凡てが進化だ、進化論の理法て行くんだ、四圍の境遇事情に應じ、養はれてその時々の思想が生れる、伊藤、井上皆一たひは鎖港攘夷を唱へ英國公使館を燒かんなどゝ騷いだ連中なのだが、時の非にして事の誤れるを自覺するに於ては豁然として開國進取の國是を採る、彼れも可なり此れも可なり、

それを十年後に神風連などが起つて昔ながらの頑固を通さうとするに至つては困まる。男は幕末の幕臣であつたが、大勢改まつて最早や自ら官途に於ては大に爲すなく、別に實業界こそ巨腕を試むるの時機と見て取つたからそれに移つた迄の事、即ち時勢が男をして然らしめたのだ。

男は若い時とのみは言はず、昨今迄は頗る放縱な生活をしたものだ、伊藤公と大した變りはないとも言ひやう、が之とても何もその人の持つて生れた性質の何のと言ふべきてはなく、矢張り時代の反映てあると見ねばならぬ、由來東洋の敎は印度ても支那ても男女間の事の研究に左迄心を用ひて居らぬ、論語ても女子と小人とは養ひ難しといつた位のもので、他には左迄に詳述してない、敎が此の如く時代が又その方面の事を寛容して居た頃の生れだから、伊藤公も彼の如くてあれば澁澤男も此の如くてあると見るべきものだ、男は近來甚だ眞面目になり、孔子を私淑し論語を愛誦するといふが、それも人間自然の情てある、經路てある、人の子となつては放縱も出來るが、人の親となつては放縱は出來ぬと、普通の人には考が及ぶ、澁澤男も亦然るべく、矢張り進化の理法て境遇に順應した迄てある、此點を以ては特に男を輕重すべきてない。

男の富は安田、大倉にも劣らう、元より男は實業家てある、一身の利益を本位とせぬ事はなからうけれども、併し他より聊か出色の點は、幾分かは自己を抑えて利他的にも動く事てある、それが無かつたならば、尙ほ大なる富を作つたてもあらう、がさればとてそれのみを以て直に男は純潔なりとの論證とする譯にはいかぬ、金が出來れば名譽も欲しくなる、名譽が欲しくなれば慈善もする、これは世間一般の人の踏んで居る常逕てある、獨り男に於て然らざらんやてある。男は思慮の周密な男だ、大した富を持たぬからとて死後に子孫が澁澤家の體面を保つて行けぬ樣な事はしてない、乾度後顧の憂なき丈にしてあると思ふ。

△澁澤男に感ずる所

大橋新太郎

澁澤さんとは日清戰爭以來即ち明治三十年前後からの知合で彼此れ十五年程の御交際でせう、それ故古い方の事は分らぬ、又餘り近く接して居る爲であらう之ぞと言ふべき一節をも澁澤さんに就いて發見せぬのです、が一節として目立たぬものながら能く／＼考へて見ると尋常人の心掛けては到底學び得られ相にもないと常に感じて居ることがあります、聞く人に何でもない事の樣ですが、それは斯ういふ事であります、澁澤さんの處へ色々の人が色々の問題を持込んで行く、いや何々の企業いや何々の慈善といふ樣な事で氏の助力を請ひに行く、普通實業家などは忙しいもの、左も無くつても聞いて居れば際限もなく色々な人が色々な問題を持ち込んで面會に來るは知れた事だから大抵な人は遁げを打つて仕舞ふ、好しや場合で遁げが打てぬとしても最初からいや／＼ながらと言ふ態度で遁げを張つて會ふ、そして機會さへあれば免れ樣とする、これが人情の常である、然るに澁澤さんの態度は全然違う樣です、何人の持込む問題にても極めて善意を以て耳を傾け、好意を以て酬ゆる態度で、出來る事ならば成るべく聞いてやらうとする、それ故色々なものに關係を有し、時にはつまらぬ人格のものに引掛つて意外な迷惑をされる事もある、が此人に對する赤誠といふ事は、今日の實業界に氏ならではとの感動を與へます。

澁澤男は頗る進取的の人で、傍から見れば隨分危險だと見る事業にても何でも一臂の力を惜まぬ事がある氏の事業といつたら第一が銀行事業であらう、第一銀行は氏の經營するところ、氏の富も之によつて大部分出來たのであらうが、併し只それのみではない、日本の銀行事業は殆んど氏の力によつて勃興したといふも誣言でない程にその恩惠に浴して居る、朝鮮にも既に今より三十年の昔に銀行を開いて居らるゝその他紡績事業といふが如きも其通り、つまり澁澤氏は我實業界全局面に渡つての恩人で、氏は自己一身の貨殖よりは、

我實業の前途を如何せんといふが如き問題の上今迄の心力を傾倒し來たので、東西兩洋の實業界の交渉を附ける事に腐心されたところは何れ程か知れぬ、氏が諸種の事業に贊助を惜まず、頗る危險の場合危險の性質のものにも時には何等の顧慮もなげにその起業を助けられぬのも實は此種の精神から出て居る事だ、彼の日露戰爭後の如き、隨分起業熱が盛で色々なものが起るが、澁澤さんは能ふ限りそれ等を助けて居る、元來露骨にいへば老後の生ひ先短かるべき時の起業などいふものは得て思ふ樣にならぬが多いのだが、澁澤さんは其樣な事は顧みぬ、事業さへ起れば宜い、それは生前であらうと死後であらうと頓着はない、限りある生命は泉下に眠つても限りなき事業の運命が開けて此世に好果を續ければ足るといふ信念の上に立つて居られる、とはいへ昨今關係される事業に於て格別大きなものはない、ないといつても無理はない澁澤さんには左程の富力は無いのですからね、元來富を謀るといふ樣な考を持つて居られぬ、持たれるなら隨分富も出來るてあらうが、氏の占めんと欲する地歩は別に存する、即ち繰返しても言ふ如く、氏は我實業界全局面の肝煎を以て任じて居るのである。だから富の程度は大したものではない、世に氏を以て屈指の富豪の如くにいふがそれは徒らに氏の名聲に眩惑して實を想像するに過ぎぬので今東京に於ける十富豪を數へるならば、氏はその中に入るか出るか明瞭ではない、といふ位な處に過ぎぬ、澁澤男爵たるの體面を保ち得る丈の度に過ぎぬ。

此度米國へ行かれたが、彼は尋常汗漫の遊びとは違つて仲々容易ならぬ任務、それに澁澤さんは幾度も西洋に行つて居る人て何も珍しいといふてもなし、彼地に行つては我日本の實業家を代表して諸所に演説を試みられる、それも其地方々々に一々當て嵌まる樣なものをとの特別の注文もある上に日に平均三度位は喋らせられるといふ樣な次第、氏は是迄幾度も外客に接し、坐談にも巧に、一般に辭令には長じて居られる方だからこそやり得れ、迚も他の人々にはやれる事ではない、それ故私も切にお願みして行つて貰つたのである、未

軀誠に御苦勞様な事とお察しする、我實業界に若し澁澤さんを缺く様な事があつたら實に困却する事と思ふ此點から考へて尙ほ十分氏の加餐を求めるのである。

趣味の方面から見ても氏は仲々多方面多角形の方であるが、書畫骨董の類は薩張り好まれぬ樣だ、好んで漢書を讀む別けても論語はその愛讀する所、論語一卷で商業を營むなどといつて居られる位て餘程孔子の敎には私淑して居られる、此一事を以てしても優に氏の尋常商賈の輩と風骨を異にし居らるゝを知る事が出來やう、氏の眼光は全局面に亘つて動く、即ち政治家だちの人てある、されば明治の初年には井上侯と提携して共に大藏省に入り大藏少輔の位置に居られた經歷もある次第、それが廟議合はず井上侯の桂冠せらるると共に袂を連ねて野に下り、爾來實業界の人となつて又朝班を慕はなくなられた、政府が氏を立てんと欲した事もその後にもある、即ち明治三十四年伊藤内閣倒れて桂内閣に移らんとする間の事、時潮は井上侯を動かしてその内閣を立てんとした時山縣公は頻りに駕を澁澤邸に枉げて氏をして大藏大臣たらしめんとしたが氏は固辭して遂に起たず、從つて井上内閣も一夢に歸してしまつたが、當時氏は旣に別に自己の立脚地に就いて牢乎不拔の信念が出來、實業界の爲に重きを持せんとせられたものてある、その操守の跡を見れば愈よ氏に敬愛すべき點の多きを認めます。（談話筆記）

△澁澤男について

靜觀居主人

●**株が高くなつても賣らぬ人**　澁澤男はいくら株の相場が上つても決して自分の權利株を賣り飛ばさぬ相だ。此點は外の實業家とは餘程異つて居る。一般の實業家は金を儲ける爲めに株を持つて居るので事業を愛する爲めに株を持て居るのてない。男はなか／＼事業が好きな方て、又隨分氣の多い方て、いろ／＼の會社や事業に關係して居るが、只金を儲ける爲めに持株を賣買するやうな事は爲ないのてある。男に德望がある

のも、かういふ心懸けがあるからてあらう。

◉才氣の尋常ならざる人　世間では男を以て德望一方の人で、才氣などは餘りないだらうと想像して居る向もあるやうだ。けれどもそれは非常な間違だ。男の才氣は決して尋常のものでなく、よく何事も分り、何事をも飲込んで、適宜の處置をする才氣の充分ある人である。嘗て加藤高明から聞いた話がある。加藤が大藏省の銀行局長かなんか仕て居る時分に、銀行に事件の起つた時などはよく澁澤男を賴んで其衝に當つて貰つた。すると男が銀行の方に行て喋舌つたことは加藤が依賴した事よりも一層明瞭に筋も通り順序も正しくあるし、大藏省に歸て報告することは、銀行で答へたことよりも一層譯が分り道理も立つてゐたといふ事である。此一事で見ても彼の才氣の決して尋常一樣ならざることが分らうと思ふ。

◉彼の歷史中の一汚點　はどう言つても矢張戰後の財界を煽てゝ遂に日糖事件のやうな事までも現出さしたといふ事であらう。當時男は事業の勃興熱を尚更ら激しく煽てたといふ事は自ら明かにいつて居る。男にいはすればさうした事にも理窟があるやうである。詰りどうしたつてあゝいふ時には事業熱が出る。熱が出れば起るものは起り、伏れるものは伏れる。だから一層行く所まで行かせ、潰れる所まで潰らせて見るより仕樣がない、といふやうな意見であつたらしい。何でも男の關係して創立した會社が四分通り許り殘つてゐるので、私の關係したものは比較的よかつたといふ風に話して居る樣である。伏れたものは仕樣がないとして殘つたもの丈けが得であるといふ考らしい。けれどもあれは確かに男の失敗の一に數へなければなるまい。男も恐らく其事に氣附いて、總ての會社關係を斷つて實業界を退隱したのであらうが、元來が事業好きで且つ氣が多いのであるから今度の渡米實業團の團長ともなつて行つたのであらう。兎に角德もあり、才もあり、事業を愛し、國家的觀念のある實業界の異彩ある一人物と稱すべきである。

△村の大庄屋

風滿樓

▲澁澤榮一と云ふ人は、私たちの眼に『村の大庄屋』と云つた風に映じます。

▲村の權兵衛、太郎兵衛が庄屋に連れられて江戸見物とかに行つた時、『あんてもはア、庄屋さんのする通りにすれば間違ひは無かんべえ』と云つて、宿屋で膳部の前へ坐つた時、庄屋が箸を執れば、一同が箸を執り、庄屋が汁を吸へば、一同が汁を吸つたまではよかつたが、庄屋が過つて芋の煮たのを箸から滑らすと、一同が同じやうに芋の煮たのを取り落した。と云ふ話は我が澁澤氏の過去の實業界に於ける關係に似てゐると思ふ。

▲さうして、現在の所謂渡米實業團と云ふものが、澁澤氏を團長として合衆國の見物をやつてゐる有樣には、幾らか權兵衛、太郎兵衛どもが庄屋に率ひられて江戸見物をしたやうな趣も殘つてゐると思ふ。

▲しかしながら、全體の上から云はゞ、町村が兎に角自治制とまでに進歩した今の世には、最早丁髷頭の庄屋老人の敎訓指導を要せざるが如く、幾ら舊思想で煉り固めた我が實業界とて、今日では既に澁澤氏を過去の人として葬つてよいのである。イヤ事實に於ては既にこれを葬り去つたのである。澁澤氏が今日の實業界になほ大なる勢力があるやうに見えるのは、往日の惰力にあらずんば、青山墓地に建てられた格外れの大なる墓石が通行人を睥睨するやうな、死したる威嚴とでも云つた風のものがあるのであらう。

▲つら〳〵日本の社會の各部を見ると、文學が最も進歩して、政治、經濟が最も遲れてゐるやうに思はれる。文壇の一二作家の作品には、私の眼て見たところでは、歐羅巴の名家のものに比べて確に遜色の無いものがあると思ふが、政治や經濟は歐羅巴のそれに比べて非常に遲れてゐる。即ち日本の政治や經濟——相も變らぬ藩閥(官僚)打破、責任内閣を叫んでゐる政治界や、黴の生へた自由競爭を有り難がつてゐる經濟界——は

文壇の進歩に比して二十年は後れてゐる。

▲されば澁澤氏の如きも、若し文壇の人であつたならば、二十年前に葬られてゐるのである。

▲經濟界に於ける澁澤氏の金箔の剝げかゝつて來たのは漸く一二年のことである。さうして人が適確にそれを知り得たのは、先頃に於ける東京電車鐵道株式會社々長推選の時であつたと思ふ。

▲初め東鐵會社は、無條件で澁澤氏に後任社長の推選を囑托した。然るに彼れは澁澤氏の推す人物をば兎や角と排斥して澁澤氏の顏に泥を塗つた。世は此の時より漸く『澁澤老ひたり』を叫んだ。

▲しかしこれは澁澤氏が老耄したのでは無くて、我が實業界が多年の間勝手に澁澤氏の全身に塗り立てゝ來た金箔をば、また實業界自身が剝がしかけたが爲めである。イヤ全世界に漂ふ民主的空氣が、頑冥固陋な日本の實業界にも流れ込んで、澁澤と云ふ偶像の金箔を剝がしたのである。

▲近世の新しい空氣は、いづれの方面に於ても、古い型の人物の存在を許さぬ。後れたりと雖も我が實業界は遂に、一個の社會的細胞として以外に澁澤氏の力を認めぬやうになるのである。

▲斯く云へば澁澤氏は極はめて詰まらぬ人のやうであるが、詰らぬのは個人全體が詰らぬので、澁澤氏一人が特に詰まらぬのでは無い。――私たちは無論澁澤氏の個人としての實質の善良なることを認めなければならぬ。

▲幾ら金箔でも腐つた木には乘りがわるい。他から金箔を塗られるほどの人物は、其の實質もまた可なりのものでなくてはならぬ。

▲私は曾つて酒匂常明と云ふ人が、不眞面目な遺書をのこして自殺し、擧世滔々これに向つて淺薄な讚め方をした揚句に、酒匂と云ふ人を日糖に推選した澁澤氏にまで喰つてかゝつたものゝあつた時、澁澤氏が『あゝ見損なつた、詰らないことをして呉れた、もツとえらい人間だと思つた』と云つたと云ふのを聞いて、『流石は澁澤だ』と稍感心したことがある。

△澁澤男爵論

田川大吉郎

澁澤男に就ては私は顯著なる感想を持たぬ。澁澤男は例へば其體格の如く全部の釣合の平均を得て居る人て、其性格に特絶なる趣のない人と思ふ。從て或一點を捉へて此人の全性格を描き或は此人の社會上に於ける位置を論斷することは六つかしいと思ふ。

然しながら若し強て其間から、此人の今日の成功を得られた要素の主もなるものを考ふれば第一は氣根精力であらうと思ふ。澁澤男は有名な弄花を樂む人で嘗て福地櫻痴から弄花界の七賢人に數へられた事もある位である。處が男は極めて花は下手であつて初めの中は大抵の人に負けるけれども男は撓まず屈せず、徹夜してゞも、翌日までも、或は二日も續け通してゞも戰ふ。さうなつて來ると初めに勝つた人は氣力衰へて術を施すこと能はざるに反し、男は永い間の中に氣力冴え思慮密になつて終に最後の勝を制する。術拙しと雖も氣で勝つ。此一事て見ても男の今日の成功ある、最も多く氣根精力の人に過ぎたるに由ることが分らうと思ふ。

第二の要素は私は圓滿なる資質に基く調和的技量てあらうと思ふ。澁澤男と語る時に、人に過ぎたる新らしき鋭き考ある人と思うた事は一度もないが、大勢の人を集めて紛々たる議論の間に甲と乙との説を混一して滿足なるものを作るには一種の技量がある。男は總ての方面に對して此才幹を利用して以て今日の成功を贏ち得て居る。澁澤男の實業界に於ける位置は伊藤公の政友會に於けるそれに類する。私は伊藤公に於て卓絶なる思慮才幹を認めぬけれども、進歩と守舊の兩思潮を調和する技量を有してゐたのが其成功の所以てあらうと思ふ。そして私は澁澤男の成功も亦其然るを見るのである。

第三は其心を用ふる事の周密なりし事てある。男と談話した經驗のあるものは何人ても氣附くてあらうが、其話が誠に細かにして一點の落もない。而かも別

る丶に臨んでは必らず要を摘んで之を繰り返す。一般の人は要談の後に雜談をして、其雜談をした儘で別れる。男は要談の外餘り話さず而かも又更らに之を繰り返す。こ丶に平常の用心を窺ふに足るのである。如何なる小なることでも之を理解し、之を第三者に傳へて誤解なからしむる。夫れ故に男と話した事には行違がない。男が煩雜なる實業界の事を處するに手落なくやつて來た所以と思ふ。

明治の初年に井上侯と澁澤男とは財政上の意見が衝突して政府を去つたのを見て一種の犯すべからざる獨自一己の主義主張のある人で、先にいつた圓滿の資質、調和融通の技量あるといふ事と相戻る樣に思ふ人があるかも知れぬけれども、私はさうは思はない。あれは果斷率直なる井上侯の意見が主となり澁澤男は其れに一致した行動を執つたのであつて、性格から見れば矢張り調和の人たるを失はぬと思ふ。當時官界を退くに當つて男は、政界の事略ぼ緒に就いた、けれども實業の方面に於て大に改善する所なければ日本の國運期し難いといつた。當時官尊民卑の風頗る盛んであつたが男は此弊風を一掃せんと欲して一身を犧牲に供したのだといふ人もあるが私は其言葉には餘り重きを措かぬ。けれども男が官界を去つて直ちに實業の世界に身を措き、今日までやつて來たのは兎に角彼の識見としても許さねばならぬ。て出身が其通り嘗て士であり、其名譽ある官吏であつたからして普通の實業家とは異り氣品が何となく高い。算盤の玉や秤の目の話ばかりする人よりは餘程の相違がある。彼は好んで論語を讀む。其論語の幾分が男の品性の上にあらはれて居るか分らぬが、一般の實業家が讀書を卑み、殊に倫理德敎をおろかにする間にあつて、男の其方面に於ける修養淺からざるが爲めに其言語動作の間に多少異つた光彩を放つて居るのは矢張り實業界に先輩長者と立てらる丶一理であらうと思ふ。詰り學問の素養が男を大成せしめた一理由であつたらうと考へる。

事業家として見れば男は決して明治年間に傑出して居る人ではない。男は一代に先んじ百難を排して大事

業を企てる勇氣も經驗もない。かういふ事は性格の上より見て男の性格に適しない。男は進んで爲す人よりも退いて守る人である。自ら働きかけに立つよりも受身になる性格である。故に已に四十年近くも民間にあつて、實業界の泰斗といはるゝに拘らず、何の大事業が男の手によつて出來たかと見れば實に索然たるものである。けれども實業界の歷史より男を除けば歷史が分りにくい。積極の功は男に於て認むることが出來ぬが、消極の功は男に歸せねばならぬ。比較が當を失するかも知れぬけれども雨宮敬次郞が商業會議所に居る時は、澁澤男と相拮抗して下らざる意氣があつた。世間は之を本氣に受けず澁澤男と雨宮とは餘程の段違ひだと認めた。然しながら事業家たる資格と事業を思ひ立つ力、若しくは經營する才よりいへば雨宮は決して男に劣らない。從て雨宮より見れば自ら居ること高いのである。事業にかけては澁澤何かあらんと思つたのは無理ならぬ事である。雨宮已に然り、況んや雨宮以上に事業の趣味あり獨創力あるものは男を憚らぬ。此點に於て男の性格力量極めて明瞭になる。即ち男の短所茲にあつて長所も亦茲にあるのである。

澁澤男を外面より觀察して不思議に思はるゝ事はあれほど長く實業界に居て、總ての事業は澁澤に依らねばならぬといはれ、又高等商業などにあれほど深き關係がありながら澁澤の門下に傑出した人才を見ぬ事である。大倉去り、益田去り、澁澤去りたる今日の實業界に於て俊才の聞え高き後進の實業家が決して少くない。然るに其中に直接に澁澤の門下生なるものは殆んどない。男の經歷より見れば後進の士を愛せざるのではない。然るにも拘らず澁澤の門下に第二の澁澤の出る見込がない、それを私は常に不思議に思ふ。輕卒に判斷することが出來ぬが、其理由を察するに、男は自己の性格が圓滿にして圭角なき所より、從て他の圭角ある人物を愛用せないのではないかと思ふ。圓滿にして穩やかな人を愛して近ける、さういふ人に腹心を打明ける。而して自ら智謀才氣を負ふやうな、遣り損ふかも知れぬが遣り當てれば大業を成すやうな人を近け

ない。だからさういふ人は男と語ることを好まず其門に集らぬ。四十年の盛名を恣まゝにして門下に人物なき所以茲にあらうと思ふ。

澁澤男の實業界に於ける主命は已に盡きた。男は自ら知るの明あつて已に實業界を退いたからして此事は言ふの要がない。今後男は餘命の續く限り心血を濺ぐ事は蓋し東京市養育院の事であらう。市にある所の鰥寡孤獨無告の民を集めて感化するは都市政策としても必要なる事であり、又志士仁人の志に適つた大切の事業である。男の此思想は蓋し論語より來つたもので、海外の事情を觀察して一層其考を深からしめたらうと思ふ。何にしても男の此事業に考へんとするは益々男の品の高さを見るのである。男は身實業界にあつて錙銖に齷齪たらず、よき泰斗指導者であつたが今後は慈善界の王者となるであらうと思ふ。男の生涯は明治史に於て光ある生涯の一たるを失はない。即ち彼の生涯を通觀して特に感ずべき顯著なる事なきも、實業界にあつては其高き品格を維持し來りしことは充分の敬意を捧ぐるに足るのである。

趣味の人（下）

黒頭巾

其一

◉趣味ばかりの人は、必ずしも世に益無く、去りとて無趣味の人は、交はりても面白く無し。而して、吾輩は未だ無趣味の人の不朽の事業を成就したることを聞かず。

◉「猫に小判」といふは、小判が猫の趣味に合せざる也。猫と雖も、石礫よりも小判の美しき位の事は分るなるべし。

◉自分に趣味無き事は、兎角、ツマラヌやうに想はるべし。大局に志ある者は、須らく趣味を廣くせよ。

◉大人物は「趣味の人」ならずんばあらず。大人物の趣味は、博くして大なり、狹くして深きにはあらず。

◉混々として玉を吐きて盡きざる、狹くして深き、十丈の幽井の如きは、則ち隱君子の趣味のみ。

◉大人物の趣味は、往々、頗る平凡也、寧ろ俗也といふべし。大園遊會に、樣々の模擬店を並列せるにも似たる也。

●賢を賢として色に易へよといふは、趣味より悟入せる語なり。色は趣味なり。求賢の志を趣味とせよといふにあり。

●公伊藤は、つねに「適材適處」を口にす。「適材適處」は、彼の議論にあらず、彼の趣味也。

●蓋し志の極致は趣味ならずんばあらず。愛錢家の、吐月峯に於ける如きは、努力にあらず、趣味也。

●美人の繪葉書は賣脚早く、看板娘の煙草店は、客の懐を煙とせしめ易し。美は人の趣味也。

●人は理性の前には已む無く動く。而して趣味の爲には樂んで努力す。

●されば、課業は疲勞を喚起し、趣味は疲勞を打消す。

●今夏の最中に、東京俱樂部の野球團が、一日に四回のマッチを實行したるは、人を驚かせり。彼等は、學校に於ては、一時間に十分の休憩を必要とする學生也。

●森鷗外の如きは、軍醫として勵精するの外、筆陣雄健、頗る文壇に振ふ。

●世、彼の精力絶倫を稱するものあり。然れども文學は彼の趣味也。若し彼に、毎日、文學に盡す丈けの勞力を、移して以て醫務に加へしめば、彼は疲勞するならん。

●かくいふ吾輩と雖も、唯だ一枚の手拭を被り、夏の一日を、コートに送りて、倦むことを知らず。

●趣味は、人を鞭撻し、人を向上せしむ。牽牛花を栽培するが爲に、早起の人となる者あるに非ずや。趣味は、人をして道に入らしむるもの也。

●昔し、周公は士を求めて已まず、日々、髮を握り、哺を吐く。吾輩を以て見れば、求賢は周公の趣味なり。

●一面より見れば、大人物には奇偉異常の趣味ありと謂ふを妨げず。而して其は、彼等の『志の極致が趣味となれるもの』ならずんばあらざる也。

其二

●酒は丹釀に非ずんば飲めずといふは、山陽の趣味也。山陽は「凝り屋」なり。

●「凝る」といふは、趣味の表現のみ。「凝る」の程度は、趣味の深淺に正比例す。

●「凝る」こと無くんば、趣味の樂無し。而して啻だ「凝る」ときは、味噌の味噌臭きが如し。

●「凝る」ことは、つねに不生産的なり。然れども、「趣味の人」は、「凝る」ことに於て、始めて生存の意義を發見せずんばあらず。

●女は、化粧に活き、詩人は詩に活く。すべて人は趣味に活く。

●小人は利に殉じ、君子は名に殉ずといへり。利と名とは趣味也。人は趣味に殉ず。

●趣味の在る處は缺陷の存する處也。君子も欺くに其道を以てすべしといはずや。狐も焼鼠に釣らる。

●伯板垣、角力季節には政事を顧みず。議會季節は角力季節也。

●趣味ある小僧は使ひ易からず、其の屢、路草を食ふの恐あれば也。

其　三

●「趣味の人」は「逸事の人」なり。逸事の傳ふべきものあるは、趣味の傳ふべきものあるに因らずんばあらず。

●而して逸事そのもの、亦た人をして趣味を感ぜしめずんばあらず。

●逸事は趣味に因つて生ず。而して專ら「逸事研究」を趣味とするものあり。

●茶人なる者は、多く人の逸事を語る。一花春光を知らしめ、一草秋色を知らしむ。茶人の趣味なり。

●片鱗能く雲龍を想像せしむるも、斷片的逸事必ずしも人格を盡くすといふ可らず。

●然りと雖、人物を語る者は逸事を知らざる可らず。逸事無き人物論は、漬物無き日本食のごとし。

●史家は人物研究者なり。則ち「趣味と逸事」とに於て、思を致さずんばある可らず。

其　四

●好んで「趣味」を說き、而して其人甚だ無趣味なる者往々にしてこれあり。

●此の如きは、「趣味の人」にあらず、「趣味」を以て職業とするの人なるのみ。

●職業を趣味とするを得れば、始めて大成す。而れども趣味は職業にあらず。

●畸人傳に列する第一の要件は趣味にあり。而して非常識は其の第二ならずんばあらず。

●文人、多くは趣味と非常識とを鑑別せず、一概に之を畸人傳に編入し、故人をして泉下に苦笑せしむること往々にして之あり。

●吾儕、畸人傳を讀み、嘗て此の嘆を發す。蓋し、趣味を職業とする人の手に藉つて、書かれたる畸人傳は、つねに此の缺點あるを免れず。

●趣味は自然に出でゝ抑制す可らざるに至つて、其の妙を見る。人を見るは、其の能力と趣味とを、併せ識

らんことを要す。

●趣味を衒ふは、醜にして罪惡也。自ら誤るのみならず、又往々人を害ひ世間を毒す。

其五

●幇間者流が、五ッ紋の羽織に、仙臺平の袴を着け、眞面目に推出し來るを見れば、實に噴飯を禁じ得ず。

●彼の儼めしき禮裝が、幇間なりと聞けば、扇子を揮つて額を叩かざるも、既に十分の可笑味あり。

●彼等が殊勝らしく、十徳を着け、腕を開き、反身になつて、大官貴人の坐せる前にも、巨口を開いて「コレハ／＼お珍らしい」と言つて空笑しつゝ突立つ。

●無禮は、彼等の禮義也。彼等は突立つて大笑しつゝ、坐して靜かに煙草を喫む。

●幇間の趣味は出世間的なるにあり。名僧知識は、高く上に、世間を出づ。幇間は則ち卑く、下に世間を出づ。

●地上に活動する者は、出世間的の趣味を必要とす。東京人が海水浴にゆくが如し。

●或者は、善知識に就き、或者は、幇間を招く。而して或者は、名僧をも招き、幇間をも招く。

●古文學は、餘りに出世間的なるが故に趣味あり。出世間的は世間的を修養す。

●三千年前の古文學は益世の中に榮え行くべし。現代の文學も、遼焉たる後の世より見たらば、趣味の津々たるものあるならん。

●世間の趣味は日に俗惡になるべし。而して幇間者流は愈ます／＼其の存在の必要を知らるべし。

●世間的は出世間的を求め、出世間的は世間的を求む。世間的と、出世間的と、つねに相引く。

●國府犀東に、「頭巾取れば和尚なりけり遊女町」の句ありと聞く。末世の僧は、バナマを戴き、此句、漸く古文學に入る。

●「寺から里へ」の俚諺は、出世間的が世間的趣味を了解することを表白するものといふべし。

其六

●吾輩は、正岡子規を追想する毎に、其の「趣味の人」の中の人たりしことを懷ふ。

●「趣味の人」としての山陽は、蘇東坡の再來の思無くんばあらず。古今、逸事の多く傳はること蘇東坡の如きはあらず。

●吾近世の「趣味の人」は、山陽也。山陽の逸事に富めるは、オサ／＼蘇東坡に譲らず。

●吾輩、子規の病床に侍して、運坐の列に入ること僅かに兩三度に過ぎずと雖も、彼の面目、趣味つねに眼前にある心地す。
●人格事業相異なりといへども、吾輩は、何と無く、子規と山陽とを聯想す。
●當時子規の病狀に侍する者、先づ枕邊に、虛子、碧梧桐あり、四方太、蒼苔、繞石、把栗、墨水等環坐す。
●子規は、枕を推して語る。床上の豪氣、一世を空しくするの態度あり。
●一室の中、諸國の珍物、贈り來れるもの處狹しと並べられたるは、宛として人類學敎室を觀るの感あり。
●子規病床に在ること既に多年。彼、俳句に從事して以來、健康幾年もあること無し。然るに彼の出題を見れば、野花幽草、常人の深く注意せざるもの、彼、仔細に之を說明す。
●知るべし、彼、本來「趣味の人」、少時の遊戲にも、早く既に花草の生涯に心を潜めしことを。
●子規に、小齋記あり、「ほとゝぎす」に載す。文情淸婉にして緻密。人をして魂銷せしむべし。
●彼の運座には、宗匠の席といふもの無く、師弟子と無く圓座す。一題十吟、十題一首。無記名投票を以て句の點數を定む。
●開票の後、子規に向つて評論を挑む者は、碧梧桐也。
●「常サン……ソリヤあなた」「オマエ……ソリヤ」、碧は、子と從兄弟の間柄とか聞く。其の俳壇に立つは、敬虔の態度あり。
●碧梧桐が、「白い椿、赤い椿と落ちにけり」は、當時、俳壇を賑はしたる問題なり。
●虛子は、偏へにオトナシかりき。つねにニコ〳〵したる少年は蒼苔なり。彼は當時の一茶也。
●蒼苔の失踪するや、皆以て、彼死せりと爲す。子規は哭蒼苔文を作つて「日本」に載す。
●既にして蒼苔、飄然歸來る。彼の句に曰く、「鮒の子の靑田の中をチヨロ〳〵す。
●四方太は眞面目なる男也、彼の句には剽悍の氣あり。「河豚割くや、出刄に滴る血の黑き」
●芝邊より來りし中年男は墨水なり。彼は世間咄を面白く咄し愛嬌あり。「夕飯や、子も蚊も鳴いて忙しき」
●吾輩を、子規庵に紹介せしは繞石なりき。繞石は瀟洒、而して運座の名人なりき。「人寶し、薄分けゆく人の後」
●衆星を統率する者は子規也。彼の人格、趣味。眞に

諸弟子に圍繞されたる。世尊の態度無くんばあらざりき。

●元祿の中興に於ける、芭蕉も亦た蓋し如此なりしならん、斯人ありて、斯道振ふ。

●聞く、子規は、刺味を好み洋食を好み、あらゆる濃厚の食物、美食、乃至凝つた料理、皆之を好み、食物に於ける趣味は、博くして豪宕なり。

●彼が肺を病んで猶ほ能く、長く氣力を保持したるは、人格の力に依るといふも、亦た其食物の趣味にも待つところ無くんばあらず。

●彼は、海の見ゆる處にて死に度しと云ひ、興津に轉地するの意あり。再び死に瀕して再び蘇し　往将の中、冥途の火車、遂に鶯横町に入り來る。

●彼が最後の句は哲人の風格を帶ぶ。『糸爪咲いて痰のつまりし佛哉』。噫、此句、垂死の口より出づ。彼は詩に依て道に進める者也。

●子規をして、九百年前に生れしめば、『窮死二南荒一吾不ㇾ恨、此遊奇絶冠二平生一』の句は、彼の口より出づ可かりし也。

●子規、病肺十年、『未だ天下を取らず、蚤と蚊に病みし』の句あり。而して彼は、遂に病床に天下を取つたる也。

其七

●夜の雨に、俥の中より見渡せば、秋の町こそ面白ろきものなれ。

●乾坤、冷氣に濕ひ、夜色森々として燈火鮮か也、湧くやうなる春の色は無けれども、彫るごとき秋の光は深し。

●就中、今日、此頃の美しきは菓物店にとゞめたり。

●柿、栗、バナヽは言ふに及ばず、葡萄は紫纈々、林檎の紅魁は紅陸離。紅、紫、黄、青の珠を盛りたる竹籠も自から野色を添え得て好し。

●瀨戸物店は、鮮やかなれども、秋立ちては冷たし。

●看板は氷屋の儘にして、早や燒芋の煙の軒を漏れて暖かきも似合はし。

●呉服店こそ、かねて麗はしきもの、第一に數ふれども、浴衣の大柄なるが綿物の地味なると入換はるなれば、此にも秋風寂しく吹く思あり。

●山には紅葉あり、街には菓物店あり。秋來、天地燦爛の色彩は、唯だ此兩者に集まる。

●博士坪井(笑語老)當年歐洲に留學するの時、巴里

に在りて、街上觀察を試み、統計的研究を東洋學藝雜誌に載す。

◉彼には、別に、看板考の作あり。片々たる小冊子也といへども、彼が街上觀察に趣味を有するや久し。

◉橫井小楠、全國を周遊して政事家を歷訪す。長州に入て、村田清風を病牀に問ふ。清風は、其の歷遊する所以を問ふ。小楠答ふ、地方の形勢を視察するの標準はこれ〳〵云々也。

◉清風曰ふ、更に一箇條あり、御氣は付かれぬや。小楠尋思すれども、分らずといふ。清風曰ふ、町に入つて玩具の多きを見ば、柔弱なる處と知るべしと。

◉是を以て見れば、大政事家村田清風は、又た一の街上研究者たりし也。

◉秋來、光澤を加ふるもの、靴店も亦其一なるべし。然れども、靴や帽子店は何と無く引立たず。靴は殊に棚に一工夫を出して、色彩を鮮明ならしむべし。

◉靴といへば、吾等は鞆屋を懷想す。而して鞆屋の亡主人を聯想す。

◉人は言ふ、彼は舊賤民の出也と。然れども吾輩の聞く處を以てすれば、必ずしも然らざるに似たり。

◉先年、彼に一女あり、妙齡にして美也。何事ぞ、彼、帝都の新聞に、其の女の爲に、求婚廣告を出す。

◉或は言ふ、是れ彼が「趣味」の發現のみ。或は言ふ、是れ鞆屋の廣告也と。吾輩は、其の是非を知らず、然れども、賤民出身の說の根據は此處に出づ。

◉此の如きは、兎も角も、帝都に於ける、求婚廣告の嚆矢なりと謂ふものあり。

◉帝都にては或は然らん。地方に於ては、是より遙かに、早く、求婚廣告を出せる者あり。

◉時は明治の十六年、神風の伊勢の國は津の大觀音の境內に、活版印刷を業とする奇男兒、中尾藤三郎、伊勢新聞に緣談廣告を載せて、大成功を占め、更に廣告の謝辭を載せたるの奇聞、則ち是。

◉彼の緣談廣告にいふ、「貧富を論ぜず、年齡十七歲以上廿五歲以下にて、嫁にならんと思ふ婦人は照會あり度し。」

◉世には、彼以上の奇人あり。其の翌日、彼に逹せる葉書にいふ『君の如き廣告は未曾有といふべく、寔に開化の通人と感ずるに堪えず、愚老に一人、三平二滿の少女あり、名を幹子と稱す、當十九年七ヶ月也。世の喩にも、見るはほうらくとやら、不日、夕景より弊屋へ一度御來臨あらんことを』近在の樋口彌門、

●見合は早速濟み、婿殿より媒介人を以て申込に對し樋口の回答甚だ振ふ。其の後半にいふ、『同君直ちに來り、くれろと言ふ、愚老あげるといふ、娘も行くと云ふ、之に依て婚儀整ふ、芽出度萬々歳。』

●此の如きは、出雲神一場の嬉劇を弄するに過ぎずといふも、又以て談柄たるを失はず。

●近時、野依秀一、求婚廣告を以て世人を驚かすといふ。又た廣告界の一異彩也。

●然りと雖も、求婚廣告以て世人を驚かすもの先例あること此の如し。今に至つては、求婚廣告は、新機軸とするに足らざる也。

其八

●蓼喰ふ蟲も、好き／＼とはいへども、「趣味の樣々なる十人十色といふもおろか也

●「東京朝日」載するところ、珍研究を見れば、中に黄金研究の如きは、人をして苦笑せしむるに足る。

●隣家の寶を數へ、他人の頭痛を疝氣に病む者の如きも、亦一の趣味たるを失はざるべし。

●吾儕嘗て、下町の一婦人、芝居の男の木の頭打つ手元に感じて夫婦となれることを聞き、趣味の展開に驚かずんばあらざる也。

●趣味の中にも、古書の趣味の如きは、品好きのみならず自から學界に貢献することもあるべし。

●侯松方、嘗て大師流に執心するは、人の知るところ也。侯、又た古書法帖を集め、志士の遺文を藏す。

●博士狩野亨吉古書癖を以て著聞す。聞說、其書齋は內外の珍籍を雜陳し、眞に五車樓の目あるに耻ぢず。

●彼は頭腦明晰、善く內外の珍籍を咀嚼し、巧みに近世吾人文の發達を說明せんことを期するものゝ如し。

●吾儕、亦た這般の志を抱き、辛苦材料を集む。故に、彼、靜養歲月を涉りて、其の研究の結果を公表するあらんことを祈るや切なり。

●白井光太郎の本草書に、瀧本美夫の經濟書に、饗庭篁村の小說に於ける、皆、すでに古書肆間の通りものとなる。

●博士伊藤篤太郎も亦た本草書を蒐集す。彼を語れば、則ち錦窠先生を想起せずんばあらず。

●十年前の初秋吾儕、故博士圭介先生を訪ふ。先生時に年九十七、仙顏にして鬚髯銀白也。瘠せて高き軀幹腰は稍曲り、滿頭の白髮蓬々として絲の如く長し。先生、字を書するに、右臂を全く盤に貼し、頭は右に傾く。

●先生の書齋は、滿室唯だ書籍あるのみ。居室に四疊

にして次は六疊か八疊なりしと覺ふ。兩室居に、壁は書棚を列ね、殊に居室の書棚は、日本植物圖說の原稿を以て充滿す。

●先生は、低き粗末の、三尺許りの机に向ひ、傍に二三の文庫あり。材料や、原稿や、書束或は紙片など、亂雜たる中に端坐して、舊稿を閱しつゝあり。彼は、學仙となれる也。

●先生は、起つて書棚の舊稿を抽きて示さる。其の卷尾にいふ、「吾老ゐて斯業を完成すること能はず、大成の事、爾篤太郎に囑す」

●博士伊藤、近年頗る魚類に關する內外の古書を蒐む。其の說にいふ、余肴を買ふの金を節して以て魚類の書を求む。書は余の滋味也と。

●乃祖は學界の恩人也、乃孫に遺すの墨痕尙ほ淋漓たるものあらん。吾輩は、彼が、切磋以て乃祖の志を成すあらんことを望む。

●京阪、由來、古書家多し。近時、村山龍平、本山彥一、內藤湖南、島井水、富岡謙三、等古書の趣味を皷吹しつゝありと聞く。

●國分青厓先年、和漢の目錄書を蒐めて自ら樂めり。[illegible]、木[illegible]、古書に熱心す。彼の書癖は、其の詩味を涵養す。

●蓋し彼の古書癖は、別種の種味を帶ぶ。恰も詩壇に於ける彼の評林體の如く、其の仙風道骨と相映發する也。

其九

●「ゴム」は、秋來、帝都を風靡しつゝあり。大紳士と郵便物とは、自動車を、丁稚と、三越の配達と、事務家とは自轉車を、而して猫も杓子も「ゴム輪」の俥を奔らす。

●兵車行の「車轔々、馬蕭々」の句は、後人、之を想像する能はざるに至るべし。

●鐵蹄戞々たるは騎兵の馬也。警鈴の轔々たるは、郵便の馬也。而して蕭々たるものは、深夜街燈の影をゆく「ゴム輪」ならずんばあらず。

●多くの器械の脈管は「ゴム」にて造らる。而して「ゴム」の精靈は、漸く人間の脈管に喰込みつゝあり。

●肺病の黴菌か空氣中に浮遊すると一般「ゴム」の精靈は、接觸するところの、あらゆるものに喰込みつゝあり。

●「ゴム」は現代の精神ならずんばあらず。輕捷、快適、便佞は「ゴム」の精神也。

●「國破山河在」といへば會津を聯想す。「佳人之奇遇」は、昔、會津人が此情を誇張するの悲歌也。

●聞說、會津の郊外に東山あり。嚴島の紅葉谷に似たる處也。壑深く溪幽に、水飛んで欄を過ぐ。夏の月にも、珠簾を捲かば、玉臂寒がるべし。

●此の幽谷の人家、悉く電燈を用ふといふ。水力は、山奥にも文明の光を齎らす。箱根は言ふに及ばず。

●而して水力の展開するところ、則ち低氣壓の起る處也。「ゴム」は驀然として輸入せずんばあらず。

●早稻田といへば伯大隈の引移りしころは、薄暮、狐狸、園中に鳴く。匆々廿年、伯大隈自働車を驅つて出入す。

●「魔風戀風」に見る大田ヶ原は、喬木森々たる間に、道ありき。今、此處、下宿屋の街燈赫灼として、帳場の俥は早や盡く「ゴム輪」なり。

●野花は、最早、村女の頭を飾らず。「ゴム」の櫛は、田婦の雲鬟にも宿る。タボ櫛の「ゴム」の絢爛たるは、鼈甲を欺く。

●「ゴム」は、「寂寞」と「不便」とを排斥し、「便利」と「快適」とを將來す。「ゴム」の到る處『混沌』死す。

其十

●飛行機も結構なれども、吾輩は、先づ帝都の紳士貴女が「ヨット」の帆影に、紅茶を樂むに至らんことを希望す。

●化粧して、飛行機に乘りて、富士山に登るの日は、尙ほ遠かるべし。

●乍併、夢想兵衞が鶴に騎りて國廻りするは、夢想にはあらざりき。飛行機は今や高く英國の海峽を飛びつゝあり。

●夢想兵衞に鶴あり。弓張月に紙鳶あり。曲亭馬琴は能く〳〵飛行器の好きな人なりしなるべし。

●馬琴は、多く支那の小說、列仙傳を讀める人也。彼の飛行器說は、恐らくは支那文學に胚胎するならん。

●日本人は現世主義の民也。日本の文學、古來、飛行機無し。

●支那人は嘗て飛行機を造らず。而して彼等は、つねに鶴に騎りて、白日昇天せんことを夢想す。

●聞說、無邊俠禪、近ごろ仙術に熱中すと。彼、飛行機に對して、果して如何の感想がある。

●若し、安全なる飛行機、案出さるゝの日、能く先鞭を著けて飛揚する者は伯大隈なるべしと、吾輩は思ふ。

●百四五十年前、備前領の農民に奇男兒あり、頗る機

軸に富む。此男、無端、飛行機發明に苦心す。

●彼は種々の鳥を以て、尾翼と身體との割合を仔細に研鑽し、遂に鳥翼に似たる一の飛行機を案出す。

●此機なほ、未定案に屬し、平地よりは飛上るを得ず先づ屋上、若くは崖の上に立ち、其の廣大なる翼を、羽ばたきして、以て空中に飛揚す。

●此男、嘗て東風に乘じて、彌生の空に飛揚し、悠々として下界の櫻雲を俯瞰す。

●空中より見下すに、櫻の下に毛氈敷きて酒宴する男女は、村の知人なるよし。

●彼は好奇心ムラ／＼と起り、其の當否を見定めんと欲し、少しく翼を收めて、稍降れば、その頰被りして舞ひ歌ふさまの、手に取るごとくにて、尙ほ確かとは、見分け難きに、イヤ少し／＼と降りゆくに、イツの間にか、櫻の梢近く降り來りて、アワヤと思ふ間に、早や體を支へかねて、恐ろしき羽風の音して、翼したる人間は、天上より毛氈に落來す。

●スワ天狗ぞと、男女は後ろを見る者も無く、命辛々遁逃す、此男、今更、手持無沙汰にて、殘肴を喰ひ、酒を呑み、飛行機を脊負ひて家に歸る。

●此事「お上」に聞へ、「異端」の考出し人を驚かす條、不都合の至とあつて、村を追放さる。

●吾輩の知るところを以てすれば、維新前、日本人が飛行機を獨創したるは、此男より外に無し。宜しく門閭に旌表す可かりし也。

●かゝる工夫家の名すらも、後の世に傳はらざること豈、悲む可らずや。今頃は、草葉の陰で、嘸々、飛行機の新聞記事に憧がれつゝあるならん。

●長崎は、紙鳶の名所也。佳話あり、昔し、市民大紙鳶を飛ばすに、尾輕くして繫ぐべきもの無きに困しゐる折柄通り掛りし乞食を捕へて、早速結び付けたれば、大紙鳶は正しく大空に鳴つて飛ぶ。

●乞食は悲鳴すれども及ばず。偶、天狗、空中を飛行するあり、乞食則ち哀號して援を求む。天狗則ち鼻を掩ひ羽扇を揮つて曰く『付クな／＼』

●此の如きは、一笑話に過ぎずと雖も、乞食の大空に哀號する時、恐らくは吾等の白髮を待たずして來らん

●約、三十年前、近江國蒲生郡中野村の好事者、大紙鳶を製する者あり。仙架紙六千葉を綴り合せ、竪十四間、横十二間二尺。上部には帆立貝と蛤蜊四個とを橫へ、空中蜃氣樓を吐き出すの意乎。而して釣糸の數。計九十筋、長さ五十八間、揚ケ糸の太サ周一寸八分、長

サ二百五十間、卸す時は卷々筒のごとくにし、揚る時は、伸張背面へ竹を以て縱横に結び付く。竹の太サも六寸より八寸に及び、尾には藁繩凡そ三十貫を垂るといふ。

●有史以來未だ此の如き大紙鳶あらざるべし。此の紙鳶の尾には乞食の瘠せたる軀幹は二ッ位は繋がるべし

●二十世紀は、古人の夢想を實現せんが爲に、腦力を絞りつゝあり。古の大空想家は、多くは先識の明を爲すに至らん。

其十一

●「藝は身を助くるほどの不仕合」といへり。趣味は屢人をして貧ならしむ。

●趣味以て生を送る生活は、客觀には詩的也。恰も、農村の茅屋が寫眞に宜しきが如し。

●猗頓には趣味無し、故に能く彼をして富者たらしむ。若し彼に趣味ありとすれば、吐月峯の趣味のみならん。

●富者は必ずしも沒趣味ならず、然れども沒趣味は、尤も富貴なり易き所以の第一手段たらずんばあらず。

●糸瓜(ヘチマ)はブラリとしたる故に趣味あり。藝術の士は、糸瓜也。ブラリとして趣味を生みつゝあり。

●然りと雖も、世の中は、ブラリとしては暮らし易からず。文章藝術の士、「何の糸瓜と思へども」なほ窮する所以也。

●廣瀨宰平は住友の白鼠也。彼は淨るりを道樂とす。其の須磨の別莊にあるや、附近の知人出入の者を集めて聞かしむ。

●其の甚だしき惡節なるが故に每夜汗を流して語るも定連あること無し。彼、一策を案じ、辨當御馳走を出して、高座に上る。辨當盡くるころ、聽衆、河岸に着きたるマグロの如く、ゴロ〳〵として橫たはる。

●紳士富豪、一夕、向島に淸遊を試む。尺八の名手某を聘して興を添へしむ。某感激、秘術を盡して、月明に浮舟の一曲を試む。

●坐に一富者あり、數々感嘆す。曲終りて、傍人を顧みていふ「鶴の巢籠は、何時聽くも妙」一坐笑倒す。月光、特地に、此の富者の顏を照らして明らか也。

●此の感嘆者、大倉喜八郎其人也。今、「鶴彥」の名を以て、往々、狂歌を試む。蓋し彼や、金錢足りて趣味を心掛くるもの也。

●「大名」藝は、將棊の噺にある如く、御取拂、御飛越ならずんばあらず。然れども、御取拂、御飛越は又た一の趣味ならずんばあらず。

●趣味を以て富者に談ずれば、木て鼻を括るべし。木と鼻とに金持の味あり。

●且つ金持の趣味といふは、猶ほ砂糖を以て甘くしたる秋南瓜の如し。

●東海道の、さる長者、膂力を自負し、入幕の資ありと稱す。東京の某大力士を比負し、一日彼を招きて、腕押を爲すに、長者三戰三勝す。

●長者、頗る喜び、其夕、力士を携へて酒樓に上る。佳肴前に滿ち絃歌湧く。美人を侍らして、再び、腕押を試むるに、十戰十敗、興大に醒む。

●長者、自から後に怯なる所以を怪み問ふ。力士曰く、「素人のお方に負けては濟みませぬ。」此力士、後ちに大關となる。

●「昔の世間金持氣質」に、粹人と無粹人との爲、不爲美妓に說得するの一段あり、事頗る卑近と雖、理明白也。

●都々逸野暮にして、酒興の最中に、相場の報告を聞きて飛去る客を、甲斐性なりとし、爲になるものとす。趣味と甲斐性との兩全なり難きケース也。

●趣味は理性を沒却せず。實行の力を消耗す。敢爲の士、趣味を制するを以て、克己第一と爲さざればあらず。

●趣味は色釆也。一點これあるが爲に、其の才幹人格をして寂寞たらざらしむるを得。

●「阿古屋琴責」は趣味也。阿古屋は名婦、威力に怯れず、趣味に屈す。重忠は、能く趣味を以て趣味を責めたる也。

●劇と、實社會との相違は、趣味の消長を以て表章し得べし。

●平安朝の世は、趣味の國也。吾輩、上野博物館に至りて、其の二間の大鼓と、翩々たる衣裳とを見るときは、櫻花の下に開展されたる古の趣味を冥想せずんばあらず。

●趣味の國には、罪惡も詩的美となる。沒趣味の國には詩的美も罪惡となる。

●考古界の名士、夜陰、往々、人家の軒を漁りて、「御札」を引剝ぐ。趣味にして罪惡也。

●彼等いふ、熊野權現の御札、木札を四隅釘付けにし、嚴重にして尤も剝ぎ易からずと。

●或者は、田舍を徘徊して、古祠の繪馬を奪ひ、佛像を拉し來るもの無きに非らず。

●或者は、蝙蝠傘の尖端に、「刺又」樣のものを付し、

古祠の扉の隙より挿入して、古像の首を取る。時に誤つて挿みたるさへに遺ることとあり。爾後「刺又」の豫備品を携ふといふ。

●趣味は、罪惡と壁一重也。趣味者は、輝ける面を見、沒趣味者は、暗き面を見る。

●筆道に藏鋒といふ事あり。蓋し趣味を藏して沒趣味に至ること、雪中に白鷺を藏するが如くならば、則ち妙處といふべし。

其十二

●三馬の田舍芝居忠臣藏を寫すもの〻中に、「風がもてくる柳陰」なよ〱と出るお輕の役を競爭者多きに困却する事を截す。

●啻に小說にあらず、明治の御世、眞に此事あり。日向見陽郡穗北と呼ぶ村の芝居の如き、又た傳ふべし。

●此村、每歲、手躍狂言を催ふし、農業の勞を慰す。三十年前の秋芝居尤も振ふ。

●此の時、俳優は六十歲以上八十九歲までのもの三十人許り忠臣藏序幕より打入迄を通して演ず。而して其の役割に至つて、立役ばかりにして女形無し。

●就中、判官を望む者最多く、悶着數日に涉りて決せず。七十六の翁、米三十俵を提供して落札に決す。又た演劇史の一佳話とすべし。

●「凝つては思案に能はず」趣味も通り越せば、知らず識らず、魔道に突入す。

●西鶴の記するところ、元祿の粹人、襖を恐く春畫を列するものあり。

●吾輩を以て見れば、先年の「時代料理」の如きも、また趣味の魔道に入れるものならずんばあらず。

●現代の料理といへども、「凝つた」ものに至つては、多く魔道に入る。餅ずしの如きも、魔道の淵にのぞむものに非ずや。

●素襖を著けて昔風のものを喰ふは淡如たる茶漬に若かざるや萬々也。

●福岡の江藤正澄、當年、好事を以て著はる。彼の店は、古書を業とし、其の裏には、土器石器、古瓦等を雜陳せり。

●「離坐敷」の茶室なるもの尤も恐るべし。門は、都府櫻の瓦を以て葺き、茶室には古瓦を敷き、土器の釜を掛く。

●主人、勾玉管玉等つけたる、フクラメル神代の衣裝を著け此の釜の前に坐し、土器の茶碗にて遠來の客に茶を侑む。

●松風の音、颯々として起り、茶碗に濺るは、石器土器時代の、趣味化したる古臭也。

●當時、吾輩、彼を訪ふのとき、彼、土器を採集に旅行して在らず。幸にして、「彼の茶」を飲むの厄を免かる。

●博士松井が毎夜、呂昇を聽くは愛嬌あり。伯柳澤が自から肩衣を著けて見臺に向ふに至つては、趣味の魔也。

●鰹節は食へばこそうまかるべけれ、自から鰹節化して何のうまかるべき。死して陶士の側に葬られて、德利と生れんことを願ふも、末期の痴情也。

●白龍、魚服すれば漁人に獲らる。大名といへども、肩衣著けて語ければ太夫の下らざるを得ざる也。

其十三

●今、上野に雁鍋無し。當年雁鍋屋主人、十四年の博覽會を當て込み、店頭に雁の大看板を掲げんとして、油　師床次正精に囑して、畫かしむ。

●畫容易に成らず。主人懊惱に堪へず。使を遣り、二百金を齎らして催促す。床次憤怒し、殆んど完成に近き畫を取つて、寸斷々々に裂く。

●財產は評價すべし。藝術界の逸品に相場無し。財は一時にして、美は永遠也。金錢は以て藝術を屈す可らざる也。

●蘇穎濱、韓魏公に上書して、偉人を見るを以て、山江河を見るに比す。蓋し「人物觀」の趣味は、「山水觀」と異なること無き也。

●吾輩は、「人物研究」の趣味を以て、「山水」「藝術」と見ると、一般の快感を得る。快心の人と共に「快心の人物」を論じ、或は「快心の人物」と共に、快心の藝術を論じて、逝かんとする多事の本年を餞せんとす。塵事蒼茫、此篇すより徐ろに稿を纏め得ざるを悲む也。

園中、夜來の落葉を集めて焚く。折柄、寒雨蕭々として降り初め、楓樹漸く紅盛して、常盤樹に映發し、「落葉の煙」斜めに松樹の間を縫ふて昇る。稿を畢へて、暫らく擔端に立ちて見る。

黑頭巾記

詩魂商才

片山孤村

美なるものに實用的のもの少く、實用的のものに美なるもの少く、美と實用とは多くの場合に於て相背馳するものである。富豪の邸宅は水呑百姓のあばらやよりも住心地が善い、即ち實用的ではあるが、あばら屋の方が繪になり易い、即ち美的である。汽車旅行は樂で便利であるが、行脚の方が苦勞は多いが趣味も深い。踞坐をかくのは樂ではあるが醜く、御雛樣然と端坐するのは苦しいが美しい。肥沃な平原よりも不毛な沙漠や山岳に詩趣が多い。

次に非實用的のものばかりで無く、人間の生存に有害なるものに美的のものが多い。頰の紅い衛生的の美人よりも、少々病身で色も少し蒼白い女の方が上品である。火災、海嘯、地震、戰爭、革命等の破壞的現象の美的なことは謂ふに及ばない。又破壞の跡そのもの、例へば城趾、廢園、廢屋の如きものも頗る美的である。人類は建設を好む動物であるが、破壞に向つても少からぬ趣味を持つてゐることは古今東西の歴史の證する所では無いか。この唯一つの場合から見ても人生の甚だ單純で無いことが解る。

さて天下實用的なるもの多しと雖も金錢に過ぎたものはあるまい、而して其非美的、即ち俗なること亦金錢に過ぎた者は無い。今の世の中では金錢がなくては一日も生存は出來ない。金を溜めることは人生の第一要義である。金に汚い人間は此の第一要義に適つた最も實用的な人間として尊重すべきである。殊に資本萬能の現代に於いて貯金ほど大切なことはない。然るに溜れば溜る程汚いものと名づけて之を賤むのは、そが實用的なるにも係はらず、吾人の審美的要求を滿足せしめない爲めである。二宮尊德の報德主義は至極結構な敎であるが、往々反抗を受くることがあるのは、實用一片で美的趣味に缺けてゐる爲めである。之に反してカトリック敎の如き背理極まる迷信が今に衰へないのは、一面には其傳說、儀禮等に於て人心を魅するが如

き美的要素がある爲めである。又武士道に於て金錢を賤むのは、道德的必要の外に亦その事が吾人の美的要求を滿足せしむる爲めてはあるまいか。斯くの如く人間社會に於て美が侮るべからざる勢力を有つてゐるとは、或る方面の人々の大に意外とする所だらうと思ふ。

金錢は最も實用的て、而も最も俗なものてあるから、昔から金錢を貯蓄する節儉家が詩歌小説の題目となつたとは無い。適に有れば沙翁の『ヴェニスの商人』やモリエールの『吝嗇家』の如く喜劇の人物として嘲笑の目標となるに過ぎない。之に反して吾人の同情を惹く主人公には經濟に拙な浪費者が少くない。富者の財を奪つて貧者を賑はす所謂義賊の輩が小說、講談等に於て如何に讀者聽衆を喜ばすかを見れば思ひ半に過ぎるだらう。

詩歌小説の主人公ばかりて無く、之を創作する詩人の中にも非實用的な消費者が多い。金錢を見ると土芥の如しとは、武士氣質のみならず藝術家氣質の一要素てある。藝術は實用を離れたる所に價値がある。美は一切の利害を超絶すとさへ謂はれてあるては無いか。美を生命とすべき藝術家が金錢の如き俗事に頭を惱すやうでは、立派な作品が出來る筈は無い。眞正の藝術家に金錢に淡白な人の多いのは之が爲めてある。併し金錢は吾人の生存上一日も缺ぐ可からざる必要物てある以上は、出來るとなら藝術家にも經濟の才を持たせたい。盜が好きてする者は少い、貧故てある。今の文壇に雄篇大作の少いのは文士が生活難に追はれてゐる爲めてある。我が邦の文士は多くは每月壹篇乃至は數篇の文を賣らなくては食つて行けない悲慘な境遇に在る。從つて其作物にも間に合せ物が多く、一年、五年乃至は十年もかゝつた苦心の作は藥にしたくも無い。之は大人物が無い爲めてもあらうが、主として貧乏な爲めてあらうと思ふ。この際詩人に向つて富者となれと云ふのは無理か知らぬが、少くとも先づ經濟的基礎を作れと勸めるのは當を得てゐると思ふ。金錢を溜めるのは金錢に煩はされるやうに見えるが、實は金錢に

頌はされざらんが爲めである。金錢に超絕せんと欲せば金錢を踏臺とせねばならぬ。和魂漢才にならつて士魂商才が唱へられたが、自分は更に詩魂商才を必ずしも唱道をするのではないが、我が文壇の時弊を濟ふ一手段として推薦し度く思ふのである。

詩魂と商才とは矛盾した性質で一身に之を兼ね備ふるとは一寸不可能のやうにも思はれるが、前にも述べたやうに人間の性質はさう單純では無い、實に種々雜多の要素から成立つてゐる。だから聖人に犯罪者の素質があれば、畜生にも佛性がある。殊に人物が、偉大なれば偉大なる程、その精神的生活が複雜であり、豐富である。從つて詩人にして商才を兼ぬるとも不可能では無い。古今の文學史上類例を求むれば隨分ある。玆には唯最も顯著なるもの丶みを擧げて話すことにしやう。

第一は沙翁である。沙翁の家はストラットフォード屈指の財產家であつたが、沙翁の少時破產をした。父は負債の爲めに禁錮せられんとを怖れて外出する勇氣がなかつた程である。夙くより此の一家の悲慘な有樣を目擊した沙翁は身を粉に碎いても我家を再興し、我家族を苦しめた債主等に一泡ふかせてやらねばならぬ、そればかりでは無い、ストラットフォード第一流の財產家になり、進んで貴族の稱號をも得て家格を高め、零落した自分等に後指をさした奴等を見返つてやらうと決心したが、堅忍不拔な沙翁は遂に其志を貫いた。今でこそ不朽の詩聖と仰がれてゐるけれども、沙翁が畢生の目的は寧ろ現世的な財產や名聞であつたのである。さうして沙翁が現はした財政上の手腕は實に驚嘆すべきもので、古來の大文學者中この點に於て彼に匹敵すべきものはヴォルテアとホールベルとの外にはあるまいとブランデスは謂つてゐる。

沙翁は廿一二歲のとき(一五八五)故郷を出奔してロンドンに來り、劇場の下足番のやうな賤役を勤めてゐたが、間もなく俳優となり作者となり、劇場の所有權を分有するに至つて始めて安全なる獨立の地步を得、すでに千五百九十七年には六十磅(今日の四五千圓)で

ストラットフォード第一の邸宅(New place)を購ふ程になり、翌年には修繕の爲めに石材を求め(賣買契約書が遺つてゐる)、次に立派な果樹園を拓いた。この果樹園には有名な桑の木があるが、之は沙翁の手植て英國てはじめての桑の木てある。即ち沙翁は養蠶をやつたのてある。之を見ても沙翁の多方面なことが解る。

エユー・プレースの邸宅を買つてから沙翁はストラットフォードの住人『ミスター』、シエークスピアと稱する權利を得た。『ミスター』の稱號は今日の如く『君』の意味てなく、職人ならざる上流の紳士のみに許されたものてあつた。千五百九十八年饑饉の際町役場て人民貯藏の穀物を調べたとき、沙翁は町て第三番の穀物分限と云ふとが分つた。其後沙翁は更に鋭意貨殖につとめ、機會ある每に土地を購入し、晩年には郷里に於ける最も富裕なる地主の一人、否恐らく第一の富豪になつてゐたらうと云ふとてある。即ち沙翁が土地購入の爲めに支出した金額は總計九百七十磅、今日の貨幣に換算すれば實に凡そ六萬乃至八萬圓てある。

次に最も注意すべきとは、沙翁が金錢の取引に於て頗る嚴格であつて、餘り人情には頓着しなかつたとてある。即ち彼れは屢々訴訟を起し、中には彼の死後までも繼續したものすらある。千六百年三月沙翁は七磅の貸金を請求する爲めにロンドンの或る債務者を訴へた。其後幾何もなくして、麥芽代一磅十九志十片の債務を延滯したストラットフォードのフイリップ・ロドジャースなるものを訴へ、一年後には七磅の金額の爲めに同地のジョン・アッデンブロークなるものと法廷に爭ふたが、被告が逃亡した爲め更に證人を相手取つて訴訟を起した。斯う云ふ有樣てあるから、權利思想の盛んな英國ても沙翁の行爲は少からぬ非難を受けたと云ふとてあるが、世間の思惑を氣遣ふやうては金はたまらぬ。

沙翁は其富に滿足せずして、更に家格を高めん爲め千五百九十六年父ジョンにすゝめて、紋章の下附を請願せしめた。請願の理由としてはシエークスピア家の祖先がヘンリー二世に仕へて功勞ありしと、貴族アー

デン（母の實家）と婚姻せるヿ、公職にあるヿ、郷里に於ける聲譽等を擧げてゐるが、祖先の功勞などは跡形もない作り事である。又破產したヿなども匿してある。併し當時の爵位局は粗鹵極まるもので碌々調査もせずして請願を聞届けるヿがあるので、沙翁の父の請願もはじめには他の理由で聞届けられなかつたが、三年の後聽許の辭令が下がつて、シエークスピア家は紋章を有する貴族の末席に列るヿを得た。これは餘事であるが沙翁の俗才を示す爲めに擧げて置く。只玆に斷つて置くヿは、自分は此等の事實を以て沙翁の人物を引下げやうとするのでは無く、却つて之を以て沙翁の人物の偉大、即ちその精神的生活の豐富複雜なるヿを證せんとするものである。商才、俗才のみならず沙翁は凡人である、匹夫である。然るに沙翁は其外に詩人である、詩魂がある、之れ即ちその人物の大なる一證である。

次にヴォルテアの財政の才に至つては更に驚嘆に堪へざらしむるものがある。近頃佛國のフレデリック・ロッセルと云ふ人が、「ウユルテムベルヒ公國の債主としてのヴォルテア」と題して公にした通信に面白い事實が載つてゐる。ヴォルテアは獨逸のヴユルテムベルヒ公カルル・オイゲンに六十萬リイヴルを貸したが、公は其利子一割二步を終身年金として支拂ふ契約を結んだ。所が公は年金の支拂を兎角滯り勝ちで、ヴォルテアは支拂期每に公の大臣や收稅吏などに向つて嚴重な督促をしなければならなかつた。ウユルテムベルヒ公は佛國領アルサスに領地を持つてゐて、此領地の上り高の内から借金の利子を拂ふヿに極めてあつたが、公は此領地の管理者に書面では『むつかしや』の債主に滿足を與へるやうに命じて置きながら、口頭では現金を主府の金庫に運搬すべしと云ふ指令を與へたので、支拂日と云ふ支拂日に支拂の滯らぬヿが無かつた。さうしてヴォルテアは其度每に憤激しつゝ嚴重な督促狀を書いた。公その人に向つて直々に督促狀を出したヿも屢々あつた。斯の如きヿ實に廿有五年の長きに亘り、公はヴォルテアを憎むヿ蛇蝎の如くであつた。併し

ヴォルテアは決して世評の如く吝嗇では無かつた、少くとも自己一身のために吝嗇では無かつた。其證據には自分の著書で金儲をしやうとした事は一度も無かつたでは無いか。而もヴォルテアの一擧一動は悉く金になつた。彼れは實に『文筆の天才と卓拔なる財政の才幹を一身に兼備した』人傑であつた。余が所謂詩魂商才の人であつた。彼れは拔群の經濟家、先見ある企業家、幸運なる投機家で、財界の隱微に精通し、貸金、爲替割引、株式、穀物の投機、其他百般の取引、一として行はざるなく、實に巨萬の富を積んだのである。彼れはこの富を擁し、盛宴を張つて客を饗すると同時に、晩年に於ては社會的事業に盡瘁した。即ちその居城フエルネイの周圍に工場を起し、工業を創め、繁華なる都會を造り、晩年をこの『植民地』の經營に捧げた。ロッセル氏は此植民地を名づけて歐洲に於ける最初の勞働者市と云つてゐるが、無論のことである。而かも驚くべきは七十四歳の老人が僅々數年の間に作り上げた事である。彼れは七十六歳の時一大時計工場を造り、一ヶ年四十萬フランの利益を擧げ、八十二歳の時には靴襪工場を起した。——たゞ惜しい事にはヴォルテアが集積し得た幾百萬の富はその死後雲消霧散してしまつたのである。併しヴォルテアが錢を愛したのは錢そのもの丶爲めでは無く、錢に依つて勢力を得、勢力に依つてその博愛的理想を實現せんと欲したのである。即ち彼れの詩魂と商才とは早や矛盾では無くして、最も高尙なる意味に於て調和を得てゐる。この點に於てはヴォルテアの人物は沙翁よりも遙に偉大であると謂はねばならぬ。

ブランデスの擧げたホールベルヒ（デンマルクの喜劇家）も少時は貧窮に苦んでゐたが、作者として成功を得てより亦巨萬の富を作り、無妻であつた爲め遺産の大部分を某大學（アカデミー）に寄附したと云ふことであるが詳しい事蹟は未だ調べたことがない。其他ゲーテが財政の才、木材投機者としてのチヽアン（畫家）の大手腕、ショーペンハウエルの金錢上に苛酷であつたことなどは有名な話である。

成功者の話を長くしたから、次には文學者中第一の借金男ラマルチヌの話を以て此文を結ぶことしやう。

バルザックも借金で有名な文學者であるが、債主に責められる毎に、『ラマルチヌの方が自分よりもまだ不仕合だ』と云つて自から慰めてゐたが、實にラマルチヌの一生涯は大規模の財政困難の無限の連鎖だと謂はれてゐる。彼れは第一回の東洋漫遊の爲めに懸値なしの二百萬フランの負債を作つたが、紀行を出版して殆んど同額の收入を得た。彼れは又あらゆる手段を悉して收支の平均を保たんと努め、或るときは多量の葡萄酒を購入し、之を賣拂つて大なる利益を得たことがあるが、奈何な事業をしても間斷なく增大する負債を消却することは出來なかつた。ラマルチヌは馬が好きで、一人で十八頭も飼つてゐたことがある。斯う云ふ贅澤屋であるから生活も頗る大袈裟で、約二十人の僕婢と助手の外に、秘書役、筆耕、書記などを幾人となく抱えてゐた。衣類にも贅の有りつ丈を悉し、物を買ふにも一ダースづゝ注文するのが殆んど家憲のやうになつてゐた。出入の仕立屋の店で上等の天鵝絨を見ると、屹度『これでチョッキを十二枚ほど作つて呉れ』と云ふ注文が出る。或日新しい靴を買つたら履き工合が惡るかつたので靴屋に行つて苦情を申込むと、靴屋は履工合の惡い理由を說明し、將來この缺點を除くことは苦も無いと答へた。するとラマルチヌは、『宜しい、それでは十二足製つて貰ひ度い』と云つた。彼れの著作には往々巨額の收入あるものがあつたが、詩だけは賣行が惡るかつた。『イストアール・デ・ジロダン』と『土耳古史』とては二十五萬フランづゝ儲けた。十四年間にラマルチヌが著作で儲けた金は總計四百五十萬乃至五百萬フランであるが、この金高と他の收入、及び佛國民から贈與された五十萬フランを合せても、負債は拂ひきれなかつたのである。併し死ぬるまでに既に七百萬フランほど拂つてゐた。ラマルチヌはバルザックと同じく財政上の必要よりして著作をしたが、バルザックの著作が不朽の生命を有すると正反對に、ラマルチヌの著作は今日大抵忘れられて讀む人は殆んど無い。之は濫作の結果なると云ふまでも無い。貧はすまじきものである。商才の說を作る。（終）

英吉利の記憶
(世界一周記 其三)

敬四郎

(一) 古寺

グラスゴーに寺がある。

ノース ブリチツシ ステーション ホテルを出てジョーヂ ストリートをハイ ストリートの方へ曲つて、監獄の左側の坂を上り詰めると其處に黒い寺（カセドラル）が立つ。丘の麓からつゞいた建物の絶えたところが一面の芝生になつて居て、芝生の中に墓地を劃る鐵柵が圍り、その中央に尖頭多き古代ゴシックの寺が儼然として立つて居る。折からの四日を受けた部分は黒い石を稍灰色に浮かして、光と陰との交渉は莊重なる輪廓をして一層明白ならしめて居る。力、實に「力」がその表現する唯一の感じである。厚い石壁の壁の中に細長い窓を切つた外には、何等彫鏤の美があるでは無く、素より朱殿廻廊の人目を眩かすものがあるのでは無いが、質實簡素なる古代ゴシックの精神が寺其物が有すべき宗教的威厳と抱合して、其處に生ずる偉大なる崇高の感じがすべての繊弱なる建築的美観の闕如を補うて餘ある。純然たる北國趣味である、彼等の寺院をして今尚燦然たらしむる佛蘭西、伊太利に於て遂に求め得べからざる趣味である。

馬車を柵外に留めて鐵格子の門を這入ると、其處は賑やかな墓場で、一面に平盤な墓石が並ぶ。一見敷石のやうで、墓標とし言はゞ先づ石塔を想像する余等には甚だ墓場らしからざる感じがする、昔は皆この式を用ゐたのださうだ。現に角十二世紀頃からの開山なさうて、墓場の中には既に朽廢して纔に墓石の一片を留むるに過ぎない位なのも尠くない。墓石のわれ目から雛菊の花が咲いて居るのは、若き姫の幸無き戀を抱いて永へに眠れる處だらうと思つたが間違つたらうか。

墓銘は多く磨滅して苔を拂ふも倘容易に文字を知り難い。中に一つ稍明かなのがあつた、古き文字で記したところは先づ下の如くであつた。「此下にレノックスの伯爵レイが眠る、永遠の休息と神の恵とは、生きて一世の崇敬を鍾め、死して後萬人の痛哭措かざるこの老僕の上にあれ 千五百二十四年八月廿五日生、同じく九十四年十月十五日沒す」。勿論三百年の風雨に洒されて居るので一字残らず明瞭に讀み得るのでは無いが大體を綜合すると上のやうになる。墓場といふところは善人がその[illegible]を永く紀念されるところで、悪人は冥界深く埋められてその毒牙を恣[illegible]することを得ざらしめらるゝ處であるといふやうなことをスロットか誰かゞ言つて居たが、今日の人間は誰だつてそん[illegible]事て承知する者は無くなつた。試みに墓場とは、と問掛けるならば「人間の掃溜さ」位のことは三尺の童兒と雖も言下に答へやう。元來今時眞面目になつて生死といふやうな問題を考へて居る者は、尠くともわが日本には無いだらう。たゞ生きるんだ、牛や馬の如く生きて居さへすればそれでいゝんだ。牛馬に未

來靈があつたらそれこそ世界が三角になるかも知れない、來世には一つ事象を一變さして、四足即萬物の靈長といふやうなことにして見やう位なことは思つて居るかも知れぬ。兎に角現今の人間は未來といふやうな茫漠たる問題を提へて懊惱して居ることはしない。唯現在だ、精々數時間後か、先づ明日位までの處だ。未來といふ觀念が無いのだから死なぞいふことは本氣になつて考へてやしない。尤も近處に不幸があれば葬式位には行くかも知れない、但し其晩死人の顔が幽靈に出たどいふやうなことは毛頭無いことて、其儘その足て新橋の何處ぞへ飮みに行く位のことは當り前と心得て居るかも知れない。未來が無くなつたのてそれて商賣をして居るお寺の擬はざること甚だしい。素より彼等自身に未來が解得されるてはなし。お釋迦樣が見えるてはなし、當一倍の現在贏なのだから朝お勤をした口て夜端唄を歌ふ位はまだ罪の無い方、法衣を着て待合を開いたり、珠數を持つて高利の催促をして歩いたりしてる奴がベタさ。二三年前の夏、僕が鎌倉に往つて居る間に腰越の何とかいふ寺の坊主が龍口寺の賽錢箱を擔いて夜山道を逃けたと言つて大騷だつた。直ぐ捕まつたがネ、其後出獄してから今ては積濟て鼓夫をして居るさうだ、へゝエ！へゝエフて君、本當だよ、ナニ恁麽のはまだ可い方だよ、そりや偖々聞いて呆れるやうなのがあるよ。ぢや安心して寺へも往けぬ？無論さ君、お何も心配するにや當らんよ。其中に必ず輕便な組織が出來るよ、肉は肥料、骨は骨灰てなことになるよ。資本金二千萬圓て株式會社が起るかも知れない、經濟學の原則が其處まて應用されんけりやまだ駄目だよ。それぢやもう寺は用が無くなるね？極つてるさ、君。芝居小屋こそドン〳〵新しく建つて行くが今時寺の新築があつたといふことを何處て聞いた、君、これからば博覽會さ、寺なぞを建てゝる馬鹿があるものか。政は仁を旨とすべし、これも昔のことなさうだ、うんと税金を取つておいて自分等の俸給を増やすのが今日なさうだ。秋高くして馬肥えたり、これももうクラシックて、秋は高いが馬はさう〳〵肥えてばかり居るものては無いさうだ。それて矢つ張人間は人間て居るだらうかネ？そりや矢つ張人間て居るだらうさ、併し牛馬の下に立つ位な事は心得て居なくちやなるまいね。だつて實際人間が牛馬の下に着くことが出來るかね？まア當分は出來さうも無いこつたね、だから君六ケ敷んだよ。これが思ふ通り牛馬の家來になれるものなら何も騷ぎは無いやね、人間は矢つ張人間て居なけりやならぬものだから苦しいやね。利巧なやうて矢つ張馬鹿だあね、ナニそん麽に心配するにあ及ばんさ、こりや愈牛馬にや化りきれんと思つて來た時に世の中あ變らあね。往く處まて行くさ、もう直だよ。何だか心配だネ。そりや多少心配だね、心配せんても可いやうな者が心配して、心配せんならん人が心配せぬのだからね。それはさうと、

君は今全體何の話をして居たんだネ？ウム？寺の話さ、それて仰いて塔の頂を望めば、仄のりと霞むだ空の下て鳶が一羽舞つて居る。

小門を潜つて内部へ這入る。二三段の石級を下りると無數の穹窿より成つた廣い本堂へ出る。高い、細長い窓は基督の一代記を描いた繪硝子

て籠めて、それを透して射す光線が漸く人面の見分がつくほどの度合に堂內を照す。薄暗い壁の隅から、或は楯の圖を描き、或は劍で飾つた紋章などを記した旗が幾條となく懸つて居る。赤も、黄も、緑も、紫も、皆一樣に煤つて、重さうに積つた幾百年の微塵は、世の終る日まで此の旗の搖ぐことなかるべしと盲つたやうに、あくまでも寂かに過去、現在、未來を通じて死の長をあらはされば止まじと懸つて居る。

本堂の右側、年古りて殆ど木材といふ性質を失つたやうな厚戸を排して數階の石級を下りると、其處に土牢がある。戀の恨か、劍の不運か、石壁に彫つた文字は一つ一つ古き幽閉の歴史を語るのだらうが、今はそれを調べる詮がない。肉は腐り、骨は朽ちた數百年の後までも、その肉、その骨を以て刻んだ形見のみは徒に遺つて、觀る人の心に依然として古き苦悶の跡を語つて居る。

本堂の奧、內陣の左側に祈禱の間があつて、其處には嘗てクロムウエルが掛けたといふ椅子が置いてある、其處は稍明るかつた。

寺を出て表へ出た。壁際は既に暗くなつて、最高塔の尖端に燦として輝く十字を纔に夕日が掠めて居る。先祖の靈は何處へ行つたものやら最う其處には見えなかつた。

(二) 蘇國の山水

ヤア お早う、雨ですね。エ、雨です、これで三度來るんですがいつて雨て、ペン　ロモンドだのペン　ヴエヌなざア實際あるのやら無いのやらまだ見た事が無いのです、とメレンダ君が言ふ。實際雨降りは少々閉口だ、併し嘗て梅雨の中に旅の湖を見た事がある、淡々たる雲烟の中に輕舸一隻矢の如く駛り去つた其時の光景を未だに記憶して居る。或はこの春雨が稜々たる蘇國の山水に却つて淡烟揺曳的の趣を添へるかも知らん位の希望を以て出掛ける。

汽車はステーションを出て西北に走つた。ダムバートンで乘換、此處て西行の汽車を捨てゝ全く北へ進む、雨が小降になつた、或は止むかも知れない。

バロックに着いた、十時。大概雨も止んだ、或は霽れるかも知れぬ。プラットフオームの向側に烟を吐いて待つて居た汽船に乘移る。百噸ばかりの小蒸氣だが房州通ひをするやうな、あんな穢いのでは無い。眞白に塗つて、其處い例の英國旗が立てゝ、如何にも輕快らしい。

船が出た、雨は上つたが風が強い。その風に向つて駛るんだから堪らない、無精に寒い。漣波が魚鱗のやう。前に島が見える、水際に枯蘆が一ぱい生へて居る。何方へ行くのか知らんと思つて居たら船は左へ島と岸との間を通つた。元來が細く長い湖水で、それが又島で二分されたのだから岸はもう直ぐ其處だ。家がある烟突から烟が出て居る、お婆さんが庭へ出て鷄に餌を遣つて居る。家の背後、屋根の上あたりの見當に、白い、細(こまか)い李のやうな花が咲いて居る。其上は？其上は高い山だ。麓てフスの半頭に倚る、棧橋の先が爪先上りの坂道になつて、その兩側に小ぢんまりした別莊らしい家が日の光を受けて白く並ぶ——此時空は纔に晴

れて漸く日の光を洩して來た。二三人の客が下りて直ぐまた船が駛り出す。

双眼鏡を取出して前後左右を見廻す。左手に三つ四つ島が散在する。一番先の小島に蔦の絡まつた城跡のやうなものが見える、窓も何も見えなくなつて唯壁のみが遺つたところが面白い。

ラスを出てロワルデナンに掛かつた頃から湖水の幅が一哩程に窄まる。右にベン　ロモンドを望み左にベン　ヴエーンを見、更にベンヴオアリツヒをその奥にして呼べば應へんとするが如き兩岸の間を駛つて行く。地圖を擴げて舳先に立つて居るんだ、ペリペリと音がして地圖が裂けて仕舞さうだ。外套の襟を立てゝ鳥打帽をズムプリ被つて居るんだが、それでも飛ばされさうなので今度は此の方を後にして被る。

バロツクを出る時一人妙齡の處女が乘つて居た。船がロワルデナンに近づく頃舷に櫓を押して小舟を漕いで來た者がある。汽船が埠頭に着く時小舟も程近き艦艫の下にとまる。小舟の男が帽子を振つて船の女に合圖をする。下甲板の舳先に出て先程から双眼鏡を取つてその小舟を見まもつて居た船の女は、此時ヒラリと船を下りて艦徑を傳つて男の乘つた小舟に移る。本船が出る、小舟も漕ぎゆく。「レデイ　オヴ　ゼ　レーク　レデイ　オヴ　ゼ　レーター！」誰やらが二聲叫んだ。ロンドンから來たといふ二人の青年寫眞師が居た、今のの女を寫すのだから覗いて見玉へといふ。成程、水も山も轉倒してその小舟が倚先にチヨンポリ一つ點を打つた程になつて徐々と遠んでゆく。忽ちの中に湖上の美人がカメラの中へ入れられて仕舞ふ。見れば小舟が行手の崖の上に、緑葉に包まれた白き館の屋根が見える。

ベン　ロモンドの直下へ來た、巓には雪がある。時間があるならロワルデナンに船をすてゝ騎馬で登山を試むべきところだ。仕方が無いから若しあの頂上に上つて此の邊を瞰下したら何う見えるだらうと想像して見た、仲々うまく想像がつかぬ此方側丈けは何とか極つても、さて山の向側は何うなつて居るか見當がつかぬ。僕の友人の依田君といふ人が空中飛行機を發明したさうだ、今度は一つ輕便背面展望双眼鏡でも發明して貰いたいものだ。

これは直ぐ眼の前に、ロツプ　ロイの獄屋といふがある。同じ名のスコツトの小説を讀んだことのある人は、ウムさうかと點頭くところで、劍を研ぎ盾を磨いた頃の面白い物語がある。

僕等五人と、亞米利加人二人と、外に數人の客は寫眞師君其他と別れてインヴアスネードに船を棄てた。湖水はなほ四五哩を北に伸びて居るので汽船はその尖端まで行くのだといふ。船を下りて砂道を登つたところに白塗三階建のホテルが立つ。ホテルの前に馬車が待つて居る、これは汽船と連絡するので此處に船を下りた客はこれに依つて山路を五哩ロツク　カトリンに送られるのである。或人はウイスキーを遣る、或人はビールを飲む。英吉利人は紙卷を點けて、亞米利加人は葉卷を銜へてカタコト出だす。大分湖面が低くなつたと思ふ處で路が急に折れて、見渡す限が禿山になつた。處々枯草の萌出ぬではないが先づ冬枯をそのまゝ

の色で、低い灌木が印度人の頭髮のやうにチリ〳〵と縮れて居る、四分曇り日が射す。茶褐色の枯草彼地此地に灰黒色の塊が點々して居る、石か知らんと見て居る中にそれがムク〳〵と動き出す、余て話が吸い付いて居るやうだ。山の羊（ハイランド シープ）！額て見たり、繪葉書て見たり、本て讀だりした山の羊の記憶が歴然に浮んで來る、そして誰やらか頭の中て目前の羊を指して「此れだぞ、此れだぞ！」と言ふやうに思ふ。ベロックの挿畫てロック　ロォモンドを見た時さうだつた、ペン　ロォモンドの雪を見た時さうだつた、ロッブ　ロイの獸屋の跡を見遣つた時そうだつた、インヱールスネードに上つた時さうだつた。スコットとバイロンとワーヅワースと、それは〳〵應接に遑が無い。

紆曲した野徑を向ふから遣つて來る人がある。早速覗くとそれは紺に赤く緣を取つた金扣鈕附の制服を着た年寄の郵便夫だ。重さうに麻嚢を擔いて、何が嬉しいのか一人て莞爾〳〵しながら遣つて來る。馬車が丁度そのお爺いさんと擦違ふ頃此方か行つた別のお爺いさんと行合つた。双方のお爺いさんが手を握て御面相を崩して暢氣さうに話合つて居る。「おめへとこの婆アさん達者かね」位のところだらう、白毛髯をモシャ〳〵生やして、目尻に皺の幾條を寄せて、人の好さゝうな、斯うなるとジョン爺も久兵衛どんも、ホーキン婆もお作どんも、大した相違は無くなつて仕舞ふ。僕が外務大臣ならば今度の博覽會を好機として、日英田吾作懇親會を開かせるのだが、何うも其儀にも及び難くて仕方が無い、魚屋の店先を寫眞て見せた位て眞に日本人の生活が解るものか。「あ

れぢや倫敦まで手紙が届くに一世紀もかかるだらう」と出拔けにセントルイの製靴會社の支配人が皮肉る。同乘の英國人は默つて何にも言はぬ。

豁然として眼界が開けたと思ふとその底にロック　ロモンドに比して三つ一つにも足らぬ程の小湖であるがスコットの詩に依つて不朽の名を得て居る。

鹿や棲む、鱒や潜む、巍然として雲を摩して聳ゆる峰巒は羅を張つたやうな湖面にその影を浸して、左の方、水際に生ふる樅、檜木の木立の間に三四洗ひ立てたやうな白壁の小屋を有つた一灣の入江を抱いて居る屋上に突出た煙筒から白い煙が靜に騰る、何んな人が什麼事を思つて住んで居るのか知らんと思ふ。時刻は午後一時頃だつたらうが、時といふやうな観念は更に浮んで來ない。動くも自然が初めて其れを定めた時の速度て運つて居るのと、一瞬する毎に時計の針が幾何働くかといふやうなことは此處ては禁物ぢや。

宏大な建物がストロナハラッヘル　ホテルだらう、入口の下が石段になつてその下に棧橋がある。棧橋の横には白く塗つた新造の汽艇が黒煙を吐いて待受けて居る、サー　ナーター　スコット號といふのださうだ。ホテルに着いて晝食を濟して、サー　ナーター　スコット號てカトリン湖を渡り初める。時偶鳥が啼く、響は湖面を傳つて對岸に打ついて更に冴に返す、寂かだ。

スコットの詩を思ふ、鹿の逃げたのは彼の邊だらうかと嶮しさうな岩角を仰いて見る。

放たれた獵犬が一齊に吠え立てる、
岩を嚙む瀬の音が戞然として響渡る。
巖角も洞穴もその響を返して、
眠つて居た山が一時に覺める。

樅木の間に白樺が交り生えたエレンの島を左にして少し往くと、水は急に狹くなつて、船は巖に倚つて造つた棧橋に停る。髯鬚のムシヤ〳〵生えた老船長が、手づから索を取つて岸に繋る。ハイランダーの相貌を備へた水夫がそれを執つてグイ〳〵引く。水は淡褐色に澄んで底の小石が一つ〳〵數へられる。

此處でまた馬車に乘換へた。此處からが浪漫的な說傳に富んだ有名なトロサツクで、兩側に簇生した樺の木の間に新しい轍の痕がついた狹い路が走つて居る。ヂプシーだと誰かゞ言つた。何處に？と急いで見廻したが分らぬ。惑ついてる間に、アレ彼處にとメレンダ君が指す方を見ると成程居た。林の中でよくは見えぬが木立の疎らになつたあたりに座をつくつて、五六人の一組が焚火をして居た。眼の黑い美しい少女が居たか何うかは見屆ける暇が無つたが、ヂプシーを見たといふ感じは明かに殘つた。ロモンド湖を見た、カトリン湖を渡つた、トロサツクを過ぎた、そして今またヂプシーを見たと思つた時に、唯恁う嬉しいやうな、滿足だといふやうな心持がして思はず涙含んで來た。「もう可い」といふ感じがする、何だか知らぬがもう可いといふ感じがする。久しく隔てられて居た戀人が相會うて積る思を言葉に悉し得ず、遂に相擁して泣く時に恁麼心持になるものぢや無いか知らんと思つた、一種の絕對である。

トロサツクの茂みを拔けると、また新しき湖水へ出る。その岸を右に軌つて馬車はまた羊腸の山路にかゝる。また羊が居る、黑いのも居る、白いのも居る、灰色なのも居る。前よりも多く居る、各が一疋の仔羊を伴れて居る。親と子と、親と子と、縮ちやれた灌木の中にがさ〳〵して居る。馬車の音に愕いた仔羊が夢中で一間程飛び退く、そして向直つて合點の行かぬ顏をして此方を見て居る。メレンダ氏がピーといふと、變挺な貌をしながらも仔羊がヒーと返す、今度はメレンダ氏がヒーと遣ると、親羊がピーと言つて怪げんな顏をして此方を見る。何の羊も、何の羊も同じやうにする。亞米利加人が面白がつて眞似をする、果は彼方でも此方でも僞の羊、眞物の羊がピー、ヒー、ピー、ヒーと遣り出す羊に厭いて牛の鳴眞似をする、牛に厭いて小鳥の啼眞似をする、がメレンダ氏の右に出づる者は一人も無い。メレンダ氏は舌を丸めて呼子の笛の眞似までする。物眞似が端唄になる。端唄が本調子になる。恁うなると默つて居るのが馬鹿らしいからてんでんがてんでんな事を怒鳴り出す、山越の馬車の上に日英米伊の演藝會が始まつたやうなものだ、驚いて居るのは羊ばかりだ。

頭を擧げて遙かに北の方を見渡す。峻急な波を打つた峰巒が目も遙に連つて其奥は雲に入つて居る。その先に冷たい汐が岸を洗つて末は氷の山が簇して居るのかと思ふとゾツと寒くなる、これでも二十世紀か知らんと思ふ。

今度は顚みて登つて來た路底の方を瞰下す。森陰の百姓家から棠の煙が細長く上る。恁んなところに一生住んで居る者の氣持は什麽だらうと思ふ眼の碧い、髪の毛の黄金色な、そしてその頰に穢れざる、文明なる寛の力に犯されざる純潔なる血の流れを見する山の少女（ハイランドガール）があつて、兎汁でも食はしておいて與れるならば、僕は即刻この山間に踏止まつて、一生を山の人と共に送るも更に憾は無いと思つた。東京、この異郷の山と半との間に居て東京といふものが餘り强い吸引力（アトラクション）を有つて居なかつたといふことは事實である。天外の孤客、といふやうな心狀（ムード）はもう味ひ得ないやうに時代が化つて來たのであらうか、それとも東京、今、爺とか祖父（ぢい）とか言はれて居る日本人が造り上げた現代の社會其物が、彼等の子孫に對して別段の吸引力を有たぬといふことが否むべからざる事實なのだらうか。「斷朝者の日記」を讀んで國民的惡感を催したといふ青年士官は少しく偏狹、否、正直過ぎるのではあるまいか。牧師が不可いと言つたとて、それが直ちに基督教其物に對する批評だと取られては困る。愛國心は事實すべきものだらうか、それを一種のポリシイとして自己防衛の道具に使ふやうになつては、中には承知出來ぬ人が出て來るかも知れない。

アベフオイルに下りて始て人里に出た心持がした。此處から汽車がある、小晝飯を食つて、石炭の火に温まつて、六時半發の汽車でエデイムバラに向ふ。パックリピーで乘換の頃には山、森、洞窟、總てが遠退いて停車場の燈の上に夕日を受けたベンヴエヌの頂が燃えて居た。十時、エデイムバラに着。蘇格蘭の山中十二時間の記をこれて終る。

エデイムバラで城を觀て倫敦に向つた。

（三）倫敦塔

塔のあるあたりはテームスも河下になつてドックの近處になる。テームス、エムバンクメントからクレオパトラス ニードル、ブラックフライアース ブリッヂの邊を過ぎて例の倫敦市（シティー）に入り、タイムス社、英蘭銀行、株式取引所、市長官舍、紀念塔（モニューメント）のあたりを曲りまがつて落着いた先は倫敦塔。倫敦塔と言へば夏目さんの見物記以來誰知らぬ人も無い。今度の旅行の中心目的は英吉利で、その中心がロンドン、倫敦に往つたら是非塔を見やうと、疾うから期待して居たのである。遂にその塔に來た。想像して居たやうに古い石の堆積で、歷給で見たり、寫眞帖で馴染になつて居たやうな、角々（すみずみ）に四つの櫓を有つた角塔を中心にして、その左右に稍低き圓塔、角塔が連つて居る。獅子の罠と言つて、昔其處に二疋の獅子を飼つて置いたといふ門の跡に馬車を停めて、右側の切符小屋で札を買つて這入る。小學校の生徒が大勢、先生に伴れられて來て居たので混雜すること夥しい。やつと其込合の中を拔けて、今は涸れた濠を越して、中塔（ミッヅルタワー）の中を潜る。バイワード塔を這入ると、左側に高く瓦斯タンクのやうな圓塔があつて、其上に鐘櫓がある。鐘塔（ベルタワー）と言つて、昔エリサベスが未だ即位前に幽閉されて居た處だといふ、鐵格子を嵌めた小窓が二つしか無い。

血塔（ブラッドタワー）のあたりに行くと、ビーフイーターと言つて奇麗に金線で緣

取つた赤服を着た番人が立つ。鎗を突いて、白髯を生やして、處刑人(しおきにん)の肉は腐り骨は朽ちても。これのみは往昔より塔と共に遺つたのだと言はんばりに、中世紀の面影を存して居る、生きたる陳列である。

血塔に向つて謀反人(トレータース)の門(ゲート)といふがある。門は塔と塔との間を架す行廊の下が、暗く大な拱門になつて居るので、ウエストミンスターで捌かれた罪人は再び検舟でテームスを下つて、此の門を這入つたのだといふ。我が立つ處はアーチの中程に當る高處で、其處から數段の石級が下りて、その盡くるところまで昔は水が着いて居たといふことである。其處を潜れば大方日の目は二度と拜めぬことゝなつて居たのださうで、今日か、明日か、或は一年後か、二年後か、早晩來るべき運命を暗い牢獄の中に待たねばならなかつたのだといふ。斯くてバッキンガムの公爵エドワードや、サー トーマス モーアや、アン ボレーンや、カザリン ホーワードなぞが、或は憤怒の齒を喰しばり、或は憂愁の首を垂れて、斧を逆手に掲げた衛士に護られてその石級を上り來るさまが目前に浮ぶ。

ビーフイーターが立つ門の上が血塔で、其處は嘗て幼王エドワードと、その弟のリチャードとが、叔父のリチャードの爲に殺された處だと言傳へて居る。父王エドワードが崩じて幼王エドワードが即位式に臨む日、叔父のリチャードが此れを途に要して若き皇子を奪つて仕舞つた。傳いた父王の遺后と弟兒のリチャードを伴れてウエストミンスターの寺に逃込む。叔父のリチャードは遂にそれをも奪取つて塔に押込める。叔父は間も無くリチャード三世を名乘つて王位に即いたが、二人の皇子の消息は杳として聞えなかつたといふ。其後二百年を經て塔の修繕をした時に白塔の入口の階段の下から二個の小兒の骸骨を入れた匣が出た。勿論此時はその愛兒を割き奪られた母后の涙もからびて仕舞つて、叔父リチャードの骨も朽ち果てゝからのことである。人々は古き秘密を語る皇子の骨を前にして、空しくその薄命を憫んだことであつたらう。鐵格子堅く閉した塔の窓は、今も尚依然として其處に存して、風の朝、雨の夕、二人の皇子が天を仰いで過行く雲を眺めた處は此處ぞとばかり見物人に迫つて居る。

血塔の下を潜つてその白塔(ホワイトタワー)に至る階段の傍に眞鍮板の掲示があつて「二皇子の骨がチャールス二世の御代に此の下で堀出されて、其後ウエストミンスターに移された」と書いてある。此の塔が倫敦塔の起原で、一〇七八年ウヰリアム勝王が造營した以來、チャールス二世に到るまでの皇居となつて居たのである。壁の厚さが十二呎乃至十五呎に及んで、二人とは並んで通れない狹い、暗い階段が曲り曲つて二階、三階に到つて居る。今はその大部分を武器の陳列所に充てゝあるので、中には嘗て塔の罪人を苦めた拷問の機械や、仕置に用ゐて斬首臺なぞが並べてある。その斬首臺の上に刃物の痕がある。傍の説明書を見ると、此れは何年の何月何日に某々の首を斬つた時に遺つた鉞の痕であるといふやうなことが書いてある。其處の黑ずんで居るのは仕置人の血が塊つてこびり着いて居るのぢやないか知らんなぞ思ふ、素より好い氣持の仕やう筈がない。ラレーが十四年間押込めて置かれたといふのはこの塔の土牢で

ある。中世紀の音は劍と劍とがカチ合ふ響である、重い土牢の土戸がきしる音である、薄暗い部屋に女の咽泣く音である。二十世紀の音は汽笛である。今日の人は汽笛的に戦ひ、汽笛に泣き、汽笛的に死を觀る。何だか劍と、怨と、歎の中世紀が戀しくなつた。

白塔を出ると其處が廣い石甃の庭になつて、ボーチャムプ塔に至る通路になつて居る。眞中に鐵柵で圍つた小さい四角な場所がある。此處は昔首切臺を据ゑたところで、アン　ボレーンや、カザリン　ホーワードや、ジエーン　グレーや、エセックスの伯爵ロバートなぞは皆此處で最後を遂げたのだといふ。一五四一年の五月廿七日、サリスベリーの伯爵夫人が斬られる時には、白髮を亂して逃廻る夫人を、斧を振翳した獄吏が後から追廻つたといふことである。今は至つて平穏で、あたりに立つて居る五六本の木に風が當つてさゝやかなる音をたてゝ居るのが聞えるばかりだ。

ボーチャンプ塔とは主として永き幽閉に使はれたところである。漲ると迸る紅血を斧の刃に鈍めて、盡きざる怨み倫敦のこのわたりに留めた薄命の人々は、多くはこの塔内に憂き歳月を送つたのである。壁の處々に短き文字を彫つたのが遺つて居る、明日をも期し難い生命のせめてもの形見と、滿身の氣と力とを込めて彫つたものだらう。短き詩の一節がある。T. A. と彫つて其下に June 22. 1587 と附けたのがある。JANE とあるのは、ジエーン　グレーを意味するので、その夫ダッドレーの仕業だらうといふ。

何を酔狂でもあるまいに、城を築き、館を構へて人を押込め、首を斷つ。斷たれたものも、斷つものも等しく白骨と化して空しくその城、その館のみが殘る。哀れと言へば哀れ、馬鹿らしいと言へば隨分馬鹿らしい、塔を出て倫敦の町を見た時に長い〳〵溜息をした。

此廣告によりお申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

田山花袋氏著

田舎教師

好評嘖々三版出來

岡田三郎助氏畫
齋藤松洲氏裝畫

一冊定價金一圓六十錢
送費金十八錢

一冊定價金九十錢
送費金十二錢

柴田流星氏著

唯一人

社會の孤兒にして又文壇の孤兒たる著者が其孤獨に堪へずしてものせる一篇心血の文字！

文藝入門叢書

◀第一編▶

島崎藤村氏著

新片町より

再版出來

一冊定價金五十五錢
送費金八錢

◀第二編▶

田山花袋氏著

インキツボ

十一月二十日發行

一冊定價金五十五錢
送費金八錢

東京神田富山町 左久良書房 發行

信用なき店舗及卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

東京高等商業學校教授 花輪虎太郎先生著

英語擬試驗問題及解釋

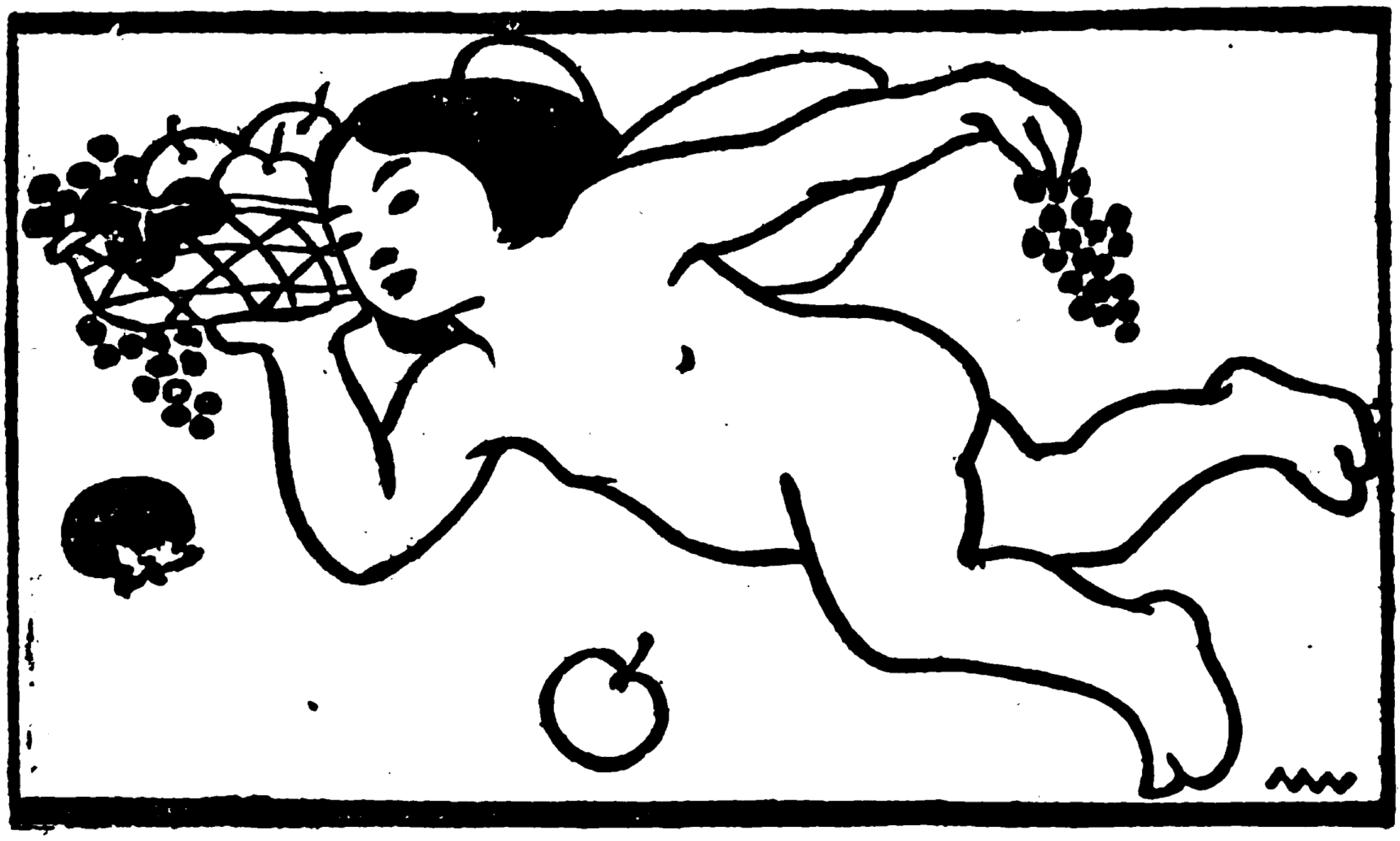
▼一册 定價五拾錢郵稅金四錢▲

各地の中學校を卒業し進んで各種高等の學校に入學せんとするも、都會に出て、親しく其準備をなし能はざる青年諸子に同情して、先生が高等商業學校教授の傍ら、東京專修學校、明治大學等の高等豫科の英語教壇に立て、親しく教授せらるゝ教材につき、和文英譯、英文和譯、文法、書取の四科目の內、日本學生の最も誤り易きもの、又は學習に難澁なるものに重きを置き、其程度を酙酌して、假りに**試驗問題**に**擬**し、別に**詳密叮嚀**なる**解釋**を附せられたるものにして、問題の數實に**七百以上**に及べり

されば、一般英語を學習するものにありても、之れを繙讀練習するときは深き興味の內に、英語の知識を得ること尠少ならざるべし

發行所 東京市本郷區駒込西片町十番地 **反省社出版部**（電話下谷九百十九番）（振替東京三十四番）

發賣所 東京堂 上田屋 東海堂 北隆館 三共社等其他



畜生

上司小劍

奥様。

私の愛犬ポチは死にました。昨年の秋差し上げた寫眞の彼犬です。何種と云ふのか知りませんが――警察署への屆けには單に西洋種として置きました――毛の長い、狆に似た奴て、何とも云へぬ愛くるしい顔をしてゐた彼犬です。

奥様。甚だ失禮なことを申すやうて恐れ入りますが、私の家へ出入りする人て、あなたを識つてゐるものは、皆、ポチの顔があなたのお顔に似てゐると云ひました。横顔の愛らしいところなぞ、ソックリ其のまゝだと云つたものもあります。

其の愛らしいポチが死にました。…………近所の農學博士の飼犬――大きな日本犬――に噛まれて死にました。

夏も最う名殘りの先月二十日頃の夕方でした。私は散歩の序に知合の新聞記者の家へ寄つて、愚にもつかぬ無駄話に夜を更かし、方々で戸を締める音のし出した時分に、『まアいゝでせう』と、欠伸混りに云ふ記者の聲を後に、開閉の工合の惡い格子戸を出て、淋しい場末の町をぶらぶらと、Songe d'enfant ――お宅の御主人のお好きな歌です。御主人が先年巴里から私に送つて下すつた小說雜誌の中にありました――を、うろ覺えの怪しい發音で、節も何も無茶苦茶に歌ひながら、自宅の裏木戸から庭傳ひの暗を衝いて、雨戸を一枚だけ締め殘した書齋から漏るゝ薄暗い火影を力に、裾の寒い足を運びましたが、例もならば、風に飛ぶ白紙のやうに、眞白の脊中を暗に浮ばせて、纏り付いて來るポチの姿が見えません。――Dans les champs ze m'assis, par un Saule abrité,――ポチ、ポチ――Et là, Sous la feuillée au Saleil transparente,――ポチ、ポチ――Commé un baiser du ciel à mon âme d'enfant.――ポチ、ポチ――と、歌と犬の名とを斷續に歌ひ且つ呼びつゝ、緣側にまで辿り付きましたが、ポチの姿はまだ見えません。

妻は嬰兒に添乳をしながら、靑い蚊帳の中で眠つてゐました。シンを細目にしたランプが、取り散らした書齋の机の上に寂しく光つてゐました。

「ポチが居ないね、何うしたんだらう」と、私は、宛も寢返りをしたらしい妻に向つて云ひました。「フー

ン、フーン』と鼻を鳴らしたのは嬰兒でせう。茶の室の四疊へ入つて、火鉢の鐵瓶に手をあてゝ見ますと、もう冷くなつてゐました。書齋のランプが次の室の蚊帳を透して、さまざまの古びた道具をボンヤリと映し出しました。

青い蚊帳の中の寢穢ない光景に、私は眼をそむけました。

書齋に入つて、ランプの光を脊にしますと、蚊帳は只青く映つて、中の光景は見えません。

『ポチは何うしたらう、居ないね』と、私は稍大きな聲を出しました。

『ポチ……ポチ……ですか』と妻の魘されるやうな聲が聞えました。

『ポチはね、噛まれましたよ……△△の犬に……血だらけになつて歸つて來ましたので、氣味がわるいから打棄らかしときました……緣の下にゐるでせう』と、夢路を辿るやうな聲が續いて聞えました。

私は直ぐにランプを手にして庭に下りました。蜘蛛の巣の多い緣の下には、狛犬のやうな形をしてポチが二つの眼を光らせてゐました。『ポチ、ポチ』と呼んでやると、力なく尻尾を振つてゐますが、出ては來ません。手を差し伸べて引き出しますと、『クン、クン』と悲しさうな聲をして引き摺られて出ました。首筋から、脊中から、足から、浴びたやうに黑ずんだ血が附いて、厭やな臭ひが鼻を襲ひました。頭にも、足にも、深く噛み裂かれた傷がありました。足の傷が殊に重くて歩けないのです。何處で噛まれたのか知らんが、よく家まで逃げて歸つて來たものだと私は思ひながら、バケツに水を汲んで嬰兒のお

繃帶で血を拭いてやりました。

『お繃帶を無駄にしちやア困りますね』と、妻は蚊帳の中から寢ぼけ聲を出しました。

石炭酸で傷を洗ひかけましたが、痛がつて啼きますので、中止して、私はまた書齋に入り、この邊に獸醫は何處だらうかなんぞと考へながら、暫く机に凭れてゐました。

この夜、私の寢たのは二時頃でしたらうか。蚊帳の中は妻と子との寢息が臭くて、蒸されるやうな氣がしました。

朝は何時にない早起きをしました。戸を明けて先づ縁の下を覗くと、ポチは尻尾を振り振り、這つて出ました。一晩の中にダイブ元氣が出て。跛足を引きながら少しは歩けるやうになつたのです。昨夜は赤かつた傷も黑ずんで薄皮が出來てゐました。それを私は、まだ床の中に横たはつてゐた妻にいそいそとして告げますと、彼女は、

『犬の怪我なんか、直ぐ癒りますよ』と五月蠅さうに云ひました。

私は、妻に對する遠慮から、ポチを何處かの獸醫の許へ連れて行くと云ふことがツイ云ひ出しにく、て、二三日を送りました。其の間にポチは殆んど全快しました。

『岩崎の飼犬は一ヶ月に五十圓からのものを喰べるさうだと云ふやうなことを、私は妻に語りました。

一週間ほど經つた雨の日のことでした。平常から濕ける私の家は、疊も壁も濡れてゐるやうで氣味が

暴るく、私は縁側へ出て、瘦せて伸びたまだ花の無いコスモスに雨のかゝるのを眺めてゐますと、何處て遊んで來たか、ポチは長い毛をヅブ濡れにして、寒さうに慄へながら、實の多い枯れかゝつた朝顏の絡み付いた竹垣を潜つて歸つて來ました。さうして私の姿を見ても毎ものやうに喜ぶ風はなく、直ぐ縁の下へ入りましたので、俯いて覗いて見ますと、寢床と定められた麥酒の空箱の中に、藁屑とゝもに丸まつてゐました。鼻緒の切れた下駄、口の缺けた土瓶などが其の傍に轉がつて、ジメジメとした土には、ところどころに白い黴の紋が大きく浮き出し、土龍の通ひ路が長い横筋を引いて、水氣の浸み込んだ根太板には蛞蝓の痕が縱横に光つてゐました。私は不圖、これ等のものとゝもにポチもあのまゝ腐つて行くのではあるまいかと思ひました。

外套に雨を載せて、巡査が裏木戸から入つて來ました。

私の家へは時々クロポトキンを無二の親友とする日本人が探偵に尾行されながら遊びに來ます。この日本人がクロから來た最近の書信を私に見せたり、クロ（私たちは、あのアナルシズムの老人を斯う略稱してゐます）の新しい著書を私に贈つたり、日本にわからず屋の多いこと――保守黨の老人のわからないのは當然として、自由思想を抱くと稱する若い人達が、無意氣な俗習に捕はれて案外わからないことを云ふので愛想が盡きる――と云ふやうなことを、例の沈痛悲壯な調子で語つて、冷靜に冷靜にと勉めてゐる私の頭を亂し、

「此方でわからず屋だと決めてゐる老人の中にも隨分わかつた男がゐるのだ。彼等は只自己の捷ける廣

い領域が、新しい人によつて追々に削られて行くやうに感ずるところから强者の不安！即ち彼等の態度となるのだ』などと、尤もらしいことを口から出まかせに云つて、浴せかけられたる議論の下から遁れた翌日は、乾度私の家へ巡査が來て、『あの男が何をしに來ましたか』と聞きます。

私の家へ巡査が來るのはこの場合か、それで無ければ、ポチに口輪を嵌めろとか、首輪を警察署へ差出して番號を付けて貰へとか、鎖で繋いでおけとか云ふ時です。私はよくクロポトキンの親友に向つて、『君と犬は警察が八釜しいので、五月蠅くていかん』と云ひますと、彼れは『さうだ僕も口輪を箝められとるからな、僕の云つたり書いたりすることは直ぐ止められる。僕も今にまた鎖で繋がれるだらう。』と苦笑したことがありました。

けれども、この日巡査の來たのは、クロポトキンの友人の爲めてはなくて、ポチに關する用てした。

巡査は外套の頭巾を脫いて、銅のやうな色をした顔に、朝鮮風の八字髯の生へたのを現はし、『何うもよく降りますな、宛て梅雨ぢやありませんか。實に困つて仕舞ひます……全體この邊は濕けて不健康地てすな。今も、この裏の長屋に腸チブスがあつたので出かけるところてす。實に弱りますな』と云つて敷島の袋をポケットから攫み出しました。て、私が燐寸を取つて出しますと、氣輕に會釋して、緣先きに立ちながら煙を吸ひましたが、其の煙を吐き出した中から、『時に……』と口を開いて、『……お宅の犬てすな、この間△△さんの犬に咬まれましたらう。あの△△さんの犬が狂犬になつて死にましたから、お宅の犬も十中の八九は病氣が傳染しとるだらうと思ふのです……』と云ふ前置の

下に、狂犬は行き逢つても傳染するぐらゐてすから、咬まれちや無論駄目てせう。醫者の說に據ると潛伏期は大抵三十日以內て多くは咬まれた傷の癒りかゝつた頃に出るやうてすから、嚴重に鎖で繫いて外へ出ないやうにした上、家の人も成るべく傍へ寄らないて下さい」と云ふ意味を長々しく述べ、狂犬の特徵なぞをも委しく話して、『失敬』と擧手の禮をすると直ぐ、『廻はれ右へ』と云つた樣に身體をグルリと向け變へて、濛々とした雨氣の中へスタスタと步み去りました。

泥田のやうになつた庭先きに、大きく殘つた長靴の痕を見詰めながら、私はポチのことをさまざまに思ひ煩ひました。

『狂犬なんぞになつちや厭やてすね、今の中に犬殺しにても與つたらいゝてせう』と壓へ付けるやうな物の云ひ方をして、妻は嬰兒を抱きながら緣側に出て來ました。

『そんな殘酷なことも出來んぢやないか、可哀さうに』

『犬にだけは大層情が厚いんてすね……』

こんなことを云ひ合つてゐる中に、私は幾度か緣の下を覗き込みました。

日が暮れると、每も靜かな垣根の外が妙にざわざわして、擔架を吊るして步くらしい二三人の姿が、寂しい提燈の光に照らされながら、雨の闇に消へて行きました。其の中には巡査の靴音が混つてゐました。『腸チブスの子が避病院へ送られるのだなア』と云つて、私は妻と顏を見合はせました。

其の翌日は、私よりも先きに妻が起きました。私は、今日もまた夜が明けたか、面倒なことだなアと、

毎も思ふやうなことを夢の如くに考へながら、半ば覺め半ば眠つた身體を床の中に横たへてゐますと、音樂のやうに耳へ響いてゐた、飯の仕度をする臺所の物音が途切れて、
「あなた、ポチが變てすよ」と叫んだ妻の聲が私を驚かし、半ば夢の私を全く覺めた私に導きました。
起きて見ますと、ポチは全で別の犬かと思はるゝ程に相貌が變つて、奥様、あなたに似てゐました愛らしい顔付は消へ失せ、山犬と云ふのはこんなものであらうかと思はるゝ恐ろし氣な姿になつて、舌を吐き尾を垂れ、よろよろと歩きながら、植木の根などに咬み付いてゐました。私は昨日の巡査の云つた言葉に合はせて、いよいよ狂犬になつたのだなと思ひました。
「早く鎖で繋いだらいゝでせう」と、妻は顔の色を變へてゐました。私は臺所の皿に殘つてゐた牛肉の一片を摘んで、「ポチ、ポチ、ポチ」と呼びますと、氣の狂つた彼れも私の聲と顔とはまだ忘れなかつたものと見えて、太儀さうにしながらも、私へ近く寄つて來ました。妻は座敷へ逃げ込んで隔ての障子を締めました。

私は彼れを庭先きに連れ込んで、彼れの寝床の前で牛肉を投げてやりますと、彼れは喜んだ風でそれを口に入れやうとしましたが、腮の筋が弛んだのか、肉が舌へ載りませんでした。けれども彼れは如何にもしてそれを喰べねばならぬと云つたやうに、焦慮りに焦慮つてゐましたので、其の間に私は鎖を取り出して、其の茄子環を手早く彼れの首輪に引ッ掛けました。鎖に繋がれた彼は、やがて肉を喰うことを斷念して、ガサゴソと寝床の中に這ひ込みました。

刻一刻にポチの容體は惡くなりました。苦痛の爲めに寢床を出たり入つたり、繋がれた柱の根元を廻はつて、鎖を卷きつけては身動きも出來ぬやうになつて倒れてゐますので、私は幾度か危險を冒して柱に卷きついた鎖を元のやうに直してやりました。妻は鎖の音のする度に裁縫の手を止めて、厭やな厭やな顏をしました。

「鎖を切つて逃げたら何うしませうと」彼女は云つて慄へました。

「馬鹿な、あんなに弱つてゐるのに、何うして鎖が切れるもんか。肉を喰う力だつてありやしない」と云つて私は妻の臆病を笑ひました、

其の中にポチは最う動く力も無くなつて、這ひ出した寢床へも戻ることが出來ず、縁の下の奧深く横樣に脊中を見せて倒れ、ビクリビクリと、美しい長い毛の身體を慄はしてゐました。口からは白い牙を露き出し、舌を横に曲げて長くベロリとさしてゐました。

この狀が二三日續きました。私は毎日一時間おきぐらゐに縁の下を覗きました。餘り度々頭を低く垂れるので、腦が痛んで來ました。ポチの身體は矢張りビクリビクリと慄へてゐます。銀蠅が集つて來て眼や鼻やにとまりました。紫色をした舌には最う蛆が動いてゐます。茶柄杓に長い竹を付けたのを突き出して口に水を注いでやりますと、飮まうとする氣色だけは見えました。

「末期の水ですね」なぞと、妻は縁側に立つて冷かに私のすることを見てゐました。

私は、こんな狀になつてまだ死に得ないポチを憐れに思ひました。さうして生物の命と云ふものが決

して脆いものでは無く、最後の一呼吸まで、生きやう、生きやうと努める反抗を淺間しいと考へました。

私は、二三ヶ月前に大學病院の小兒科十一號室の窓に沿ふた寢臺の上で、一週間ほど苦しみ拔いて、蟲の呼吸で二三日を過して、漸くに死ぬるを得た親類の子供のことを思ひ浮べました。長い廊下を歩きながら『もう死んだらう』と獨りで決めて病室に入つて見ると、まだ生きてゐる。歸る時にまた廊下を歩きながら、『あの小ひさい瘦せ切つた身體に息の通つてゐるのを最う二度とは見られまい』と思つて、翌る日また來て見ると、まだ生きてゐる。私はほとほと、幼い、小ひさい、弱いものが、天地、宇宙、自然を敵として戰ふ力の强いのに呆れたことがあります。

死にさうで死なぬ、ポチの淺間しい姿を眺めて、私はまたこの感じを繰り返へしました。さうして、長い柄杓を持つた私の手——肉の色——をつくづくと見て、この肉に息も血も通はなくなつて、腐つて行くまでには、まだ長い戰を戰はねばなるまいと思ふと、情ない感じがむら〳〵と起つて來ました。

私は眼を轉じて、またポチの淺間しい姿を見ました。矢張りピクリ、ピクリと慄へてゐました。

巡査の來たのは水曜日で、其の次の水曜日の朝、私はピクリ、ピクリと慄へてゐるポチの病體を一寸覗いた上、三四時間ほど外出をして歸つて來ますと、妻は例の冷かな言葉で、ポチの息の全く絕えたことを告げました。椽の下を覗くと、死體には、梅干を乾した痕の赤く染つた薦が被ふてありました。

奧樣。私の愛犬ポチは斯うして死にました。私はあなたと同じく戌の歲で、子供の時から犬を愛しま

したが、犬を飼ふことは好みませんでした。それは十歳ぐらゐの時に父の飼つてゐたクロと云ふ黒い犬が死んで、人間の友達と云ふもの丶一人も無かつた臆病もの丶泣蟲の私が只一つの交情のよいものに別れた悲みがそれから二十餘年後の今にまだありありと頭の中に殘つてゐますので、大方は私よりも先きに死ぬべき生命をもつた犬を飼つて、クロに別れた悲みを再びするに堪へなかつたのです。

ポチは私の前に住んでゐた家の近所から貰つたのです。

昨年の春でした。私たちが前の家から今の家へ引き越す支度をして、最う荷車も家の前へ横付けになつた時、妻は道具のゴチャ〳〵と取り亂された間から、姉さん被りに手拭を頂いた頭を出して、

『あなた、今度の家は寂しいから、警戒に犬を貰つてくことにしましたよ』と云ふのです。一生犬を飼ふまいと決めてゐた私は、ハッと思ひましたが、

『何處から貰うんだ。やくざ犬なんか厭やだね』と、引き越しを機會に本箱の整理をしてゐた手を止めて問ひますと、

『其處の魚屋さんから貰うんです』

『魚屋……魚屋なんかありやしないぢやないか……あゝあの汚ない長屋か、干乾びた鮭の切身が三つほど並んでる……』

『聞えますよ』と妻は制して、『あの魚屋が去年麻布の華族とかの邸で生れた犬の兒を貰つて來たのです。何うせ十分に食物なんか與らないので、あの隣りの犬好きのお妻さんが飼つてるやうなものですが、お

妻さんの家にも一頭ゐるし、とうとう犬を養うことも出來んから、寧そ可愛がつて呉れる家へ上げた方が好からうと、お妻さんが魚屋に勸めて、家へ呉れることになつたのです」と妻は小聲で云つて、犬好きのお妻さんが亭主よりも犬を大事にして、亭主が工場から歸つて來ても、犬の蚤をとるのに夢中になつて膳拵へを忘れることや、お妻さん夫婦が犬のことでよく喧嘩をすることや、お妻さんに飼はれる犬は不思議に長生をしないで、坂上の尼寺にはお妻さんの飼つた犬の墓が並んでることやを、ごたごたと話しました。

新しい家へ荷物を運び終つて、人足が椽側に腰をかけて煙草を吸つてゐる時、妻は赤い紐で繋いだ犬を引いて、片手にランプを持ちながら、一番後れて新居の人になりました。この犬がポチでした。傍へ寄つて見ますと、成る程貧しい魚屋風情には身分不相應の犬でした。犬好きのお妻さんは、赤い紐で繋がれて行く犬を見送りながら、『ポチもこれから幸福だ』と云つて、娘が貴族に嫁入りでもするやうに喜んださうです。

私の妻は、この犬が私の精神を動搖させるほどの力あるものにならうとは、元より思つてゐなかつたのです。其の後私がポチのことで肝癪を起す度に、『こんなことゝ知つたら、犬なんぞ貰うのぢやなかつた』と溢し切つてゐました。

私は初め『ポチ』と云ふ小學讀本にあるやうな名が厭やでした。それで『ルミ』だとか、『ジャック』だとか、いろいろに呼んで見ましたが、其の時最う兒犬ではなかつた。ポチは、他の名を呼んでも耳を動

かさず、頭に染み込んだ「ポチ」の發音でなければ尻尾を振りませんでした。

ポチはなかなか私たちに馴染みませんでした。牛肉を喰べさせながら連れて來た私の妻には先づ親しみましたが、引き越しの日の夕方、繋がれた赤い紐を咬み切つて魚屋の家へ逃げ歸つたのを初めに、毎日一二度づゝは必ず魚屋か其の隣りの犬好きのお妻さんかに送られて來ました。『ほんとにこんないゝお家から、何うしてあんな汚ない家に歸りたがるんだい。これからは最う此家がお前の家だから歸るんぢやないよ』と、お妻さんが子供を叱るやうに云つて歸つた跡を慕ふて直ぐに隨いて行かうとしました。

毎日食物を與るので、遂には私にもダイブ馴染んで來て、私が外から歸つた時など、飛び付いて喜びましたが、若し魚屋かお妻さんかの姿が見えると、直ぐに私を棄てゝ、私に對するよりも倍以上の喜びやうを現はしますので、私は其の度に一種の嫉妬心と云つたやうな不快を覺えました。

けれどもタイムの力は强いものでした。半年とは經たん中に、ポチはスッカリ私の家に落ち付いて、舊主人と舊恩人との家へは毎日一寸行くだけで、前のやうに送つて來て貰うことはなく、直ぐ獨りで歸つて來るやうになりました。魚屋はポチの縁で私の家へも出入りするやうになつて、私たちは味のわるい鹽魚や乾魚や、時によると半ば腐つた生魚を口にせねばならぬやうになりました。

ポチを連れて散歩に出るのが、私の樂みの一つでした。或る日散歩の序にポチの舊主人と舊恩人との長屋の前を通りますと、お妻さんは窓の側で解き物をしてゐましたが、眼早くポチを見て、

「おや、來たか、來たか」と云ひつゝ、膝の上の物を棄てゝ立ち上り、折柄工場を休んで日向ぼッこを

しでゐた夫を呼んで、
「お前さんポチが來たよ。何か與るものはなかつたか戸棚を見ておくれ」と腮で差圖しますと、夫は默つて立ち上つて、戸棚をがさごそ探してゐる樣子でしたが、やがて目差しの鰯を一尾持つて來ました。お妻さんはポチを抱き上げ抱き下し、頰摺りして、
「お前ちッとも來なかつたね。何うしたかと思つて母ちやん心配してたよ。眞個によく來たね……眞個によく來たね……これからね、また旦那に暇を貰つてね、一寸でもいゝから毎日來るんだよ、いゝか、解つたか」と氣狂ひのやうに云つて、側に立つてる私には眼も呉れずに夢中の狀でゐましたが、夫の持つて來た目差しの鰯を見ると、犬に對するとは全く別の邪險さうな眼を剝いて、
「そんなものをお前、ポチが喰べるかい……魚屋さんにゐた時とは違ふよ……氣が利かないね」と怒鳴りました。夫はお妻さんとは二十も齡の違つてゐさうな五十を過ぎたらしい老爺でしたが、白晝、他人のゐる前で夫婦喧嘩も出來ないと思つたか、私の顏を見て苦笑しながら、火鉢の抽斗から瓦煎餅を持つて來てポチに與りました。私はこの人の狀が氣の毒になつて、
「今日は工場を休んだのですか」とお世辭のつもりで聞きますと、彼れは人の好さゝうな顏に笑を浮べて、
「今朝、此女が癪を起したもんですから、愚圖々々してる中に休んで仕舞ひました……何ね、子供が無いもんですから犬を子のやうにしましてね。それに此ごろ居りました犬が二三日前にまた死んだもの

ですから、代りを貰うまで、其處いらの野良犬の良さゝうな奴を呼んでは飯を與つてるんですが、何うも野良犬ではね……蟲が納らんものと見えましてね……』と低い聲で云ひました。お妻さんはそんなことに頓着なく、抱いたり撫でたり、頬摺りしたり、心ゆくまでにポチをあやしてゐましたが、場末の町でも往來は相應にあるので、小僧や物賣や、四五人は立ち止まつて、笑ひながらお妻さんとポチとの狀を見てゐました。

『今日は旦那のお供だからゆッくりしてゐられないね。明日でもまた來るんだよ』と泣くやうな聲で云つて、お妻さんは漸くポチを放ちました。

引き越しをした年の冬――去年の十二月です――私の家へ下女が來ました。齡は十六で恰好さうな顏をしてゐましたが、一日に二度、犬に飯を與るのを忘れては私に叱られてゐました。

『下女なんぞより犬の方が上だから、主人に御飯を上げると思つて、犬に飯を與るんだ』などと、私が戲談半分に云ひますと、ブツブツ怒つて、

『ポチなんか死んで仕舞うといゝ』と獨言を云つてゐましたが、私の居ないところではよくポチを擲つたさうです。それでもポチはよくこの女に馴れて、私の森の家から一丁ほどの路を、町へ味噌汁の實を買ひに出る時なぞ、女の後に隨いたり先きに立つたりして行きましたが、町には農學博士の飼つてゐる大きな日本犬が、犬の大王のやうな顏をして構へ込んでゐるので、ポチはよくこの日本犬に追ひかけら

れました。さうしてポチと一所に歩く下女をも彼の日本犬は眼の敵のやうに思つて、咬み付きさうにしましたとかて、下女とポチとが八百屋の隣りの鹽煎餅屋の坐敷へ逃げ上つたこともあつたさうです。

下女はそれから町へ使ひに出るのを厭やがつて、妻が買物を云ひつけると、膨れた顔をしますので、妻は「何の爲めに下女を雇つておくのか分らん」と溢しながら、自分に買物を調へたこともありました。

警察の犬に對する規則が面倒になつて來ましたので、首輪と口輪と鎖とを買ふ爲めに銀座へ二度、首輪へ番號を附けて貰ふ爲めに警察署へ三度も遠方を使ひに遣られて歸つた時、下女はしみじみと厭やだと云つたやうな顔をして、足を撫でながら自分の着物を入れた葛籠に凭れて考へ込んでゐましたが、其の翌日到頭暇を取つて歸つて行きました。

「あの家はいゝ家で、奥様も旦那も親切にして呉れますが、あの犬がゐるので、兎ても私には勤まりません、他のことて小言を云はれたことは無いが、犬のお蔭で幾ら叱られたか知れない」

彼女は斯う云つて、桂庵の家へ立ち寄つたさうです。それを犬好きのお妻さんが桂庵の婆から聞いて來て、「何んて分らない奴でせう」と、態々私の家へ告げに來ました。

奥様。私の愛犬ポチは死にました。

私はこれまで自分の死に就いて考へたことは度々あります。早く死にたい、死んて、タイして面白くもない世の中から遁れたいと思つたことも一度や二度てはありません。けれども只そんなことを思つて

みるだけて、鐵道線路に伏して汽車を待つたり、淵の畔に立つて小石を袂に入れたり、兵兒帶を解いて梁を見上げたりする程に決心の運んだことはありません。徒に『早く死にたい』なぞと誇張した感情を浮べるに止つて、イザとなると生存慾に妨げられて命の惜しくなることは十分に見え透いてゐました。

私は、生存慾と云ふものをば、私の固有のものでは無くて、生れると同時に他からクッ付けられた無形の手綱のやうなものだと思つたことがあります。何者にか一生をこの手綱に繰られて、方々へ引き廻はされ、こづき廻はされるのだと思ふと、臨終の一秒時前までもまだ私を確乎と繋いでゐさうな手綱を今の中に振り切つて、生きやう、生きやうとする戰場から遁れたいと考へたこともあります。

私は、私の死後に就いても考へてみたことがあります。死ねば最早自分とは關係のない肉や骨やてあるが、其の肉や骨やを土に埋めて腐らすか、火に燒いて灰にするかの場合に、坊主か神主かを呼んて來て、多くの人の前に、芝居じみた、儀式と名づくる習慣を繰り返へして貰ひたくないと思ひました。私に子があつて、それが私の葬式の時に六歳か七歳かて、其の子に紅葉のやうな手で私の棺の前に燒香をさして、子役を使ふて見物を泣かせる芝居の眞似をすることなぞ、考へるだけでもゾッとします。それから私の肉、骨或は灰を埋めた上へ、木や石やに、生きてゐる中の符牒か死んてから後の戒名と云ものかを書きつけ刻り付けて建てること、それがまた限りなく厭やだと思ひました。

死んてから後の、全て自分とは關係のない肉や骨やの始末に就いてまて、やきもきと氣を揉むのは、何と云ふ淺間しい心てあらうと、私自ら私のこの世界に對する執着の濃いのに呆れたこともあります。

私はまた私の妻や子やの死に就いても、いろいろと考へたことがあります。さうして若し妻や子やが私に先だつて死んだら、決して芝居じみた儀式と云ふものに依つて死體を始末するやうなことはなく、これを機會として些か世間並の習慣を打ち破らうなぞと、詰まらない反抗心を藏したこともありました。

こんなに、私自身の死に就いて考へ、妻や子やの死に就いても覺悟を怠らなかつた私が、犬の死に就いては何の用意もありませんでした。犬の死骸を何う始末しやうかと、私は差し當りそれに當惑しました。

「庭の隅へ埋めて遣らうか」と私が云ひますと、妻は「汚ないから厭やですよ」と云つて近所の寺へ頼みに行きました。私は其の間にポチの死骸を椽の下から引き出し、肉の腐る惡臭を忍びながら、固く四肢の突ッ張つてゐるのを、被ふてあつた薦に包み、其の上をまた白金巾で卷いて、黒いリボンの蝶形に結んだのを頭に當るところに付けました。

寺からの返事は、住職も留守だし、墓地も狹いからよくは分らんが、犬一頭ぐらいなら何うにかならんこともあるまいとのことでした。三四時間經つてから妻がまた行つて見ますと、住職はまだ歸らんが大抵よからうと思ふから、明日の朝持つて來て呉れと寺男が云つたさうでした。

翌日は朝早く私が寺へ行つて見ました。廣い、汚ない荒れた玄關に立つて二三度「お頼み申します」を繰り返へしましたが、返事がありませんでしたので、石塔の古いのを集めて敷石にした上を歩いて庫裡に廻はりますと、黒塗り腰高の古障子の散々にやぶれた傍で、寺男らしいのが剪刀で足の爪を切つてゐる

ましたから、「昨日頼みに來た犬だが、これから連れて來てもいゝか」と問ひますと、彼れは爪を切る手を止めて、よく光る眼で私を見上げ見下ろした後、

「ねえ旦那、犬は引き受けてもようごしたな」と濁つた聲で流し元の方に向つて叫びました。流し元にはまだ若さうな坊主が、圓く蹲踞まつて物を洗つてゐましたが、

「籔の中へ埋めてやれ、筍の肥料にならア」とぞんざいに云つて、一寸此方を振り向いたきり、またガチャガチャとやつてゐました。私は餘りに冷遇されたのを心の中で憤りながら、他の寺へ頼んで見やうと思つて歸つて來ました。

家へは犬好きのお妻さんが來て、白金巾で包んだポチの死骸を抱き上げて泣いてゐましたが、私を見ると、

「旦那、あんな寺は駄目ですよ。私のお寺になさい。この坂上で少し遠くなりますが、庵主さんがそれはそれは親切にして呉れますよ。何なら私が頼んであげませう」と急き込んで云ひました。私は今受けて來た冷遇をお妻さんに話して、彼女の同情を得たのを喜びつゝ、直ぐに教へられた坂上の寺に急ぎました。

其の寺は掃除も手入れも能く行き届いてゐる小ぢんまりとした尼寺でした。住持の尼さんは閑雅な姿をして、氣高く老ひた顔に上品な微笑を浮べながら、私の云ふことを聴いた上、

「幾ら畜生でも籔の中はいけませんね。私の方も狹いんですが。何處かあるでせう、見てあげます」と、

低く透る聲で云つて、私を裏の墓場に連れて行きました。見晴らしの好い高臺で、松や杉やの茂つた間から、私の住むあたりの家々が朝晴れに光つて見えました。墓地へ通ふ徑の左右には、後れ咲きの貧しい花を着けた萩が芝の上に垂れ伏してゐました。萩の徑を廻はると、苔の滑かな幾坪かの平地が現はれて、其處にある古い或は新しい多くの石碑が、ごちやごちやとして私の眼に映りました。白張の提燈の底の拔けたのも見えました。

尼さんは方々を見廻はつた後、朽ちたのや新しいのや、幾本かの木標の一列に並んだ一隅を指さして「これは皆犬です。この坂下の犬好きのお内儀が施主なんですが、私が餘り犬を引き受けるものですから、本山で笑はれます」と物靜かに語つて、「あなたのは何處にしませうね」と、暫く考へた末、「彼處は何うでせう」と、苔の生へた可なり大きな石塔の二つ並んだ間の、三尺四方ほどの土地を選んで呉れました。

「この寺は尼さん一人で、寺男も居ませんでしたので、私は尼さんから鍬を借りて墓穴を掘りました。慣れない勞作には早く疲れて、二尺ほども黑い土を掘り下げた時は身體がヘトヘトになりました。庵室の前には百日紅の花が鮮かに咲いて、其の下に筧の水が細く流れ落ちてゐましたので、其の水で手を洗つて、私は勞作を止めました。

「餘り淺いと他の犬が來て掘り起します」と尼さんは庵室の緣側から云ひました。

若干の會向料を紙に包んで尼さんに上げて置いて、私は先づ家に歸りました。犬好きのお妻さんは、

まだポチの死骸を抱いたり下したりしてゐましたが、私を迎へて、
「彼寺ならいゝてせう。もう穴は堀れましたか……ぢやア行きませう。私が抱いて行つて上げます」
と云つて、裏木戸を出やうとしましたが、『今日は此處からではいけないね』と獨言を云ひながら、表門の方に廻はりました。人間の爲めにする儀式と云ふものを嫌つてゐた私は、犬の爲めに羽織を紋付に着更へて出ました。私の妻は嬰兒を抱いて門の外まで見送りました。私は、死んだ犬を抱いた女と、生きた嬰兒を抱いた女とに狹まれて足を運びながら、『もッと會葬して呉れるものがあるといゝな』と思ひました。

尼寺では庵主さんが正服を着けて待つてゐました。新しい穴の中へ死骸を入れた時、お妻さんは『今度はもッと強く生れて來て敵を取つてやれよ』と涙ぐんで告別しました。私もホロリとして、白金巾の包みを見ながら、鍬を執つて黒い土を其の上に被せました。
『木標が出來るまで、何か石を載せて置きなさい。彼處のは皆無緣ですから、何れでもいゝのを持つてお出てなさい』と、尼さんは遙か後の方に倒れてゐる多くの墓石を指さしましたので、私は動もすると滑りさうな青苔の上を歩いて、表に『何々信女』裏に『文化何年』と刻り付けてあつた小ひさな長方形の石を運んで來て、盛り上げた土の上に載せました。線香の煙が薄くあがつて、青い樒の枝が新しい花筒に立てられた時、尼さんは寐言のやうなお經を低くい聲で唱へ出しました。私とお妻さんとは新墓の左右に畏まつて、有り難くそれを聽いて居りました。『……如是畜生頓生菩提……』と結んで讀經が濟

ひと、お妻さんは閼伽桶の水を新墓に注ぎ、其の餘りを自分の犬の數多の墓にも手向けて、『皆んなで交情よくして遊ぶんだよ。今日からポチが來たから仲間に入れておやり』と、繰り返へし繰り返へして云ひました。

『お前さんは、年中犬で苦勞するんだね』と、云つて尼さんは笑ひました。

初七日には、お妻さんが墓詣りに誘ひましたので、二人はまた尼寺に出かけました。尼さんは二人を庵室に通して茶などをもてなしながら、『仕合はせな犬でございます』と云ひました。

私たちは歸りに魚屋へ寄つて、ポチの舊主人に尼さんの言葉を傳へますと、鮭の切肉を作つてゐた彼れは『ハヽヽヽ』と笑つて、

『坊さんに譽められるやうになつちやア、駄目でさア』と云ひました。

(完)



留節

薄田泣菫

秋になつてまた一頻り黒死病が流行り出して來た。其邊の交番といふ交番では。鼠の値上が貼出されて、慾に目のない輩は途の通りがゝりに密と其の前に立ち停つて、幾度か右揚りの嚴べらしい文字を讀みかへしてゐる。

恰どその頃の事で——小家の立續いた場末の街を通りかゝると、靑錆の浮いた泥だらけの石油の空鑵に荒繩を括しつけたのを肩に引掛けて、端の曲つた針金に竹の柄をはめた四尺許りの鉤竿を持つた薄汚い男が、狹苦しい横町の露路からひよつくりと飛び出して來るのによく出會したものだ。男は

何だか落し物でもしたやうな顏付で、其邊の溝板を抉じ開けて、泥臭い腐れ水の厭に噎せかへるやうななかに屈まつて、附近の流し元から通ふ水捌の模樣から、溝の落ち工合をじろ〳〵と覗き込むでゐる。――これは鼠捕りの男で、肩にかけた空罐のなかには。小形な板に螺旋を捲きつけた捕鼠器だの、餌入れだの、鼠の死骸だのが混雜と投げ込まれてゐる。

て、恁うして惡戯者の居さうな土地を發見すと、その捕鼠器の一つに小つぽけな餅の破片を引掛けて、鉤竿の端末で其邊の通り路らしいところに仕掛けておいて、またもとのやうに密と溝板を下してしまふ。で、次から次へと十個所も仕掛けてしまふと、また後歸りをして順繰にこつそり樣子を見廻にやつて來る。すると中にはからきし鼠が附かないとか、または巧く餌計りを仕てやられたとかいふのもあるが、その幾つかはちよつぴり餌の端を嚙られたゞけで、鼠は首根つこを酷く針線で壓へつけられたまゝ、ぐたりとなつて死んでゐる。それを悉皆拾ひあげてしまふと、此度はまた場所を更へて、矢張同じやうに仕掛けまはつてゆく……。

留爺もその一人だ。

爺は京都といつてもずつと北はづれの、鞍馬口の藪裏に住つてゐる、俗にいふ小家者の一人だ。この小家者といふのは、御一新以前から世智辛い都市生活に敗れた社會の劣敗者が、恰ど十月の落葉が寂しい風に吹き送られて、一寸した窪地に重なり合ふやうに、この町外れの、暗い濕々した藪裏に寄つて集つて、倒れかゝつた草葺の棟割長屋に、壁一重の隣合せて住つてゐる其の日稼ぎの貧しい部落なのだ。

――貧しい部落といつたところで、京都でよく見る柳原だの、田中村だのといつたやうな特殊部落のあゝした種族とは打つて異つて、往時は二本さして大道を威張つて歩いた家柄の血統もあれば、祖父の代には中京邊で、九間間口の大店を張つてゐた、歴とした商人の跡目もあるといつた風に、氏素性では些とも引を取らない輩の集まりだけに、兎も角も以前は市民のなかに交つて、相應に生活を立てゝゐたといふ自惚もあつて、だらしのない懶惰だの、僻みだの、嫉みだのといふ氣持の他に、他の特殊部落では滅多に見られない空想のやうなものも、幾らか宛は有つて居らうといふものだ。

留爺もその例には洩れない一人だ。家はもと麩屋町の竹屋町に大きな角屋敷を構へ込むで、禁裏から公家衆一體の出入を許された名高い五倍子屋で、留爺はその一人息子であつた。乳母日傘で育て上げられた爺の心が、いつの間にか柔かい婦人の肌を思ふやうになつた頃には、世の中は地震が搖つたやうに眼の前で引繰り覆つた。根太の腐りかゝつた江戸政府は一溜りもなく倒れてしまつた。昨日までの田舍武士が時を得顏に大手を振つて取つて代つた。都が東に遷されるについて、公家といふ公家は、恰て暖い國に渡つてゆく燕のやうに惜氣もなく由緒のある家屋敷を疊むで、新しい都へ移つて往つた。恁うした時勢の移り更りにつれて、公家衆は言ふ迄もない事、下々の町方の婦人まで、鐵漿をつけるたしなみは何時の間にか捨てゝしまつたので、五倍子屋の商賣はぱつたりと止つてしまつた。さうかうする間に、兩親はほんの一寸した病患で、たつた五日許りの前後で誘ひ合つたやうに死んでしまつた。後に殘つた一人息子の留太郎は生れつきの懶惰漢で、店を小體にきりつめて、節ましく行つて往くなり、また

一思ひに時の流行に連れて、商賣更へをするなりしたら、また何にか見込みも附きさうなものを、何時までも何時までものんべんだらりと、だゞつ廣い大店を張り續けてゐたので、諸色の費は嵩む、商賣は一向目に見えぬ、それにいつの間にかよくない友達に引張られて、惡所通ひを覺えるといふ始末で、段々と家も左り前になりかゝつて來た。で、恁うなると、得て地道な取返しなどいふ事は考へないで、何でも伸るか反るかの運試しをといふので、つい馴れない相場に手出をして、さしもの家屋敷も瞬く間に他手に渡してしまつた。して、その後は緞帳役者の男衆になつてみたり、遊び人の仲間に入つたりしてゐたが、生來の懶惰漢は何處へ往つても尻が落付かないので、京都では誰も既う取り合つてくれる者がなくなつて、詮方なしに以前店に勤めてゐた者を便つて、到頭廣島まで下つて往つたといふ噂があつたが、そこをもまた食ひ詰めたものと見えて、いつの間にかひよつくり京都に歸つて來た。そしてその折は既う小家者に交つてゐた。

今朝は六時に家を出た。留爺は獨身者だ。――――尤も五六年前までは廣島から連れて歸つた、髮の毛の縮れた、凸額の、侏儒な女房と一緒にゐたが、それが同じ小家者の蝙蝠傘直しと姦き合つて、何處かへ驅落して往つてからは、お人好の爺はそれを厄介拂ひした位に絕念めて、これまで儲の薄かつた折、家へ歸る途々がみ／＼と口喧しい嚊の小言を氣遣つたやうに、恟々した氣持をせずに濟むのを結句氣樂に思つて喜んだ、一體小家者には妙な習慣があつて、一家のうちで主權を有つてゐるのは男よりも女の方

て、男は振賣をするなり、日傭取に出るなりして稼いだ金錢を持つて歸ると、其の儘そつくり女房に手渡してしまふ。女房はそのうち幾らかをこつそり臍繰らうと、晝間隣合の嚊衆に借越になつた花札の負に注ぎ込まうと、夫は自分の勝手で、早い談話が晩食を食べるにしても、女房は公然で疊の上に坐り込むでゐるのに、亭主は上り框に腰をおろして、恰て居候か何ぞのやうにこそ〳〵と濟ますといつた風で——

留爺も偶には夫婦喧嘩をした。そして薪雜棒か何かを振り擔いて、鵞鳥のやうにぎやあ〳〵我鳴りたてる嚊を追ひ廻した事もあつた。が、もともと根がだらしのないお人好だけに、儲の薄かつた折には何だか申譯がないやうで、家の閾を跨ぐにも幾らか氣負がせぬでもなかつた。一體が懶惰漢の爺の腕では、どうかすると明日が日の米代も覺束なかつたりするので、さういふ時には女房は丸で敵か何ぞのやうに口汚く貶しつけて、近所隣に爺の甲斐性なしを大聲にわめき散らすので、まだ何處かに見え坊の殘つてゐる爺は、孔へても入りたい位に思はないでもなかつた。

が、もう女房はゐなくなつた。儲の薄い日には自分獨り饑い腹を抱へてゐればそれで濟む。それに黑死病が流行り出してこのかた、爺は從來のよかよか飴を止して鼠捕りにかゝつてみたが、性來手先が小器用なので、何なりかうなり自分一人の口を糊す位の事は出來ない事もなかつた。——て、今朝も例のやうに六時に家を出て、塔の段を一周して、それから上立賣を五辻へ眞直に出て來た。

留爺がひよつくり天神の境内に入つて來たのは、彼是もう二時を過ぎてゐた。背の空鑵には鼠の死骸が五つ六つ、身體を鯱張つたまゝころ〳〵と轉がつてゐた。

爺は銜煙管て其邊を徜徉いてみた。いつだつたか宵天神の晩方、こゝの境内て一圓五十錢入の財布を拾つて、その儘それをちよろまかして、歸途には一杯機嫌て素見に往つた記憶があるので、いつも此處へ來ると爺は若しやと思つて、境内の樹蔭といふ樹蔭の成るべく人目に立たない處を拾歩きをしてみる事にしてゐる。て、今日も野良狗のやうな眼つきをして、一頻りうそ〳〵其邊を嗅ぎまはつてみた。

爺は約束したものが手に入らなかつたやうに、失望した氣味て繪馬堂の横手へ出て來た。少し日蔭になつた溝側の空地に、小ぼけな玩具の大道見世を擴げて、色のさめた紺飛白を着た六十許りの爺が店番をしてゐる。ぽか〳〵と生暖い秋末の溫氣に、怠けきつたらしい體軀を繪馬堂の柱に凭せかけて、こくりこくりとお辭儀をするやうに居眠をしてゐる。留爺は頰窩の大きな赤痣て、すぐに同じ小家者の松爺だなと思つた。

　松爺はもと加茂の社家て、性來鼻柱が强いのに、可成文字もあるので、仲間ては相當に幅の利ける男だつた。それが一頃萬年靑が非常な勢て流行り出した折、一寸手出をしてみると巧く當つて可成儲かつた事があつた。それに圖に乘つて、性の惡い黑人のいふがまゝつい手を擴げ出してみると、流行は直ぐ火の消えたやうにぱつたり落ちてしまつたので、祖先から持傳へた家屋敷は、根こそぎ他手に渡す事になつて、爺は裸一貫てその日暮しの仲間のなかに、投り出されてしまつた。

松爺は其後知人に顏を合はすのが愁いといつて、何處へ身を隱して了つた。て、十幾年かの間何處を何う彷徨いてゐたものか誰一人知つた者がない。何でも但馬の生野邊で山働きをしてゐたらしい、言語つきに幾らか彼邊の訛が殘つてゐるといふものがあるかと思ふと、いや伊賀の上野邊でいかさまな世間師の仲間に入つてゐたらしい、伊勢參宮の道中でちらと見かけた横顏が、どうやら夫らしかつたといふものがあるといつたやうな工合で、一向取とめた噂はなかつた。爺もまた其頃の事は誰にも隱し立をして、成るべく噯にも出さないやうにしてゐた。て、そぼろな形裝で小家者の仲間に入つて來た折には、持前の利かぬ氣は悉皆磨り減らされて、體軀も何やら惡性の病にでも取憑かれてゐるらしく、何處で覺え込んだものか、智慧輪だとか何だとか粗雜な玩具を引擔いて、大道見世を張りにゆくのも、何となく腰つきが危つかしいやうてあつた。

留爺は默つて後方に衝立つた。襟垢の黑光に光つた松爺の着物から、汗臭い臭氣がむつとするやうに鼻をついた。

「おい松やんたら。」

松爺はひよつくり顏を擡げた。そして寢惚けた眼を擦り擦り、一わたり其邊を見まはした。お參詣の歸途らしい品のよい中京邊の隱居さんが雪駄を鳴らして前を通りすぎて往つた。爺はぶつぶつ呟きながら、兩手をぬつとさしあげて大きな欠伸をした。そして退儀さうに尻側に轉がつてゐた唐人笛をとりあげて一頻り高く吹き鳴らした。

留爺は氣輕さうににや〳〵笑つて、悪戯兒のするやうに煙管の雁首て、後方から肩を衝いてみた。すると松爺は吃驚して後方を振りかへつてみた。

『留かいな、誰やと思ふたら……如何や、些少あ居よつたかいな、鼠め。』

留爺はそれに答へやうともしないで、肩から石油の空鑵を脫すなり、にこにこもので松爺のすぐ横手へ來てぺたりと腰を下した。

『どうや、儲かるかいな、お前も。』

『あかへんな。今朝から恁うやつてまだ十錢がとこ賣れへんものな。』

『え、十錢がとこ……そら、あかんな。其麽なこつちや、お前一人口が難かしいやないかいな。』

『然うやとも、然うやとも。恁うなつちや何にも旣うあかへんわい……。』

と、松爺は投げ出すやうに言つて、懐中から壓し潰したやうな鉈豆煙管を取出した。思ひやりの宜い留爺は默つて廉烟草の入つた叺を手渡した。松爺は美味さうに一服吸ひつけて、すぱり〳〵と立續けに胸の奥まで煙を呑み込むだらしかつた。

『あゝ、好い氣持や、朝から煙草初めてやさかいな。……留や、私先日から這麽な事思うてるのや、私らが壽命も旣うそないに長うもあろまい、町の小供衆寄つて集つて、此方人等が首縊めよるよつてな……』『え、首縊めよる……飛んでもない、何言ふのかいな、お前。』

留爺は吃驚して、相手の顔を見つめた。松爺はわざと落着いたやうに、へんもない顔付て、火の消え

かゝつた煙管をじつと銜へ込むだまゝてゐる。

「私ら這麼な家業しとるよつて、可成世の中氣いつけとるが、この三四年以來子供衆の好みの變りやうといふたら、恰て眼が眩りさうやて。私ら子供の時分よく持ち遊びよつた「居狂」やとか「ぶりぶり」やとか、那麼もの此頃では皆無うなりよつて、鐵葉やら轆轤細工の渡り物許りが出來よるんや。汽車やとか、自轉車やとか、兵隊さんやとかな。――ほらお前記憶えとるやろ、那の御所人形な、あれやとか加茂の木目込人形やいふもの、この三四年に細工する人皆死によつて、買はうにもてんで既う町にあらへんがな。これてまだ智慧の輪や起上り小法師やいふと、割方出來不出來が無うて、私ら一人の口を糊す位なら、どうなりかうなり拵けるよつて、此方人等のやうな資本の薄い、不器用者は偲うして今日まて行つて來るには來よつたが、ても此頃のやうに子供衆がてんで見向きもせんやうなりよつたら、迚も既うあかへんな。何ても世の中段々利巧になりよつて、子供衆まで生意氣言きくさるのや。」

と松爺は齒の脱けた口元をもぐもぐさせながら偲うといつた。息洩がするのを強て含めるやうにして喋舌くるので、談話に氣合がぬけて、調子が幾らか哀つぽく聞える。

「成程な、聞いてみると其麼なもんや。私らが子供の時分といや、何時も「めんこ」遊びしたもんやが今時那麼な物どんな場末へ往つたかて、なかなか既う見つからへんな。眞に變れば變るもんや。」と留爺は感心したやうに言つた、そして自分が七つ八つの頃何ぞといつてはよく革堂さんの境内て、横町の瀬戸物屋の娘子と一緒に「めんこ」遊びした事を思ひ出した。娘は色の白い、眼のぱつちりした顔だつた。

爺はどうかして娘の氣に入らうと、偶には態と負けてみやうとした事もあつた。さういふ折に偶然自分の駒が勝ちてもすると、何だか本意ない氣持がしても腹立しかつた事を思ひ出した。

「變つたとも、變つたとも。早い談話が今時の婦人を見とうみ、子供嫌ひよつて成るべくなら不姙てゐたがるて事やろ。偶に産みよつても、やれ牛乳でござるの、乳母でござるの言ひよつて、てんで自分の手に掛ける事しよらん。その癖己は小皺の寄つた年増になつても、ぱつとした物着飾つて、しやらくらしよるのや。そやさかい子供皆孱弱で、癇が高うて、大きうなりよつても目先許り利くのやないかいな」

「ほんまによ。お前知つてはるか、那の區役所前の須川はんな。彼家の奥様たら優い容貌自慢やさうなが、蛇が大好きやさうて、如何も自分で部室に飼うてはるのや。檀那も初めの内厭や厭やいうて嫌やはつたさうなが、今ては些と感れはつたと見えて、よく蛇の皮捲いた杖ついて、暢氣さうな顔して、奥様の後から乳母車押してはるえ。婦人かて往時は温柔しかつたもんやが、今はなかなかなあ……。」

「ははは、夫がお前人間許りやないから妙や。那の萬さんな、岡崎の――うむ、那の男に聞くいふと、鳥や獸までが此頃は利巧になりよつて、なかなか手におへんさうや。鷸や鶉かて往時は滅多に逃げ隠れもしよらなんだし、偶に撃られると、素直にぺつたり其處へ倒れよつたもんやさうなが、此頃てはなかなか狡うなりよつて、獵師の足音聞きつけると、こつそり草の中へ潜り込むさうやし、正面に彈丸喰つてばつたり下へ落ちて來ても、其邊に凝としよらんて、ちよこまか飛んでもない方角へ逃げ廻るのやて、ちよつくら見付からんさうや。」

爺は恁ういつて、酸ぱいものでも嘗めたやうに、一寸口を窄めて相手の顔を見た。留はさも感心したらしく皮膚の弛むだ頸を大きくしやくつてみせた。爺はまた喋舌り出した。

「お前魚やかて然うや、私ら子供の時分よく菩薩池や加茂河へ魚釣に出掛けたもんやが、その頃は這麽な鮒や鯇の二三十、てもなう釣れたもんや。それに此頃五條や松原の橋下て釣りよるのを見とうみ、鯰一尾捕るに半日かゝつてやきもきしよるやないかいな。それも魚類が居ぬのなら何やけれど、魚類澤山ゐてそれて、利巧になりよつたから、なかなか鉤に掛りくさらんのや。」

松爺は相手が相手だけに眞正直な顔をして、凝と小首を傾げ込むでゐるのを見ると、何だか一ぱしの物識にでもなつて、一寸了解のつきかねる難かしい談話を平く説き聞かせるやうな誇を感じたらしく、腫物のした小鼻を妙にぴくぴくさせてゐる。

「成程、それて解つた事があるわい。那のお里婆な、御坊阪の──渠奴め、先日日の暮々に滿願寺裏を通りかゝると、彼處の溝側に水桶が一つ轉がつとるのやさうな。婆め、ほら那の通りの水桶盗人やろ、いきなり手を出さうとすると、水桶が蠢々這ひ出しよつて、溝の中へざんぶり陷りよつた儘、それなり皆目行場が解りよらんのや。何でも狸の故やさうな。往時は味噌摺坊主やとか何とかに化けよつたもんやが、今時は那麽な奴さへ利巧になりくさつて、物もあらうに水桶に化けよるなんてなあ…はは。」

と留爺は煙草の吸殻を、硬つぱしさうな掌面に轉々させて暢氣さうに笑つた。

「ふむ、其麽な物に化けよつたかいな。さ、その通りやろ、今に飛んでもない悪戯かいて、何程人困せ

しくさるか解つたもんやあらへん。お前あの白河の花賣な、あれ其頃甚麽な花持つとるか知つてはるかい。』

『甚麽な花て……そないな事知らんな。私ら町で生れたさかい、花と來たら梅と桃かて皆目見境がつきよらん。尤も實になつてからなら解りよるがの。』

『實になつて解らん奴があろかい、阿呆奴。ははは。お前今度花賣に出會したら、よく氣いつけて見ようみ、私ら子供の時よく見よつた男郎花やとか、龍膽やとかいふ花いつの間にやら少うなりよつて、此頃ては何たら名も解らん西洋の花が澤山々々出よるから。それも此方の種のやうにすつきりした素直のや無うて、厭あにこてこてした、ややこしい花の格好たら全てあらへんて。矢張花まて異うて來よるのかなあ。……どうや、此頃鼠捕れるかいな、些あ。』

と、松爺はしよぼしよぼした眼をあげて、何だか疑るやうに相手の顏を見た。恁うして口では喋舌りながらも、流石に熟れたもので手先はこまめに動いて、長い針線を何遍か折り曲げ折り曲げしたと思ふと次から次へと智慧輪が出來上つてゐる。

『ところが一向あかへんのや。何てやろ、鼠の種減りよつたのかと思うてたら、成程聞いてみると然うや、鼠め、利巧になりくさつたな。去年頃までは係蹄さへ掛けると、何程でも捕れたもんやが、此頃てはねつから掛りよらん。その癖餌はちよつくら誤魔化しくさつてな。矢張智慧がつくと怖しいもんやなあ。此方人等も今に何とか分別せにや、肝腎の口が干上らうも知れへんな。』

留爺は掛りかつぽのない他事でも噂するやうに、平氣な調子でいつて、たつた今つい鼻先の枯木に飛んで來た渡鳥のこましやくれた素振に見とれてゐる。口先では恁うはいふものゝ、暢氣な爺の考では、世間はどうにでも世渡が出來る位に思つてゐるのだ。

松爺は大きく頷いて、懶惰漢の息子をでも窘めるやうな口振で、

『ほんまに。鼠かて然うや、今に何とかせにや、不得要領でゐるのは此方人等許や。お前此頃の市街を見とうみ、電車は來る、自動車は來る、ほら馬車や、どつこい自轉車やいうて、氣忙しうて氣忙しうて、此方人等のやうなもの恰て眼が眩みさうて、なかなかうつかり外出が出來よらんわい。先日などお前、下手糞な自轉車乘めが暗雲に乘り掛けくさつて、お蔭で商賣道具引繰りがへされて、七錢五厘がとこ滅茶々々にされよつたわい。大道見世かて恁うやもの、今時振賣しようには、なかなかの事やあらへんて。然う思ふと往時はよかつたなあ、ほら記憶えてゐるやろ、白木綿に淺葱の腰衣着て、頭巾被た安樂さんな……。』

『うむ、安樂さん。好かつたなあ、あれ。』と留爺は前に伸り出すやうにして、『私ら何時も表へ飛び出しよつて、

「安樂さん四文のお豆にちよと惚れた。」

いひいひ、何處までも何處までも蹤いて往つたもんやな。』と何だか夢でもみるやうに心持眼を細くしてにやにや笑つてゐる。そして何日だつたか、その豆賣の安樂さんに蹤いて、浮々と壬生の附近まで往

くと、豆賣は何時の間にか混雜に紛れて見えなくなつたので、自分一人が路に取殘されて、迷兒になつておいおい泣いてゐた事を思ひ出した。

「それから、ほら藥湯賣の爺さんな、那の烏描いた提灯吊らはつて、

「烏丸本家、枇杷葉湯お上りなされ……」

いうて來よつたやろ、夏の眞晝間――」

松爺はどうやら往時の追憶に堪らぬらしく、拵へさした智慧輪を其邊へ投出したまゝ、じつと膝小節を抱へ込むでしまつた。

「はあ然うや、小娘のやうな良い聲しよつて、「……暑氣拂ひ、腹一切の妙藥。」

いうてやろ。」と留爺は八つ下りの燒けつくやうな町中を、沈着いた足取で、人の好ささうな藥湯賣の爺さんが、いつも麸屋町を南へ下つて往つた事を思ひ出した。そして暫時すると、またその後から定つたやうに禿頭の、侏儒の餅賣が戲けた身振で通つて往つた事を思ひ出した。

「それからお前知つてやすか、「こことや、こことや」の餅賣を。」

「はあ知らいてか、私ら那の賣聲聞くと、毎日のやうにお袋強請むだもんや。」と松爺は顏一杯を皺くちやにして、ほくほくもので大きく頷いた。そして龜の子のやうに首を前へ衝出して、その餅賣の賣聲を模てみせた。

「こことや／＼。こことの正體は、粳の米の寒晒し。匂は丁子胡麻や、千山椒、麻實と陳皮、罌粟と銀杏、

猫ろん鼠食べて皆々美味かろ」

な、憑うやつたやろ。ははは。」

「ははは……。」

二人は歯のぬけた口を大きく開いて。たわいもなく其處へ笑ひこけてしまつた。

暫時して二人は眼頭に滲み出した涙を、そつと拭きとりながら顔を見合はせた。そしてまた莞爾した。附近は人通も絶えてひつそりしてゐる。すぐ向側の茶店では、最前から其邊の紅葉見の歸途らしい若い男女が腰をかけて、喰べ殘りらしい重詰を啄つきながら密々と何か談し合つてゐる。そこへ偶然と皺くちやな畑の媼がやつて來た。そして例のやうに粗雜な口をきゝ出した。

「お前方こないな所に何してゐさんすのや。それ欠伸止めの菓子どうかな。」

媼は憑ういつて、胸に抱へ込むだ菓子の木箱を。ごとりと床几の端におろした。男女は見向きも仕ないらしい。媼は客さうな眼を眇のやうにして、うそうそ其の風態を見比べてゐるらしかつた。

「さあ、兄何ぞ要らんかの、お前が來るの、媼樂みに待つとつたのや。氣は心と、さあ些少でも買うとくれ。」

「よしよし、そんなら一枚。」と男は戯けた身振で。どうやら八橋を一つ撮むだらしかつた。

「この兄わいな、一枚やと仲が惡うなる、もつと勢まんかいな。」と媼は馴々しさうに言つて、床几の端

へべつたり尻を下した。そして腰にさした手縫の煙草入を取り出して、長煙管に一服吸ひつけた。『これ兄、高雄も既う五六日で見頃やさかい、一遍遊びにおいてんか、時雨が降つたら傘など貸すわいな。』

『媼め、迚もの事に泊めるといひよらんかい。ははは。そんなら傘の御禮にもう一枚。』

『これ惡戯せんと、もつと買うとくれ。好え男振しよつて其麼な眞似せんものやわいな。』

『媼はん、そないに勸めるの止いて欲しいな。澤山〳〵御馳走いただいて、お腹もう此麼のやさかいな。』

『まあまあ姐はんの言はんす事かいの。さ、もう些少でもお愛相しとくれやす。』

商賈氣質のいやに執念い畑の媼は、長煙管を銜へ込むだまま、いつかな腰を上げさうにもしないので、女は到頭根負をして、ぶつぶつ呟きながら幾らか勢むだらしかつた。

爺ら二人はまた顔を見合せた。口には出さないが、――また口に出す程明瞭した考でもないが――何だか自分達の時代が一寸勝ちてもしたやうに、幾らか胸の透いた氣持がしないでもなかつた。やがて松爺はせつせと手を動かし出した。そして瞬く間に種々な型の智慧の輪が幾つとなく其邊に轉がり出した。て暫時すると、また思ひ出したやうに唐人笛をとりあげて、一頻り高く吹き立てゝみた。聲涸のしたのを無理强に絞り出すやうな笛の音が、いいいいひゆうひゆうと震へるやうに附邊の空氣に傳はつて行くと、留爺は何だか泣きたいやうな氣持になつた。

『や、隨分と油を賣りよつた。どれ一回して來よかい。』

留爺は丁寧に煙草入を懐中に藏ひ込むで、そしてやつとこなと腰を持ちあげた。

『もう往くのかいな。』

『うむ、邪魔しようたな。ま、精出しなはれ。』

留爺は鐵葉の空鑵を肩に擔げて、とぼとぼとまた歩き出した。そして途々松爺の言つた事を思ひ出して考へてみた。爺は世の移り更りにつれて、自分達の職業口は明日が日にも無くなるかも知れないやうな事を言つた。成程鼠の上り高も毎日のやうに減つてゆくのを見ると、まるで憑據のない談とも思はれない。が、また考へ直してみると、世の中は人間の思ふ程さう切迫つまつた事ばかりではない、自分は性來這麼やくざな懶惰漢なので、親族だの、知邊だのが寄つて集つてよく意見立をして、お前も今腹を入れかへなければ、何時かは野たれ死する憂目を見るだらうと嚇しつけたものだが、自分は今日までどうにか三度の飯も食べて來た。世の中は那麼人達の思ふ程狹苦しいものではない。一體あの松爺にしても餘り引込思案に過ぎる。智慧の輪を拵へるにしてからが、もつと手易い解りの早い物にすれば可いに、厭に込入つた七面倒な物ばかり拵へるものだから、子供の氣に向かないで、自然賣脚も遠退くといふものだ。ほんに然ういへば然うだ。明日にても出會つたなら、友達がひに一つ意見立をしてやらう。兎角世の中は氣を暢びり持つに限る。――と、爺は這麼事を考へながら、五辻の角へ出て來たと思ふと、ひよつくり其處へ立ち止まつてしまつた。

『ほい、これは失敗つた。うつかり通り過ぎようたわい。』

戯けた身振で、爺はまた後回をして五歩六歩戻つて來たかと思ふと、

「此處や〳〵。鼠め、掛りよつたかの。」

獨語を言つて、こつそり溝の上蓋を外しにかゝつた。爺は先刻天神の境内へ遊びに出掛ける前、こゝを見計らつて捕鼠器を一つ仕掛けておいたのだ。が、鼠は掛つてゐなかつた、そして餌は巧く掠られてゐた。

爺は忌々しさうにちよつと舌打をした。成程松爺ののつた通りだ。鼠め、甚く怜悧になりくさつた。この調子なら今に餌ばかり仕てやられて毎日餅代を三錢五厘方も喰ひ込むやうになるかも知れない。これては實際何とか工夫をせねばなるまい。――それに氣がついてみると、鼠にしてもさうさう何時迄も今迄通りに五錢の價値に買上げられると極つた譯ではない。今に時候が更つて、流行病が下火にでもならうものなら、どんどん値下になつて、どうにも仕方がなくなるかも知れない。

「畜生、何やら心細うなりよつたわい。黑死病め、もつと流行りくさらんかい。」

と爺は泣き出しさうな聲で言つた。そして重たい脚を曳摺るやうにしてそこを離れた。

が、五辻を上立賣へ曲る邊まで來ると、爺は旣うすつかり其麽事は忘れてしまつて、背の空籠には鼠が六つ轉がつてゐる。これだけあれば三十錢にはなる。先づ明日の晝までの米代には差支ない。で、それからの事は今晩床に潛つて、ゆつくり考へたところで萬更遲くもあるまいと安心したやうに、何だか往時流行つたらしい小唄を低聲で繰返しながら、とぼとぼと歸つて往つた。　（おはり）



故郷の友

眞山青果

一

伯父の家で夕飯をよばれてそこを出た時にはもう夕靄が薄すく士族町の杉垣根に立ち迷ふて居た。繁は三里離れた田舎から今晩尋ねて來る筈の村岡を思ふて氣を急いで居た。痛いほど固々と凍り切つた冬の道路に歩いて居る靴の爪先が自づと窄まるやうな氣がした。

伯父も一年〳〵に世間並の年寄になつて行く。從姉の病氣に屈托もあらうけれど、岐阜の典獄から初めて歸つた頃の濶達な幅の太い聲はもう聞かれさうもない。齒も老人らしく黄色に透いて來た。一度見離した甥を呼ぶにさへ繁君だの繁さ

んだのと氣弱く樣づけするやうになつた。

伯父の家から歸る途中には、小兒の時から通ひ馴れた町もあつた。

小學校から中學校、それから高等學校を半途にして家を飛び出すまで、繁は毎日〳〵この篠竹垣と土塀との續く石礫の小路を歩いたものだ。疎らに霜枯れた垣根の間からは、雨戸の無い昔風の藁葺の家や落葉の吹き溜つた桑の畑や、石を壓に縛りつけた撥釣瓶や、屋敷〳〵の小さな氏神の祠やが今でもその時のやうに見える。目に辛味を滲み込ませる濃い夕方の空氣の中を、東京では見られない質素な裝をして、袴に下駄を穿いた女學生や、二本筋の高等學校の書生やが、寒さに頰ッぺたを腫らしてゾロ〳〵と通り過ぎた。途中に遊びそびれて一人寂しさうに垣根際を歸つて行く學校歸りの小兒もあつた。

繁には一年〳〵故郷が狹くなつた。七年の間に四度も歸つたが、歸つて來るたびに故郷に遠い人となつて居た。落第しても〳〵高等學校の三部に喰ッ付いて居た小川は去年の夏移民會社の書記に雇はれてメキシコに行つて了ひ、軍醫の遠藤は熊本に轉隊、白石は朝鮮守備隊で病死、郵便局に出て居た奨棋氣違ひの大谷は引續く家の不幸から局も退いて了つた。一昨年の暮に歸つた時は粉袋の前掛を膝に締めて寺町裏の見世に笊を編んで居た。「斯う決心しました。」と友達の前を耻入るやうにして居て、もう詰將棋の自慢話も聞かれなかつた。話しに行く家と云つても中學時代から懇意にして居た古本屋の店頭と、銀床と云ふ理髮店、外には祖母の家に番頭して居た耳の遠い源吉小父とそんなものだけになつた。その中で年に一度ぐらゐづゝは東京にも出て來るし、又歸省する度に會ふ友人は村岡一人となつた。一昨

年は埋立地の運動とかて、去年は青瓶官林の拂下げの奔走とか云つて二度とも半月ばかり繁の家に來て泊つて、何時もこの事件さへ片付いたらばと約束して居るが、うまく儲つたやうな話も聞いたことは無いけれど、何時も思掛けもない用を抱いては、突然訪ねて來る。

學校の往復には良く友達と石の抛り競べをした町角の大欅はスッカリ其黄色な葉を振ひ落して、石灰の濁つたやうな雪空に骨ッぽく尖つた枝々には、渡鳥の群が夥しく塒して鳴き立てゝ居た。あの太い幹には村岡と二人で自分〳〵の名を彫り付けた小刀の跡が殘つて居る筈である。

家へ歸ると、土地の新聞記者して居る志村と云ふ男が、ボヤけたやうな顏して繁の歸りを待つて居た。去年までは東京に居て、そちこちの世話に採み立てられながらそれでも文學に熱心して居たが、何時思切るともなくズル〳〵に思切つて、郷里の小新聞の外交記者となつて居る。縞物の羽織を着て商人の持つやうな緒締の煙草入など持つて居た。小石川の繁の玄關にも一二ヶ月ゴロ〳〵厄介になつて居た。

村岡からは留守にわざ〳〵人を寄來して、都合あつて此方からは行けないから、明日は泊りながら是非こちらへ來てくれと云ふ手紙を持つて來た。そして、村の者どもゝ切に望んで居るから是非小學校で何か一場の談話をして貰ひたいと書いてあつた。

「村岡と云ふ人も隨分思切つたことをする人です。百姓どもを騙して鬮内になつて居る銀杏の樹を伐つたとかて、村では大騷ぎをして居るさうです。あれは、一昨年の夏でしたか、私が御厄介になつて居る時分、それ埋立地の運動とか云つて白リンネルの洋服着て來た時、私と一所に散歩に出ては方々の蒲鉾

屋の大きな粗板の値を調べて歩いたものです。今考へるとあれが然うだつたのだらうと思ひますよ。」と志村はダルい聲で同じ村の者から聞いた噂を話した。

　繁は何時歸つても村岡の噂を聞いた。そしてまた、何時聞いても餘りドッとするやうな話はなかつた。去年は自分より年上の藝者とくさり合つて、その春からズッと半年近くも家を捨てゝ髮結ひの二階にその藝者と一所にかこんで居た。今年五つになる文一と云ふ小兒も女房を心配させて外から取引つたのである。その方のゴタ〳〵も未だ片付かずに居ると云ふことだ。その外目に餘るやうな話も隨分聞いた。

「お秋さんばかり氣の毒さ。然し素人にだつてあんな感心なものは無い。麥播きでも田の草取りでも小作人と一所になつて働いて居ると云ふ話だ。國さんも大抵にして安心させてやると好いのに。」と母親も一所になつて云つて居た。

「あの男も一生あゝだらう。然しそれも好いかも知れない。」と投出したやうに云ふ繁の心の中には、友達の所業は感心しないけれど、何時までもその若い氣で居る所が羨しい。優しい感情に縛られることの出來ない、自分の寂しい過去を憶ふ氣もあつた。

　木香の強い、赤い酒を飲みながら、餘程醉つたと見えて、常の口下手にも似合はず、志村はこの頃になつて初めて見た世間と云ふものを話した。師團長とか縣知事とかなる位の人には、どこかドッシリと落付いた大きな所がある、文學に關る人などには見ることの出來ない人格の重味があるとか云つて、文學者となる前に先づ人となる修養をして居ると話して居た。繁は餘程深く東京の生活に懲りたものと思

づて聞くと、渠の疎剛な頭腦を氣の毒にも思ふのであつた。

恵村を送り出して障子を明けると、粉雪がサラ〳〵と音ばかり降つて蠟燭の灯のやうに黄色な日が地に映つて居た。

二

翌朝は早々と、村から汽車で中學校へ通ふ兄の長男に手紙をことづけて、是非今日は正午の汽車で來てくれと云つて寄來した。村岡が未だ兄には繼母になる母親と二人で家の身上を助けて、放埒な兄の借錢始末をして居るころは、始終齒を疾んで泣いて居る脾弱さうな小兒であつたに、ズッと背丈も伸びて丈夫さうな青年となつた。眼付の素直さうに見える、唇の色の冴々した顔立は、血を近く引いたゞけに一所に學校へ通つた頃の村岡を思出させた。

未だ土地の學生に洋服など着るものゝ無い時分に、村岡は毋親の私益で買つて貰つた緋羅紗の裏を付けた帶の付いた外套を着て、毎朝繁の門前で口笛を鳴らしたものである。繁の母なども村岡を見て「百性でも家柄の子だけにどこかに鷹揚したところがある。」と云つて居た。快活な、わだかまりのない、明るい友達として級の中でも多くの者に愛された。好く友達どもを芝居へなどに連れて行つて、恰好の新しい蟇口から銀貨を出して暖かい辨當などを皆に振舞つたものだ。その頃の村岡の家は兄貴の放蕩に傾きかけたとは云はれながらも、まだ大地主として郡内では指を折られて居た。

「演說のことを又書いて來た。本當に喋らせる氣で居ると見える。」と繁は手紙を讀み了つて、臭の强い味噌汁の膳に向ひながら云つた。

「村の者へ聞かせたいんだらう。行つてやる方が好いよ。あれてこの頃は大層お前を力にして居るんだから。何日かも來てね、本當の友達と云ふのは繁さん一人になつて了つたと染々然う云つて居たよ。」

母親は、兎に角人並には出世した悴が世間から待たれるのが氣持好さゝうてあつた。

汽車の窓に隨つて見える遠い奧州山脈の襞々は。硅石の斷面のやうに雪に光つた。村から村へつゞく廣い田野の土はたゞ一面にドンヨリ乾からびて、蛹の睡りのやうに鈍々しく眠つた姿を見せた。部落々々の百性家を圍ふ杉の木が眞黑く霜に燒けて居た。

R――驛。洋服を着た繁が田圃の中の小さな停車場へ下りると、

「これは西田さん。」と聲掛けて背の高い淺吉が向ふの運送屋の軒下から駈出して來た。村岡の本家に夜番して居た下顎の尖つた老爺てある。もとは小屋者と云ふ賤しい身分の渡り者てある。今以つて言葉が土地に染みないで居る。これの捕り繩の捌きや棒を使ふ早業を村岡は家の自慢にして友達どもに見せたものだ。

「國さん(村岡の名)が焦ッつくので、今朝から二度も停車場まて無駄步びした所てす。それほどだら自分て出れば好いのにッて笑つたもんさ、貴方。」老爺は遠慮も無くゲラ〳〵笑つて顏がちぎれさうな、

吹曝しの作場道を近道して案内した。

繁はこの老爺の油斷なさゝうな茶色の目をもとから好かなかつた。何所かに狡猾な渡り者の輕薄さが見え透えて居た。村岡が今の家内を藝者屋町から引上げて家へ入れやうとして、家中の意見にさからつて茶屋浸りして居る時にも、この淺吉ばかりは村岡の手前は渠の味方のやうな樣子を見せて居た。「家の方は私がうまく計らふ。好いとも〳〵、若い時は誰しもある事ッた。」と物堅い母親に言付けられて故々仙臺まで探しに寄來されても、幾らかの酒錢を貰ふと、料理屋の門口から斯う云つてコソ〳〵と歸つて行く老爺の姿を幾度も見た。村岡は怜悧な飼犬でも誇るやうにこの老僕の忠義、を時には涙を流して女子どもに自慢して居たものだ。もう十年も前の事になつた。

小生も發心して家を建てるやうな氣に相成申候。住ふところ無くては人は何を申しても駄目に候。と手紙に書いて寄來した渠の家は、本家から少し離れた街道に向いた家である。前には用水堀が鳴つて流れて居た。狹いには狹いけれど、この邊には明るさうな家である。母家は出來ても物置や庭廻りは舊るい以前のまゝに頽れてあつた。

村岡は毛糸の襟卷を頸に卷き付けて、細長い空臑を焙つて爐傍に胡坐かいて居た。

「淺吉、本家へ行つてお秋が居るだらう。西田君が來たからッて然う云つて來てくれ。」と老僕に然う命じて、自分は無精に手を伸べて傍から敷物を取つて出した。「暴れ者があるんだから、この通りだ。」と亂雜した家の中を見廻した。

表通りからカタコトと下駄を鳴らして、筒袖の短かい無尻を着た女房のお秋が歸つて來た。

「何うだッた、病人は。誰か仙臺へ行つたか。」と村岡は氣に掛けて居て入るなりそれを聞いた。

「駄目なんですと。今兄さんが病院へ行くところです。足なんか枕のやうに腫れたんですつて。」

「何うせ駄目は判つてるさ。又兄貴大騷ぎするだらう。好く／＼厄介を産みやがる。」と村岡は投出すやうに云つて居た。

兄の後添の腹に生れた末ッ子が腸チブスで仙臺の病院へ入院して居るのであつた。

「まア好く被來ッて下だすつたこと。寒むいから今日は何うだらうと思つて居たところなんですよ。」

村岡の妻は何時もの馴々しい聲で云つて、重さうに負つて來た五ッばかりの男の子を下へ下した。流石に言葉は訛つて居ても、何所かに以前の身上を思はせる冴々した調子までは濁つて居なかつた。知つて居る者にはこの子の母親にソックリと直ぐ氣の付く、鼻の低い額の大きな兒は、見馴れない繁の顏を臆病さうに母の膝に甘え付いて窺いて居た。

「西田さん、見て下さい。私もこんな兒を産みましたですよ。」と含羞(はにか)む小兒の頭を無理に抑え付けて、お秋は笑ひながら西田の前にお辭儀をさせた。

「これですか。」繁は小兒を好く見るのも氣の毒に思つた。

「この通りのお暴れさんです。東京の伯父さんにこの手を見て頂きます。」と膝の上に抱き上げて、皹(ひゞ)だらけな赤い掌を火にかざして居た。

「何を餘計なこと。それよか早く飯の仕度でもしないか、學校でも校長や皆が待兼ねて居るだらう。」と村岡は煙草をふかしながら叱り付けるやうに云つた。

「この通りなんですよ、西田さん。自分は年中勝手なことばかりして居る癖に、偶に家に居付くと私ばかり叱り付けて居るんです。本當に困つた隱居さんになつて了ひました。」

「馬鹿を大概にしないか。」村岡は小兒を膝にあづけられて爲方なしに苦笑して居る。

三

學校で話すことは別に考へても來なかつたが、教員室に居て多くの人々と應接して居る間に自づと話すべきことが心に決つた。それは、「人を見るさまざま。」とでも云ひたい内容であつた。「私は村岡君には非常な世話になりました。恐らく私の今日あるのは村岡君のおかげに負ふところが多いのです。私は村岡君に負ふた恩は是非返へしたいと思つて居る。」と斯う云ふ冒頭を充分に置いて、それから多くの人が人を見る標準の、世間とか道德とか色々のものに謬られて居ることを說いて見やうと思つた。斯う繁に考へさせるまでには、四角な窓際の固い腰掛に掛けて居る短かい時間の間に村岡に應對する村の人々の態度から樣々の複雜したことを感じさせられたのであつた。集つた人の中には村の巡査、僧侶、役場の人々、また若い青年も交つた居た。この學校の主席教師と云ふヅングリ肥つた言葉の低い人は嘗つて村岡の下宿で師範學校の生徒として引合はされた人であつた。その頃は村から出るぐらゐの人

は必らず村岡の下に愼んで坐つたものであつた。
大きな箱火鉢に火をドッサリ盛つて、人々は低い兒童の腰掛けに掛けた。繁は立つて話する間にも、目を絶えず隅ッこに固つて居る女敎師の一人にそゝいで居た。後には熱して來てその痩せた小さな女一人に云ひたい不足を外のことのやうに話した。
その女敎師の弟二人は村岡の物好きの世話から人になつて、一人は少尉となり一人は商船學校へまで入つたのである。村岡は書生時代から自分の道樂の爲めに人を救つた。繁も無論その贅澤な恩惠を着て居る。その後村岡が本家から分けて貰つた身上をスッカリ耗つて了ひ、ある事情の爲めに一年間の苦い暗い、生涯を經て來た後。その世話して居る二人の姉、この目に權のある女敎師の醜い、顏の腫れた妹に文一と云ふ男の子を生ませたのである。それから後ち、村岡とその家との間に、「恩は恩として置いて。」と云ふ面倒な問題が今以つて起つて居るのである。
「お久し振りで御座ます。宅でも是非お目にかゝりたいと申して居りましたが、生憎學校のことで××の方に參りました。」と云つて女敎師はその良人の校長に代つて繁に挨拶した。その時村岡を見た目付が強く繁の氣を立たせた。
女敎師は蒼くなつた。村岡は昔風の羅紗の角袖外套の手を懷にして窓際に聞いて居たが、話が搬ぶほど顏が混雜して見えた。幾度も目で相圖して友人の話を止めやうとしたが、繁は氣の付かぬ振りして話を進めた。その中に醫のやうな風で、村岡が嘗つて過つて暗い生活のことに言葉の延びた時なぞは、村

岡は怖えたやうな目付してソツと教場内の人の顔色を讀むやうに見た。

話を終へたところにヨボロ〱顫へて歩るく小使が村岡の家から二度も迎の者が來て居ることを知らせて來た。

外は薄すい月夜であつた。廣い平野は白い靄につゝまれて。××の村は重ぼッたい空の下に厭付けられたやうにその中に黒く見えた。小山の裾を下りて町の角に出るまで二人は相互に口を利くのが臆却なやうな氣がした。繁は何所からか光を寄來して白い路に映すヒヨロ長い村岡の影を見ながら默つて歩いた。

「新しく建つたね。」町に出て本家の前を通つた時、重い心を破つて繁は初めて口を利いた。

「俺があんな家でも自分で建てたもんだから、負けない氣になつて急に建てたんだらう。そんな所は見え透えたやうなんだ。相互に斯く別れて了つてから、僕は何んとも思はないで平氣で前も通るし、遇へば叩頭ぐらゐするけれど、兄貴は故と咳拂ひして向ふの方など見て通つて行く人だ。何しろもう今になつて急に無くした身上が惜しくて〱耐らなくなつたのだ。」

「僕ア兄さんとは好く知らないけれど、極く人の好い、氣の弱い人のやうに覺えて居る。」

「まるで意地と云ふものが無いんだ。極く弱いんだ。どんなにしてゞも今更ら村の人に賞められたくなつたのだ。桂太さんも眞面目になつたなんて云はれるのが何より嬉しくつて耐らない。だから娚にも學校を退して百姓になつてくれなんて責め立てゝ親子喧嘩が絶えない。何んでも思ひ立つたら直ぐが直ぐな

のだ。」

村岡の舊るい家が晝火に燒けた時は緊ゝ知つて居た。國語に徒然草を輪講して居る所へ小使が電報を配達して來た。その頃は兄貴の放蕩ばかり悲しんで居た村岡は、家の燒けた報知を見て、敎師にも默つて敎室を飛出した。裏の山茶花垣の根方に踞んで、ボンヤリして居た。これから行つて燒跡を堀つて見やうと力なさゝうに云つた渠の張り詰めた若い顏が目にも見える。その時も繼母に面白くない兄貴は女を連れて行衞が分らなかつた。村岡は制帽を懷にかくして通り憎い新道を一軒〳〵尋ねて廻つた。

家には長い着物を着た百姓が二人退屈して村岡の歸りを待つて居た。

「駄目でがす、私どもが行つたんぢや先方でも親切にしてくれません。矢張り貴方の馴れた口で出て貰はなくては不可せんな。」と罫紙を綴つた書類を出した。

「でせう、だから初ッから私が云はない事ではない。人を疑るからそんなことになるのです。」

「だから降參して參りました。何うか早く纒まるやうにお骨折願ひます。」とロクに證文も讀めない二人は二枚の委任狀に實印を据えて歸つて行つた。緊はその證書の上に小書きして抽斗に仕舞ふのを見て、何んとなく友達のすることが不安に危さうに思はれた。何時まで斯うしたことを仕事として居るのだらうと友達の身の上が悲しくなつた。

「皆あれだ。人を信ずることの出來ない輩だ、少しの禮金を惜しみやがるから爲方が無い。」と獨語のやうに呟いて居た。

爐傍を取圍んで話が興んだ。

小學校に出る中でも、多少新しい思想を持つと云はれる若い一人の敎員は、その同僚を誘つて來て珍らしく火の傍に胡座を寄せた。本家の娚も、淺吉老爺も來て交つた。村岡は何時になく心好い酒を過ぐして、最う眞赤になつて居た。そこへ表から、「西田さんが御坐つたさうだ。昔の岩間長之助です。」と酒臭い聲を吹き掛けて、道化口の巧い役場の書記も入つて來た。この人の狐釣りの失敗話や、初めて東京見物に出て旅屋の姿見鏡にお辭義をした話は、聞く度に繁の肚を捻らせたものである。

「さア〳〵、これで役者が揃つた。」と村岡のお秋は獨りでチリ〳〵臺所に酒の支度をして居た。

活々した笑ひ聲が狹い茶の間に溢れた。外を通る若い者どもは不思議さうに格子口を覗いて、「お晩になりした。大層賑かなやうだね。」と暗い外から聲を掛けて通り過ぎた。

繁は酒にはしやいだ今晩の友達を見ると、自然、一緒になつて遊び廻つた頃の渠が盛り時を思出さずには居られなかつた。一つは生母に對する兄の仕打に反抗もして見、苦勞して立て直さうとした家計の頽れ行くのに絶望した爲めもあつたらう。傍から見ると、望むことは必らず爲り、云ふことは必らず遂げるものとても確信したやうに、自由の利く血氣にまかせて隨分外法な我儘三昧を爲通した。又自分の目鼻が他を引付ける力あることも知つて居た。側に來る若い女の耳は何時の間にか渠の言葉にスツカリ

酔はされて了つた。

「今度はあれだよ。」

斯う云ふやうな友達の言葉を聞く度に、不自由な間に産れて、總てに臆病になつて居る繁は、趣くまゝに流れて行く村岡の大膽さが羨しかつた。本家と別れて家を立てる時なぞも、兄が物惜しみから父の遺言と遙か相違して居るのを怒つて、貰つた田地の半以上を漸次の間に振り播いて了つた。

本家の子守が顫えながら走せて來た。病院の小兒は急に差重つて死んだ。旦那は終列車で屍體を連れて來るからその用意を急いで置けと使の者が來たと知らせた。時計を見るとその終列車に間が無つた。

「さア大變だ。ぢや私は手傳ひに行つて來るからね。」とお秋は鍋を煮て居た箸を良人に渡した。

「行つたつて爲やうあるものか。打遣つて置け。好く云はれもしない癖に。」

「それだッて然うは行きませんさ。貴方は兄弟だからそれでも好いかも知れないけど、又後で私一人叱られるんだから。」と髪を梳きながら駈出して行つた。それと一所に敎員どもゝ歸つた。

「さア和子、貴方は直ぐに停車場へ行つて。」と淺吉にせつかれて甥は動きさうにも無つた。

「誰が行くもんか。あんな小兒死んだッて。淺吉一人行けば澤山だ。」と慘いことを云つて居た、死んだ妹とは腹も變つて居た。この甥の實母は今の母の爲めにみぢめに家を出されたことは繁も知つて居た。それでも伯父に叱られてブツ／＼云ひながら提灯を持つて出て行つた。

役場の岩間ばかり暢氣さうに殘つて、酒を飲んで居た。「お悔みはいづれ明日早朝と云ふことに致して、今晩はこゝてお通夜だ。」と氣樂なことを云つて居る所を、間もなくドヤ〳〵と大勢の足音が町通りに聞えた。提灯の灯も見えた。障子の間から窺いて見ると、村岡の兄が死んだ兒を背中に負ふて、打萎れて通つて行つたと云ふ。

「又好い金費ひだ。厄介なものばかり好くも産むことだ。」と村岡は酒の醒めた弛んだ顔して苦々しさうに云つて居た。

やつと岩間を歸して寢仕度して居るところにお秋が歸つた。水に濡れた赤い手を前掛て包んで寒むさうに歸つて來た。

「何うした兄貴は。泣いて居るな。」と村岡は炬燵の中から起き上つて聞いた。

「當り前さ、貴方。自分の子だもの。貴方と云へば然う云ふ事ばかり云ふ人だ。」

「おとくや清之助や、上の家からも來てるだらう。那奴等を集めてザブゴブお祭り騒ぎしてるが好いさ。飲み口に有り付いたと云ふものだ。」と冷かな皮肉を云ひながらも、小兒の死顔やら、臨終の模樣やら妻の話すのを點頭ながら聞いて居た。

「西田さん、この通りなんてすからね、とても兄さんと反の合ふ筈はありません。間に挾つて困るのは私ばかりなのてす。」とお秋は口には然う云ふものゝ、傍から見るほど今の生活を不安に思つて居ると

も見えなかつた。

「何うです、この際一奮發して東京へでも出て見たら、又氣が變つて面白いことがあるかも知れませんよ。」と繁は晝間の中から云ひたい〳〵と思つて居た肚の緒を出してすゝめて見た。

「然うですね、それも何んだか畏いやうな氣がしましてね。もうスッカリ田舍者になつちやつたんですもの。此頃深川の姉が松島見物ながら來てくれてもテンで話も出來ないんですよ。東京の言葉をぢや體裁が惡るくつて話が出來ないんですよ。最う十年になるんですものね。」と可笑しさうに笑つて居た。

然う云へば以前から職業にも似合はず張氣の無い、すぐハラ〳〵して物に負ける性質であつた。村岡と家との話が面倒になつて、一時ある下宿屋の二階に隱された時なぞは、藥を飲むまで心配して、始終ションボリ火鉢にあたつて居た。

「私は何うでもなります。又もとの家へ歸つても好いから、何うかもう勘忍して下さい。」と意地の無いことを云つて、甚く村岡を憤らせたことがあつた。その頃の氣の荒い村岡に撲たれたり蹴られたりしてまで隱和しく辛抱して居た。

「貴樣は本當に俺を思つて居るのかい。」と村岡は時々こんな事を云つて笑つたものである。

五

朝、目が覺めて見ると、文一は村岡の懷に入つて寢て居た。仕度して行つた朝飯を二人して喰べて居

るところへお秋は精進の蒟蒻を小鍋へ入れて持つて來た。そして、煙草を三四吹急がしく吹つて又出て行つた。

「炬燵でも仕掛けて、ユックリ話し爲やうか。何が面白いのか本家は大騷ぎだ。」と爐の火に灰をかけて、その上に櫓を仕掛けた。

文一は寒さにいゝぢけて父親の膝を離れなかつた。村岡は小兒の頭に腮を乘せて、何時にない眞面目な話を爲た。でも話がその伜のことに近付いて來ると、必らず除けて話を外らした。話したいことはあつても、自分の苦い經驗に觸ることが恐ろしいやうにも見えた。それだけはソッと蓋をして置いてその周圍だけを話すのであつた。繁もそれを押しても聞かれなかつた。

本家の若者どもや手傳ひの者どもは必らず出入り聲掛けて通つた。中には入つて手を暖めて行くものもあつた。そして來る者も〳〵、旦那が昨夜も泣き上戸の癖を出して棺の上に坐つて泣いたの、昨夜から長男は自分の部屋に寢て居て出ないの、手傳ひの誰は誰と爭つたのと、細かいことまで一々傳ひて行つた。村岡も皮肉を云ひながら根堀り葉堀り床かしさうに聞き立てゝ居た。

淺吉の老爺は半午から家を拔けて來て、この炬燵を離れなかつた。

「淺は加減惡るいと云つて貰ひたい。小兒ッ子一人死んだつて、然う〳〵は働けるものか。」と云つて二度も三度も來た迎えの者を歸した。

「馬鹿々々しい。酒飮んだ時ばかり親切になつて、頼みもしない人の御機嫌取つて、後から一度だつて本

當になつた例が無い。初ッからペンチャラ云はない方が好いんだ。」と獨り言にブックサ云つて居た。

村岡は何か云ひたさうにして、フテ腐れた老爺の卑しい顔付を見詰めたが　遂々何も云はなかつた。

正午前になつて急に出掛けやうと云ふ村岡に從つて、繁も洋服に着換えて外へ出た。重く疊積した雪雲が頭の上に覆さつて居て、耳を截るやうな風が吹いた。田圃を越えて山岸に廻ると。そこから赤土道の新道が開けて居た。兩側には梨子の畑が續いた。

「鹽釜へ行つて牛肉でも喰べよう。折角の所にあの騒ぎだから何うすることも出來ない。」と話しながら、山間の曲り繞つた石高路を歩いた。寒むく蒼い冬の海は深かい杉林の頂に折々見えたり隠れたりした。

先に立つて行く村岡は何か屈托あるやうに勢なく沈んで居た。

「僕ア君に是非相談したいことがあるんだがね、實はそれて態々君を連れ出したんだ。考へるともう居ても立つても居られないやうな氣になつて了ふ。」

途中斯う云ふから、繁も眞面目に待受けて居たが、度々話を云ひそびらして止して了つた。

「まア好い、その中にユックリ長い手紙に書いて送らう。」と遂々又話に蓋をしてしまつた。

寂れた河岸通りの家に、寒い濁つた海を見ながら、うまくも無い晝飯をすました。

又もとの新道を三十町も歩いて村岡の家に歸つた頃はもう足元が暗かつた。お秋は本家との間を往つたり來たりして兩方の家を働いて居た。

「伯父さん。」と格子先から聲かけて、仙臺へ買物に行つた本家の甥はドサリと風呂敷包みを中へ投込んで、「仙臺の祖父さんから豆餅を貰つて來た。晩に焼いて喰べに來るんだ。」と云つて預けて行つた。

繁は妙に手離せないやうな不安を友達の上に感じたけれど、何時まで世話を掛けて居たくない。明日の朝は早く仙臺へ歸らうと思つて居る。仙臺には又用もある。

（完）



和歌　尾上柴舟選

○　森園天涙

冷やけき月の光りにつゝまるゝせまき世界に生くくるしさよ

いさゝかは慰むるものもあらむかとたま〳〵此處へ海を見に來ぬ

○　岩崎雨洋

單調に倦みつかれたる世の人の如くにけふも日は空をゆく

このうへは何を望まむたゞ君とほしいまゝなる日をおくり見む

いかにせばこの悲しみを歌ひ得むかく思ひつゝ空あふぎ見ぬ

海をみて心足はず山を見て心たらはず今日も暮れゆく

眼とづればま白き鳥のあまた來てわが前を飛ぶ安房の海みゆ

○　橋口暮山

とこしへに太陽の輝やかぬ谷のごとわがかなしみのつよくいたまし

夜もすがら泣きあざれたるわが顔をまづつよく射る日の光りかな

悲しみを歌にするまでこらへたるこのわが性のつよき矜りよ

森の上に嘆ける月をながめけりかなしみの子は手を胸にして

やゝ荒るゝ海をながめて言葉なく渚木立を君とたどりぬ

やうやくに生の意義をば求めえしこのよろこびにたとふものなし

大風のあとのしづけき如くにも君をおもへる今日の我かな

秋は來ぬガラス戸を射る日光にうつろ心の身をひたと寄す

人のもつ性のすべてをわれ持つとやうにおぼゆ

る日もありにけり

○　藍原千秋

その頬もほのに褪せしを見るほどの寂しき日なり梔子の花

ひともとの樫の幹こそ靜かなれ白日のもと大空のもと

心よりこのゆかしさも哀れさも思はぬ子なる淡きほこりよ

月の丘淡く流るゝ影だにもひとみにあまり寂しかりけり

樹の青さ波の白さもとこしへにかはらずとみるのこの寂しさよ

○　日下天香

なつかしき母に別れし日のやうに悲しかれども涙流れず

世に二なき人とたゝへて過ぎし日の疑ひごゝろいぶかしみする

○　小河原素山

あゝかなし「知らず」と云ふに心とがめ「知れり」と云ふに心うき吾れ

いといくさことをねがひて一日ものの足らずして三年ほど過ぐ

○　金子未人

樹も草も新らしき日や喜ばむわが胸を吹く風のすゞしさ

君を見ぬ夜はさびしさにうなだれて寺など多き路を行くかな

○　すうぴ生

くもり日は心ものうくよこたはり粟の穂たるゝ裏の畑みる

なにものをわれはうとふかそれすらもしらずうたひて今日もありけり

産れきて同じことをくりかへしあるとおもへばうたがひもいづ

陽の蔭になりたる樹々に蜩の寂しくなけば里のこひしき

○　西井金羽

ことなげに別れて幾夜灯の前に靜居しつゝもまたおもひつぐ

悲しさを悲しさとしてたやすげに言ひつくろひて若人はあり

相思ふのみの幸には餘んぜず海越えて來よまほ

ろしのきみ

○　塚田落光

聲あげて泣ける少女は母にゆく泣きていづこにすがらむわれは

三疊の暗き一室に壁にあるわが影見つめ歌つくる夜

流れゆく雲みてあればおのづから瞳の冷ゆる秋の夕ぐれ

○　皆川やすの

天の上の宮にや行かんむしろ我地の果なる獄にいらん

わがおもひ君にしられず君がおもひ我知らざりし日にかへりにき

わがこゝろ告げがてにしてこの十日ゆめごゝちにも君を見しかな

○　佐藤華葉

暮れて行く夕日の前にふと思ふ一日々々に衰ふる身を

くれないの青の綠のむらさきのあらゆる色の中に日くれぬ

更くる夜を一人目醒めてながめつる星にうらみの何あらねども

○　[illegible]　孤帆

おそろしき物語ものよむがこと後半生の安からぬかな

わが瞳はらひがたなきうす霧の今日もかゝれり明日もかゝらむ

落月すなべてのものは青やかに今し照るらむかの海の果

○　山宮允

我君のみうたのふりはゆく雲のゆく水の如なたらかに見ゆ　柴舟大人の歌を讀み侍りて

そのかみは都のものゝこと〴〵くいみしきがごと思はれしかな

衰へていとはしたなきことにまで驚く我れと成りにける哉

○　操坦水

われに似て悲しむ人の今ひとりありとし思ふ春雨の朝

吾病みて朝日影さす障子をばにくみにし日は秀才なりしよ

○　金田白靜

黒潮の潮の底なる大魚の腹の白きをなつかしむ
かな

白紙に白墨をときて何物か書きては我に敎ふる
人よ

○ 町野海草

母ありて胎内の兒を思ふ如わびしき色に月はく
もりぬ

○ 千々岩藤波

美しき夢としいひてやみぬべしあまりはかなき
瞖なれども

○ 大谷桃溪

生と云ふいとも悲しきよろこびを味ひつゝも倘
今日も生く

さびしみの心のひまにひと筋のよろこびありと
目を閉ぢて見る

○ 岡田幽溪

疲れ果てし心は夏の落日をうれしき様にながめ
にしかな

○ 長谷川繁兒

われとわが心をそしり歎きつ慰めつゝも林に入
りぬ

○ 法月紫星

みづからをあざむく歌は作り得じ暗きをうたふ
さいなまれつゝ

○ 段谷秋洋

熱を病むと少しことなるこゝちして我うわさ聞
く夕まぐれかな

○ 小川露葉

何故にかゝる處に來りしといぶかりつゝもまた
辿り行く

○ 和田岳南

恨みなし悔もなしまた戀もなし唯茫として夕ぐ
れをゆく

○ 南澤哲郎

うら淋しさまで驚くことも無く過ぎし別れと人
に云へども

○ 平松穂波

秋の朝濱邊の深き霧の中に君失ひしわれの寂し
さ

○ 下園花舟

たとふれば毀れし瓶の轉がれる狀にも似たる我
れと見らるゝ

○回想はとほく朧となりて行く現の夢と我は言はまく　本間鐵伯

○危うさをふと遁れたる心地してしづかに歌を口誦み居り　芝野花

俳句　高田蝶衣選

春を待つ

宵皺春待つ家の謠かな　へき生

大志なき小望足りて春を待つ　同

春を待つ千樹の梅の主かな　同

江南の一信春を待つ詩かな　同

忙中に五言短古や春を待つ　幸穂

春を待つ故山の路や歷々たり　同

師に侍して湘南の濱に春を待つ　同

いそ〳〵と怪しう春の待たれけり　長鯨

匆忙として春待つ人の樣にもなし　同

末の子の春待つ事を云ひて寐たり　同

春を待つ池塘の客の玉履かな　麥門冬

雪裡この詩聖を認めて春を待つ　同

菜根を嚼んで他事なし春を待つ　同

島住も春待つに遠帆慕はるゝ　夢筆

盗伐も春待つ山の月寒き　同

小構も結授の主や春を待つ　同

閑第に使丁春待つ焚火かな　朱字樓

春待つや鞍裝農具處得て　同

厨備か爐も雜魚なんど煮て春を待つ　狠子

春待てば雪割草のひらきけり　同

山南の溫泉に春待つや旅小吟　糸遊

仕官せん願に堪へて春を待つ　同

元服の名親も定め春を待つ　風來子

喪に服す鬢のそゝけや春を待つ　同

春待つや厠の草履も更へにけり　雪楊

睡魔俳魔に勝つも春待つ疲れ哉　同

溫泉の里の紫煙雛犬春を待つ　創意子

海鳴の春まつ町にひときけり　同

春待つや熱酒に舌の延びしなど　李童

除目ある人の粉黛春を待つ　同

反古堆裡南山に對し春を待つ　雨岡

春を待つ人にいさゝかねたみ哉　青蛙

春待てば煙も霞と見ゆ野かな　蛙念子

春を待つ君とありたき自炊かな　哲郎
蕘火して春待つ髭を燒きにけり　虎鳴
春待つや鰯ぶとりの網旦那　明々
春を待てど間の宿とて寂びれ家　鬼洗
詠進の歌の推敲や春を待つ　槐山
春待つや廓へ出入る人の妻　柿洲
夜を晝に春急ぐ衣縫ひにけり　春溪
春待つや鰕の目程の木の芽にも　此君子
胃を病んで食品論や春を待つ　猴孫
期す事もあらず春待つ心只　人生
春待つや舊債に典す妻の衣　迷々
樵りし柴の滿つ納屋うれし春をまつ　總子
機歌も春待つ藪の小家かな　畝人
明太魚春待つ家にとゞきけり　射村
詩思もなく爐に焚いて春の待遠し　丘葉
粉を挽けば蓬摘む春待たれけり　黑佛
假堂や春待ち顔の佛達　萩泉
思ひ寢の幾つ夢みて春ならん　玄々郎
春待つやさつ男が家の串の魚　瘦脚
春待つや鋸入るゝ干割れ血　郁芝
城外は沙塵の町や春を待つ　紅葩

舊稿の雛助も古りぬ春を待つ　十二峰
春待つや牧主にして果樹園主　桂壽樓
春を待つ館に不時の御成かな　惨冬
五倍子を挽く媼も春を待つ心　十八公
春待つや衣食の事に拘らで　方外
女寄れば何くれと春を待つ語かな　蓼水

今回の應募九拾六通、「春隣、春近」を投じたるもの若干あれども採らず、一般に好句を見ざるを遺憾とす。

募集課題　初東風　十二月九日締切
　　　　　大根　一月十五日締切

○定
一、應募句は淡路國津名郡釜口村高田蝶衣宛郵送の事、「中央公論俳句原稿」と明記すべし
一、用紙は半紙、一人三十句以内の事

大谷繞石の英國に行くを送る

鵬程の萬里に秋の富士はれぬ　竹湍
菊酒を寢酒と收め君行くか　同
やがて吐くべう霧の都の霧を吸へ　悠々
百舌鳥なくや君が首途もあさ晴れて　花笠
忘れがたきもの柚味噌あり君去なば　竹の門
柚味噌また句になりもせで別れとも　洗耳洞
今朝秋の一鶴晴を帶びて飛ぶへき
秋晴や巨船入るに橋上列ねて　春夢
小春日や鵬程九萬波しづか　梨軒
日ッ本の小いさき月をすてゝかな　慘冬
寒菊に師の出立を紀念せん　賢喜代
纜解くや瀬戸のなごろも秋晴れて　青城
離　譴きも敢へず咲けるコスモスに　同
男らしくと思へど離情夜長さに　同
赤に白に色香は高きはらの花も
　えたにとけあり心せよ君　梨軒

送繞石大人之倫敦歌

林　竹次郎

日のいづる大き日本のわが朝臣は
　日沒らぬ國に今いでたゝす
山行かば幸さはあらむ海ゆかば
　さちさはあらむ行きませ我が君
霧多き雨はた早ら倫敦の
　寒き夕は國おぼすらむ
五百枝足オークの下に雨脚の
　早きを見つゝ得む歌は如何に



呪ふべき現代

松　逕　子

題して呪ふべき現代といふ。見るもの或は現代人情の澆薄風俗の淫靡を指すものとし、或は之を是とし或は之を非として賛否を異にするものあるやも知れず、されど兩ら中らず。如何にも日々の新聞種を見れば朝々暮々に顰蹙すべき事のみ多し、されど何れの世何れの時代か微塵を止めぬ淨玻璃の如き時代やある、さればとて予を以て直に現代の人情風俗に樂觀の眉を開くものと爲す勿れ、昔に醜漢多けれども之を公にすべき機關の乏しく筆にする事の少きに反し、今の醜漢少けれども之を公にすべき機關の多く、筆にする事多きが爲か、或は之を肯定すとも事實には今の醜漢の昔の醜漢に比して尙ほ率の多きものあるか、これ未だ容易に知り易からざるなり。從つて單に之のみによつて未だ輙かに悲喜し得ざるなり、哀歡し得ざるなり。然るを題して玆に呪ふべき現代といふものは何ぞや。

世の樂觀者は暫く措く、世の悲觀者は此頃動もすれば世潮の險惡なるを見て一向ら文藝の罪に歸し、就中自然派の作物の責任に歸するが如し。而して我當局も此大勢に席捲せられて大に之に向つて戒心する所あるが如し。禍なる哉文藝家や、而して自然主義派の作家や、寃なりや知らず、寃ならずや知らず、兎もあれ衆怨の歸する所は常に勢力の存する所に在りとすれば、文藝家や、自然主義派の作家や又以て聊か自ら快を取るべし。とはいへ此の如く見れば我國運の一起一仆は偏に文藝の肩上に擔はるゝの觀あり、他の教育、宗教、若くは政治の爲に其存在の如何を疑ひ、坐ろに悲愁の感なき能はず。

文藝果して爾く重大の責任を荷ふものか、此頃の文藝は兎角の評ありと雖も予を以て見るに我國の他の諸科を睥睨して獨り轡を先頭に按ずるの觀あるは許す、門戸は著しく擴大せられたり、智的分子の夥しく包容せらるゝと共に多くの傾聽すべき新思想の醞釀せられ居るは許す、此點に於て今の文藝は隻脚を以て歩するものに非ず、右にも左にも、前にも後にも十足廿足卅足五十足を出して如何なる問題をも取扱ひ如何なる方面にもチヨッカイを掛くるものなり、蜈蚣は百足を有して憎まる、然らば百足を有する今の文藝の又一部のものに唾棄し去らるゝ蜈蚣の如き姿を呈する事何等か其處に共通の宿縁ありとも見るべきか非か。

何は兎もあれ蜈蚣は忌まるれどもその實恐るべきものならざるが如く、文藝も亦性質上決して爾く恐れらるべき者ならざるを信ず、俵藤太秀郷の退治したる蜈蚣は實は摩蝎の誤なりとの説をも聞く今日、予輩は今の一部の世人の當局と共に忌憚する現代の文藝、自然派の作物なるものも亦同一眞相なるべきかを想ふ。

要するに文藝は文藝なり、材料として含まるゝものには智的分子の饒多なるものあらんも知れねどその性質上最も人の情緒に訴へんとするもの、之を他の論理一遍の一糸の末をも辿りて秋毫の紛錯なからしめんとする諸多の學問と比すれば自ら霄壤の別あるものとす、人は情のみの動物に非ず、理も亦有り、理能と情を裁して初めて此世の行路にさ迷はざるを得るものとすれば、情をのみの文藝如何に勢力を逞うすればとて、之が爲に此世の根底の動かざるべきにはあらず然るに之を恐るゝか、少くも之を假定するが如きあらんには直に理的の學問に於ける甚しき恥辱なるを信ず。從つて吾人は文藝學者の如何によつて悲喜し哀歡するよりは寧ろ他の方面に向つて爾せんと欲するものなり。そは何をか指す、曰く批評之のみ、批評家之のみ、批評家にして眞骨頭を有し、一世の風潮を導いて苟も誤らざるの風度あらんか、吾人は敢て時代を謳歌するに至らざる迄も敢て蹙眉する事だけは爲さゞらんと欲す。何となれば文藝家は單に情に訴ふるを主とする

に反し批評家は更に理に訴へざるべからざるものなればなり。色好まざらんものは玉の卮底なきが如しとの兼好の言は人に情的方面のなかるべからざるを教ふるのなりとはいへ、吾人の一生を導くものは常に理なるものなる以上は健全なる批評家あり、徹底せる批評の賑はん世には如何なる文藝の流ありとも吾人は枕を高うするを得べきを信ず、然るに此批評家なし、從つて此批評なし、呪ふべき哉現代や、予の題して爾かいふもの誠にこれを以てなり。

既に文藝上の自然主義の眞意を解せず、徒らに様を以て葫蘆を描く流の哲學者の膚淺極れる駁論一時は喧かりき、宗教の要素を昔ながらの靈魂不滅説に置き、自己意識ある未來の靈の存在を誣ひ付くるものなり、偉人としいへば伊藤公を擔ぎ廻り、その公の遺憾多き半面の暴露せられ居る瞭々たるをも顧みず、その方面に多大の關係あるべき女子教育家が公の助力を請ひ、公の死に遭ふや女生徒を率ゐて葬儀に参せしむるあり、一國の選良の南米に移民を驅る事監狗の如くその涙の金に繡屏裡の夢を貪るあり、滔々として皆是れ此のみ、而かもこれ盡く一自然派作家の一管の毛穎の力然らしむる處といふか、自然派作家も亦榮ならずや、予は決して之を信ずる能はず。されどそは玆に今論せざるべし、只それ斯かる風潮に對して世の批評家の態度は如何、彼等は狭窄針孔の如き眼を以て僅に小説の一句一字の末に囂々すと雖も、此一代の風潮を達觀し、之を明鏡止水の靈腦に照して、世をして襟を正して聽かしむる底の大議論なきは何ぞや、予は曩に天理教獨立の時に於ける谷本博士の言動に對して少からざる惡感を抱けるが如く、而して伊藤公歿後に於ける諸雜説の公の評論の甚だ振はざるを慨し、之を以て一以て十を推すべきを思ひ、轉た批評界の落莫を嘆ぜずんばあらず、出でよ、眞骨頭ある批評家。

常識なき行政

野逸道人

ある職人風の男が、蠶を一疋手に持て汽車に乘つたら、鐵道の係員が之を詰責して動物輸送税を課せようとした。すると其男は「箆棒め、こんな小ぽけな蠶に税を懸けるなら、私の背中の虱をどうするんだい」と怒鳴り附けたといふ話は、餘り耳新らしい話でもないが、日本人の常識なきことを最も明かに示した例の一つと思ふ。之と似寄つた話はいくらもある。横須賀である水兵が父の土産にと思つて外國の菓子を手に携げて來たら關税を出せといふ、いろ／＼爭うた末「エヽ、七面倒だ」といふので水兵は其場でムカ／＼と菓子を食つて了ひ、「腹の中へ入つてもまだ税が掛るか」といつたといふ話もあるし、長崎で外國婦人の拒むのを聽入れず、汚れた月經の道具まで檢べて見たといふ話もある。理屈は理屈でも世の中の事は理屈ばかりで行くものではない。其處をよく飲込んで理屈以外の手加減をも施して行くのが行政の本旨でなければならぬ。最も嚴格に法律を振り廻す司法でさへも時の事情を斟酌して法を適用する。行政の本旨は寧ろ臨機應變にあるともいへる。然るにも拘らず規則や理屈を振り廻して人民に不便を與へ、事物の運用を妨げるやうの事は甚だ宜しくない事である。

此頃東京では飼犬に首輪の外に口輪を嵌めるか然らざれば綱又は鎖で繋いで置かせる。然らざる犬は野犬と見てドシ／＼撲殺する。犬に咬い附かるゝやうな危險のないのは至極結構の事であるが、何故日本の犬は人を吠えたり又咬ひ附いたりすることが西洋の犬より甚しいかと考へて見るがよい。日本では小供は必らず犬に石を抛る。石を抛る子供を勇ましい活潑な子供として居る。そして石を抛られた犬が子供を吠え若くは咬むと酷い目に逢はされるか若くは殺される。こんな不合理な事はあるものでない。犬を取締る一方には、どうしても子供の教育も直されればならぬ。

又住宅の番地なども全くメチヤ／＼で人民の不便が少くない。仝じ番地の中に二三百軒もある所もあり、極めて遠い所に飛び／＼になつてゐる所もある。今少し規則正しく、誰にても分るやうにやられさうに思ふ。官省で門札を掛けぬものゝ少からざるなどは、昔のお役所風の遺弊であらうが、これなども行政上必ず掛けさすべきものと思ふ。

人民の便利を圖り、事物の運用を圓滑ならしむるのが行政の目的であらねばならぬ。其れを忘れて理屈や規則にばかり拘泥して居るのは常識なきの致す所である。而して現代の我國には實に常識なき行政の少からざるを憾むに堪へぬ。



伊藤公等の梁山泊の遺趾

戸川残花

▲築地の西本願寺の前の角屋敷、今の新喜樂の邊が私共の元の屋敷で五千坪程も有りましたてしやう、明治三年頃に其處に新に普請が出來ましたがそれが當時の所謂梁山泊でした

▲梁山泊は誰も承知の通り水滸傳から出た語で有名な山賊の集會所です、築地のそれには即ち伊藤公や大隈伯、井上侯などいふ面々が、當年膝を交えて萬丈の氣焔を鬪はした所でした。

▲大勢居るけれども誰一人妻のあるものはなく、柱には只一揃ひの袴羽織が掛つて居るばかり、出るにはそれを互に融通し合つて出る、他には葡萄酒罎や日本酒の菰冠りが有る丈けて、戻れば輙ちその口を抜いて痛飲する、放歌する。妻君の無い代りに朝から晩迄藝者が入浸つて嬌聲を洩して居ました。

▲築地に領事館があつたから外務省の屬官連中は大分此處に集つて居たもの、外交に便利な爲でもあろうが、一つは普請が新しくて奇麗だからでゝあつたてせう。伊藤公の醉枕窈窕美人膝、彼れが何しろ當時の政客の一大理想てあつたので、それをその得意滿面の梁山伯時代に於て實演して居たのだから堪りませんわ、(談片抄錄)

明治座評

醉美生

一番目の「先代萩」で仁左衛門の政岡は男優りといふとを見せようくとアセツた爲めか、口が堅く結びメてイヤに分別臭い顔をしてゐるのが

目立つ許りで發の妙味といふもののがチッとも受取れなかつた、殊に「跡には一人政岡が我子の死骸抱き上げ」のあたりは全くあの役の心持が分て居ない人の演り口だ。彼處は暫らく茫然と立ち盡して我とも人とも千松とも、又何事が起つたとも分らぬ心持て、張り詰めし心が弛んで大愁嘆に移る前の情調を充分味はせ「怺へ／＼し溜涙一度にソッと」て物狂はしきまでに嘆かねばならぬ處だ。然らざれば忠義と人情との葛藤を仕組んだあの劇の精神が滅却して了ふ。仁左衛門の演り口では何處までも「男優り」を主として「流石女の愚に返る」處がない。又所々に小細工を加へたのは感心出來ぬ。要するに柄にない役といふより外はあるまい。二役細川勝元は活歴式でやるのでもの大時代の狂言を打毀はして了ふとの非難もあるが、サラ／＼と演つて而かも急所／＼を抑えて居るのは流石だ。「ナニ相拷問、此奴神武以來珍らしい事を言ふ奴」と仁木を冷笑するあたりはお手のもの、「彈正、恐れ入つたか」も左團次の仁木位は恐れ入らする丈けの出來であつた。左團次の仁木はどうしても若輩といふ趣はあるが相當には演て居た。只刄傷の場は團藏の凄いのを見た後ではお話にならぬ氣のするのは止むを得まい。小團次の八汐は顔の作りが餘りに品がわるい、同じ憎さげにするにも今少し上等に出來さうなものだ。二役男之助もドッとしない。又五郎の沖の井。入汐を夢中になつて遣り込めやうとするのは熱心といへば熱心かも知れぬが藝としては今一段の工夫あつて欲しい。蓮女の榮御前。扇の骨の間から政岡の顔色を窺ふあたりは氣を入れて居るが其外は下膨れの顔をニコ／＼させて馬鹿にお人善しの榮御前になつた「夫に代る此發」のあたりも今少し威張り散らす心持少くとも威嚴を保つ様に演つて貰ひたかつた。中幕「幡隨長兵衛」で左團次の長兵衛は見物から「お若いの」と聲を掛けられさうだ。「ござゐやす」といふやうな言葉の終りをのみ早く言つて江戸兒らしく／＼しやうとして居るが他の科白廻しとの調和が取れなかつた。宗之助の權八は相當の出來で九藏の權八などよりは遙かによいが此人がこういふ役で得意になつて居ては將來はどうかと危まれる。二番目の「大經師」、脚本が已に近松の「柱暦」を採り過ぎた上に、警視廳のお咎めを恐れて脚本を作り直したので、妙なものになつて了つた。「偶然」が人間を操つて、腹の底に思ふてゐる事を事實として顯はして了つた悲劇は、此芝居に於ては「思ふ人に思はれず、思はぬ人に思はるゝ」方面のみを強く出すことになつた。仁左衛門の茂兵衛も矢張り分別臭くなつて、おさんにもお玉にも思はれてゐる人懐こしい人と見えぬのが疵だ。二役仁左衛門は顔の拵といへ演ることゝいへ細かくして達者なものだが腹の底から人を動かす所がない。あの優位になれば「旨い」といふ以上に何か附いて來てもよいと思ふ。宗之助のお玉。達者に動いて居る丈けてこれぞといふ處がない。蓮若のおさんは未だ危つかしい藝だ。又五郎の若狹は上方風の厭味らしいのは取柄かも知れぬが大經師として高貴の門に出入する丈の品のないのは慊らぬ。我藏の傳八大クスグリにてあの芝居を丸て毀はして居る。

新刊批評

▲倫理的帝國主義

浮田和民著
隆文館發行

浮田博士の十數年間の論文を蒐集したるものにして初めより一册として起草したるものにはあらず然れども博士は「常に時事を論ずるに當り成るべく歴史的に觀察し哲學的に結論せんことを勉め」られたるを以て全編を通して自ら博士の主義主張のある所を知るに難からず堅實なる讀み物として江湖に推奬するに足る(定價貳圓五拾錢)

▲人格の哲學超人格の哲學

朝永三十郎著
弘道館發兌

哲學上の論文八篇を收めたるものにして主として「個人主義對普通主義、主我主義對沒我主義の實踐問題、若くは此實踐問題の形而上學的歸趨點と見るを得べき人本說對、絕對說人格論對超人格論の純正哲學問題に關する」論を集めたり(定價一圓三十錢)

▲同胞三人

德田秋聲著
今古堂發行

「東京日日」に連載せられたりし長篇小說なり、氏の短篇に見るが如き一分の隙なき手際は見るを得ざるも例の落附きたる、底光りのする筆にていろ〱の人物心情を寫し出したるは流石に老手といふべし(定價一圓)

▲新秋

白柳秀湖著
金尾文淵堂發行

白柳秀湖氏の論文及小品十餘篇を集めたるものにして青年の活氣ある筆致と清麗なる文品とを見るべし(定價四十五錢)

▲屏東文集

國府種德著
隆文館發行

屏東の文集にして五十餘篇皆氏の性格及び感想を正直に語つて讀者の感興深し。只だ、文章としては時に生硬蕪雜なるもの〱少からざるを惜む(定價金五十錢)

▲筆草

大町桂月著
金尾文淵堂發行

桂月氏の文章數十篇を集めたり意見としては謬說と思はる〱ものあり文章としては悪達者と思はる〱ものなきにあらざるも著者の正直にして淡泊なる性情ばどの文章の中にもあらはれて絕えて悪感を抱くこと能はざらしむ(定價五十錢)

▲秀吉と家康

伊藤銀月著
千代田書房發兌

些か書きなぐりの氣味見ゆれど兩雄の性行を縱橫に論評して銀月一流の愉快なる所少からず(定價金六十錢)

▲理想の青年

阿部赤司兩氏共著
千代田書房發行

上卷は安部磯雄氏下卷は赤司繁太郎氏の著にして穩健着實の思想青年を益すること尠少ならざるべし(定價四十錢)

▲殘紅

小栗風葉著
千代田書房發行

「耽溺」「食ひもの」「長男」「好意」「同宿の女」「博士夫人」「夕化粧」「輾々」「訓導」の九篇を收めたり著者の修辭に對する苦心及び技巧の老熟は何れ

の篇にもあらはるゝ文章に志ある人反覆熟讀すれば其點よりして益を得ること決して少からざるなり「耽溺」など世に出でたる當時大方の惡評を買ひたるも文章の上よりいへば學ぶべき處極めて多きものたるを疑はず(定價八十五錢)

▲俚諺心理百話　浦谷熊吉著　弘道館發行

俚諺に對して心理的の説明を附し教育に適用するやうに書きなせるもの(定價金四十五錢)

▲六大先哲　帝國教育會編　弘道館發行

山鹿。山崎、中江、伊藤、新井、青木の六先哲に對する井上、三宅、大槻、三上の四博士及び谷千城子竹内錦洽氏等の講演を集めたり(定價金五十錢)

▲島の人　大倉桃郎著　千代田書房發行

詩味に乏しきか慊らずと感ずるものから全篇の結構戯曲的にして充分其道の讀者を面白がらせるに餘りあり(定價金六十五錢)

▲裏面觀的異説日本史　伊藤銀月著　千代田書房發行

本書は著者が「我國史の裏面を點檢して上代以降の現著なる異説を拾集し、之に自己の解説と批評とを加へ」たりと稱するものにして歴史上の眞價は學者の評に委ぬるとして讀物としてはなか〳〵に興あり(定價七十錢)

▲萬有唯理論　武田信順著　萬有唯理論發行所發行

一名通俗哲學と稱するものにして諸種の哲學上の問題を通俗に論述したり(定價金五十六錢)

▲冷灰二筆山窓夜話　江木衷著　有斐閣書房發行

「冷灰漫筆」の專ら法理法制の方面に重きを置いたものとは違ひ、これには文學的方面の感想錄がその半ばを領して居る、文體は相變らずの文體、思ひ切つた漢文直譯流の造語造句が交つて居るから、一部の讀者には兎角の批評もあらうが、それには本書開卷第一の「萬國無比の日本時文」の一章が十二分に防ぎ矢を放つて居る、成る程簡勁にして含蓄ある漢文の妙趣を邦文に移して失はざらんことの用意から來て居るもの、味ひ來れば決して不妥當のものではない、何は措いても飄逸の想を奇勁な語に寄せたもので、讀んで一種別樣の快味を覺える、若しそれ法理を説き法制を語るに至つては正に是に著者の御手のもの所謂の正議人を懾服せずんば已まざるの力がある、(定價金六十錢)

▲回顧二十年　警醒社書店發行

警醒社の創業二十年紀念として、同社に關係のあつた二十名の代表的人物を選び、その文章一篇宛を蒐めて編纂したるもの、有益なるもの、興趣あるもの取次に讀むに値する、中に德富健次郎氏の「七一雜報」といふのがあるが、久し振りて見た氏の詞藻相變らず豐麗名の如く健にして衰へざるものあるは、人意を強うするに足る

關東大賣捌所

東京神田表神保町　東京堂
仝　神田裏神保町　上田屋
仝　京橋尾張町　東海堂
仝　日本橋呉服町　北隆館
仝　本郷本富士町　盛春堂
仝　京橋鎗屋町　良明堂
仝　日本橋本石町　至誠堂

關西大賣捌所

大阪東梅田町　盛文館
仝　京町堀　太華堂
京都佛光寺　東枝書肆

◎壹冊定價　金貳拾錢外ニ郵税金壹錢五厘（外國郵税八錢）

冊數／國別	內國	外國
六冊	金壹圓貳拾錢	金壹圓六拾錢
十二冊	金貳圓參拾錢	金參圓拾錢

以上郵税共

▼但し特價號は規定以外別に代金を申受くべし▲

送金注意

一 郵便爲替にて御送金の場合は本郷西片町十番地反省社と指定し拂渡局を東京東片町局と指定せられなば途中盗取せらるゝの虞なし
一 弊社振替貯金口座は**東京三十四番**なりこれにより御送金の方は**登記料金貳錢**を加へらるべし然らざれば御送金の內より差引くにより端金となりて却て御面倒となるべし
一 郵券代用は必ず壹割增の事
一 前金切の節は帶封に朱書いたすべし後金を送られざれば其號限にて發送を止むべし
一 領收證を出さず望まるゝ向は返信料を添へらるべし

明治四十二年十一月廿六日印刷
明治四十二年十二月一日發行
（禁轉載）

發行兼編輯人　麻田駒之助
印刷人　天野耕一

東京市本郷區駒込西片町十番地
發行所（電話下谷九一九）反省社

東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地
印刷所　秀英舍第一工場


享和元年創業
日本ニ於ケル時計商之元祖
宮内省
御用達
D.K.
東京市京橋區八官町九番地
小林時計店
電話新橋一〇〇三
電信略語コ(ヌ)コハ
振替口座七八〇七
卸小賣
營業品
概目
時計附屬品、指環、簪、
帶留、ブローチ、手釦、
紀念品一式
最新の流行品目錄郵券
六錢封入御申越次第進呈す
紀念品
賞牌メタル
迅速廉價
金銀匠